

アンデスを越えて

山畑

勝美

- 1 -

- 2 -

目 次

1 アンデスを越えて

召 命

アンデスを越えて

ボリビア

幼子の死に迎えられる

伝道開始

エスペランサ新聞

恵みの雨

2 拾った聖書

拾った聖書

わたしについて来なさい

価なくして受けたもの

蟬の鳴き声

結 婚

3 原始林の中の歌声

南十字星

ここはお国を何百里

女子青年学級

山ブタ学校

4 北国への初陣

ぬかるみの道

ソープとスープ

どこの馬の骨

立って説教したい

サタンの罠

急げ、急ぐな

5 仕える道

カトリックとの対立

仕える者

見える交わり

キリスト教の神さま

地の果て

新しい枝の一つとなって

洪水

私たちは知っている

あとがきにかえて

南アメリカ地図

1 アンデスを越えて

召 命

昭和三十三年六月のある日、一通の手紙が私の手もとにとどいた。

その頃、私は北海道の美唄という炭砒町の教会で牧会していた。「南米ボリビアに派遣を予定されていた人が家庭の事情で行けなくなったので」もし貴殿にそのご意志があればこの仕事を引き受けていただきたい」という内容であった。差し出し人は日本基督教団海外伝道特別委員会としてあった。

それより一年ほど前、日本基督教団の機関紙「教団新報」に、ブラジルとボリビアへの派遣教師募集の公告が載っていたことがあった。この記事を読んだ時、私は、たしかにこれは私への召命に違いないと感じた。

開拓伝道を始めて七年、教会はようやく自立したばかりであった。何か心にためらいを感じながらも、召命に素直に従うことが私にとって一番大切なことであると信じて、この募集に応じたい旨を教団に書き送ったのであった。しかし、なぜかいつまでたっても返事は与えられなかった。

しばらくして、Z 牧師がボリビアへ派遣されることに決まったという記事を読んだ時、失望というよりも、自嘲に似た思いに

- 5 -

おそわれたのであった。頭から召命だと思いこんでいた自分が愚かに見えたし、少しでも気持ちに他にそらされ、美唄での伝道から心が離れてしまったことを恥ずかしいとさえ思ったのであった。

ボリビアがどういう国であるのか、そういうことさえなにも知らなかったのであるから、私の決心もいたって感情的なものであったのであろう。熱がさめてしまえば、それはほろ苦い思い出にしかならないものであった。

ボリビアのことも、そういう決心をしたということもすっかり忘れ去ってしまった頃になって、突然とびこんできたこの手紙の内容は、いたく私をおどろかせた。というよりも、なにかうらめしい感じをもたらしただけであった。やつと静まった心に、新しい波紋をまきおこしたからだだった。今さらボリビアでもあるまいし、一度消えてしまった情熱をかきたてることはむずかしい。私はいまいまいしい思いでその手紙に目を通していった。

「任地は瘴癘（しょうれい）の地であり、悪性の虫も多くいるということですよ」

任地というのはボリビアの日本人移住地のことを語っているのである。移住者と共に住み、彼らのために働く伝道者を求めているのである。けっしてよい話ではない。なみたいていの苦労ではつとまる仕事ではない。もしもこの手紙が、あの最初の決心の時に与えられていたならば、私は文句なしに引き受けていたろうに。今となつては、ちよつとやそつとでは心が動きそうにもなかった。重苦しい気持ちのままいく日かが過ぎていった。これはどういうことなのだろう。まさか私の気まぐれでもあるまい。たしかに、

今度は直接私にポリビアへいかないかと言ってきたのだ。一度失望を味わったあとであるから、断わる気持ちになるのはむずかしいことではない。しかし、どういうわけかそういう気持ちにもなれない。私は祈りの中で真実な答えを求めながら、いつしか自分自身の現在の姿を考え、反省しはじめていた。

七年の間、開拓伝道のさまざまな苦しみを味わい、多くの困難をのりこえて教会の自立を達成し、ようやく落ち着いたばかりのこの頃、私はいつしか恩寵になれ、恵みの座にあぐらをかきはじめてはいなかったろうか。苦難ではなく安易を求める気持ちが、若い私の心を蝕みはじめてはいなかったろうか。いまこうして、召命が具体的な事実として自らに迫ってきた時、なぜ私は素直に従えないのであろうか。

召されている場所は酷熱瘴癘の地であるという。私は、かつて太平洋戦争当時、転戦した南方の島々を思い出した。そのような場所の開拓者の生活がどんなに苦しく悲惨なものであるか想像できた。そこへ家族を伴って入って行く。思うだけでも慄然とするものを感じる。避けたい気持ちとすすんで受けていこうとする気持ちとが交錯し、心の中に激しい渦をまきおこした。

アブラハムはいくさきを知らないで出て行った。召命とはどういうことなのであろうか。いくさきを知るとか、何かたしかな手がかりを前途につかむこういうようなことを拒否する、そのようなきびしさを持つているように見える。もしも、ポリビアに召されているということが真実であるならば、私はどのようにこのきびしさをうけとめていくべきなのであろうか。

私はポリビアのことをもう一度調査してみた。けれども、さつ

ぱりくわしいことは解らないのであった。ポリビアという国の名を知っている人はごくまれであった。ほとんどの人にとってポリビアは未知の国であった。百科辞典からえられた知識が唯一のものでしかなかった。そして、その未知の国へ私はたしかに召されているのであった。

いく日も祈りはつづいた。なんとか納得のいく答えが与えられたいものと、どれだけ願ったかわからない。しかし、神はいつまでも答えてはくださらない。いつしか祈りにも疲れ、無気力になっていく自分に気がついた時、私はこの召命が逃れられない強い力で私に迫っていることを悟った。

神は私を求めておられる。どこにとり柄があるのかわからないけれども、この私を用いようとされている。もしそのことが真実であるならば、どうして私に神の意志を変えさせることができるだろうか。そのように理解した時に、私に与えられた答えは、召しに従うということだけであった。

いくさきを知らないで出ていくことは、私にとって、それは神への服従の決断以外のなものでもなかった。

神に従う。私はいつも講壇からこのことを語ってきた。「私に従って来なさい」とイエスがいわれる時、それは他のだれのことでもなく、私自身に語られる言葉として私は聞いてきた。そして、イエスに従う者の喜びを証しし、彼に従うところに救いのあることを語ってきた。そして再び、私自身にこの言葉が語られた時、私はどのようにこの召しに答えねばならないだろうか。

「主よ、私は今まで、すでにあなたに従ってまいりました。あなたはご存じのはずです」

このように答えてすまずことができるのであろうか。

召しに従うということは一度だけのことでなかった。日に新たに私はこの召しの声を聞き、服従の決断をしなくてはならなかった。もし、この新たな召しに、いま従うことができないとするならば、私はもはや服従を語る資格はない。私自身が伝道者でありたいと願うならば、まず私自身が従わねばならない。これが私のえた答えであった。

重く暗い霧が晴れて、すべてのことがはっきりとした形をとってみえてきた。もう迷うこともない。私は神が私を召したもう、たしかかな声を聞いていた。任地のことも、生活のことも、なにつくわしいことはわからなかったけれども、神のみにすべてを委ね、従う決心がついた時、なにも不安は残らなかった。

妻に自分の決心を伝える時がやってきた。教団から手紙を受け取ってから私たちはまだこの問題について具体的に話しあっていた。いかなかった。たとえ話しあったとしても、表面的な問題以外のところまでふれることはできなかったであろう。おたがい困難な問題に直面していることをよく知っていたし、生活のことも、仕事のことも、容易ではないということはあまりにもはっきりしていたからである。あるいは、おたがいに結論を出すことをおそれて、意識して避けていたのかもしれない。しかし、その間にそれぞれに深くこの召命について考え、祈り、自らの心とたたかてきたのであった。

「ぼくは十分考え、祈ったのだけれども、教団の申しでにに応じてポリビアに行くことにしたい。このことはきみには大きな犠牲をしいるようなことになると思うのだけれども」

- 9 -

「私も、あなたがこの問題でどんなに苦しみ、悩んでいたかよく理解しています。でも、あなたはご自分だけが召されていると考えてはいませんか」

「もちろんこのことは私一人だけの問題ではないと思う。それだからきみに相談しているわけなんだ」

「私も牧師の妻としていろいろ考えることがあります。この頃、生活も落ち着いて楽になり、教会や幼稚園の仕事も軌道にのってきて、なにかとても恵まれているような気がします。それだけに、こんなふうに神さまのお恵みに甘えていてよいのかしらと思うことがあるんです」

「それはぼくも同感だな」

「ですから、私、教団からの手紙を読んだ時、あなたと一緒に、私も召されているんだなと感じたのです。ただあなたの妻だからという理由だけだったら、とてもポリビアへいく勇氣はありませんわ。でも、恵まれている現在のことを考えると、私も神さまの召しに従うことで、お応えしなくてはならないと考えるのです」

「おたがいにそれぞれの信仰においてこのことを受けとめ、従う決心をするというわけだね」

「そうですわ」

「それではぼくはきみにあまり責任を感じなくてもよいわけだね」
「あら、そんなことないわよ。あなたはやはり私の夫なのだからどこまでも責任を持ってくれなければ困るわ」

「でも、ぼくがきみにポリビアへいく決心をおしつけたなどとはとで言われては困るからね」

「大丈夫。そんなことは言わないから。でも私の手だけはしっか

り引っぱっていったね」

私たちはおたがいそれぞれの信仰の決断としてこの召命に従う決心をした。夫がいくら妻もいく、そういう夫婦の自然なありかたではなく、たがいに独立した人格としてそれぞれの信仰においてこの召命を受けとったのである。

アンデスを越えて

ボリビアのごとはまるで雲をつかむような状態でなにもわからなかったし、どういう生活が私たちを待っているのか、どんな所で働くのか、なに一つたしかなことは私たちに示されてはいなかった。しかし、私たちはもうそのことについてなにも心配しなかったし、不安もなかった。一度決断したことであれば、あとはその道に従って出てくるものをしっかり受けとめていく覚悟さえあればよかった。移住者の中に入って生活し、伝道し、奉仕の働きをなしていく。それはあらかじめ考えて用意し、実行していくというようなわけにはいかないことである。とにかく移住者の中に入りこんで、その中において考え、見いだしていかなければならないことのように思えた。私たちがどのように用いられるのか、それは予測できることではなかったのである。

しばらくして東京へ出る機会があった。その時、国際キリスト教奉仕団の武間謙太郎氏に会った。武間氏は数年前に南米を旅行された際にボリビアの移住地を訪れておられた。日本から宣教師を送ってほしいという希望が現地の教会から出たのはこの訪問がきっかけとなったそうである。

- 11 -

武間氏は私になぜか現地の写真を見せてくれた。惨めな掘つ建て小屋に住み、困難な開拓生活を送っている移住者たちのようすが写し出されていた。そして、「とても人間の住めるような所とは思えない」と、その印象を語ってくれた。しかし、私は別段その話を聞いておどろきもしなかったし、おそれもしなかった。私たちはすでに主に従う決心をしていたことでもあるし、むしろ、そのような場所に召されることの意味を深く考えようとしていた。もし私たちの決心に個人的な夢や理想が介在していたならば、あるいは躊躇したかもしれない。主に従うということだけ、そのことだけが私たちの心を深く占めていたことがらであったし、そのことが私たちを夢にも考えなかった新しい道にふみこませたのであった。

私たちを送り出す教団でさえも現地の事情についてはほとんどなにも知っていなかったのであるし、任期とか待遇というようなことについても現地教会とまだなにも話しあっていなかったのである。いま考えるとずいぶん無茶な、無責任な話だと思われるけれども、その時の私たちの気持ちに障害になるようなことではなかった。召されているということ、このことが私たちの信仰において確かであるかぎり、どのような苦労にも耐えていくことができる支えを神から与えられるのだと私は信じて疑わなかった。

年が明けて昭和三十四年二月、教会を辞任するとすぐに出発の用意にかかった。移住地で仕事を始めるのに必要だと思われるものをまず集めることにした。こんな時、美唄の開拓伝道の経験が大いに役立った。現地が開拓地だということを頭に入れて、膳写版、紙芝居、石油ランプ、その他トランジスタラジオなども用

意した。こうして準備したものがどんな役割を果たすのか予測はつかなかったけれども、私たちはこれらの品々が有効に役立つように折りつつ荷物の中に納めたのであった。

ボリビアは暑いところだと聞かされていたので、着る物も、冬物ではできるだけすてて夏物を多く用意した。これはどうやら失敗したようである。というのは、五月、六月になると突然南風が吹き込んできて、真夏から急に冬に変わり、きびしい寒さを味わうようなことがおきるのである。おかげでひどい目に会うことになったものの、いずれにしても、私たちは原始林の中に掘って小屋を建てて、移住者たちと同じ条件の中で暮らすことを考えて準備を整えたのであるが、そのことはけっしてまちがいでなかった。

三月一日、私たち夫婦と三才半になったばかりの娘、恵美子は、横浜から海路、川崎汽船ペルー丸でボリビアへ向けて旅立った。

波止場には教団関係者と二、三の友人、そして家族の者たちが見送りにきてくれた。船と波止場を結ぶテープをしつかりにぎってたがいに無事を祈り合っている間もなく、テープは切れて波間に落ち、船は速度を増して港外へでていった。遠ざかっていく横浜の市街を眺めていると、なにか深い安堵に似た気持ち私の心を満たし始めてきた。主の手にすべてを委ねた私たちは、しばらくの時を待つだけでよかったのである。

船の旅は二カ月近くつづいた。途中、北米、中米を経てやがてチリーのアリカ港に到着するわけであるが、この船旅の長さは私たちにとっていささか苦痛であった。貨物船であったので船内にはなにより一つ旅の無聊を慰めるものはなかったし、狭い船室の中に

- 13 -

いつも閉じこめられ、ひたすら目的地に着く日を待ちわびるのみであった。この時から私たちは待つということを学んでいた。しかし、船速がどんなにおそく感じられようと、船は一路南へ南へと下っていき、やがて待望の日がやってきた。

四月二十四日、船の前方、朝もやの中に白茶けた岩肌を見せて一つの岬が姿を現わしてきた。海鳥が低く水面を這うように舞っている。岬の先端にはグアノ（鳥糞）がうず高く積もってまっ白になった小さな島が見える。そこを回ればもうアリカの港なのだ。

「ボーツ」と汽笛の太い響きをとどろかせながら船は左に大きく迂回を始めた。赤茶けた砂漠を背景に白い建物の目立つアリカの市街が見えてきた。やがて船速が目立ってゆるまったと思う間もなく大きな音を立てて錨がおろされた。私たちはとうとうアリカに着いたのだ。ここからアンデスを越えればもうボリビアなのである。

横浜を出てからちょうど五五日目の朝のことであった。

無事にアリカに着いたものの、それからどうなるのか皆目見当がつかなかった。現地の教会との連絡がどうなっているのか、はたして出迎えにきてくれているものなのか、さっぱりわからないままとにかく下船の用意をすることにした。言葉も十分通じないこの異国の港町に放り出される、そんな心配もないわけではなかったけれども私たちは落ち着いていた。

しばらくすると長身の一人のアメリカ人がランチからタラップを上って私たちのところへやってきた。迎えにきてくれたのだ。かれは三週間も前から船の着くのを待っていたという。入港がお

くれたので、そのまま長い間しんぼうして待っていてくれたのであった。メキシコから出した手紙がいき違いになったものらしかった。

道は備えられていた。しかし、かくれた所に私たちの気づかない犠牲がはらわれていた。この時、私たちははじめてペース宣教師を知った。かれは親切に私たちの下船を手伝ってくれた。

アリカに一泊した私たちは、明けて二五日早朝、空路ボリビアの首都ラパスに向かった。いよいよボリビアに着くのだと思うところなしに緊張を覚える。四月十九日にラパスではクーデターがおきたばかりだと聞かされて、不安定な政治状況のことを考えるといちまつての不安が胸中をよぎる。しかし、長い間待ち望んでいたボリビアについて足を踏み入れるのだという感動を私たちは身をもって味わっていた。

飛行場を飛び立つとももなく飛行機は雲の上にする。はるかかなたまで白々とつづく雲海の果てに富士山に似た美しい山が見えてきた。私たちは今アンデスを越えるのだ。この山のかなたに私たちの召された地があるのだ。そう思うといっそう身のひきしまるのを覚えた。

スチュアデスが酸素のパイプを座席にとりつけにきた。酸素吸入を必要とするほど高いところを飛んでいるとは思わなかった。はじめて乗った飛行機がめずらしいのか、はしゃいでいた恵美子は吸入器を口につけるのをどうしてもいやがるのでそのままにしておいた。ところがしばらくすると、「パパ、おなかがなんだかヒラヒラしてきた」青い所をして苦痛を訴えたので、なにもわからない私たちはすっかりあわててしまった。一体どうしたら

- 15 -

よいのだろうか困っていると、前の席に座っていたペース宣教師が急いで酸素パイプを恵美子の口もとにさし出してくれた。酸素を吸っていなかったたので酸素不足で異状をきたしたものらしかった。恵美子はまもなく元氣を取りもどして落ち着いた。

こうしている間、飛行機は雲海を越え、アンデスの山系深く入って飛びつづけていた。酸素吸入を必要とするほどの高度を飛んでいるのに、窓ごしにいくつもの山の嶺が見えてくる。下を見てもそんなに高いところを飛んでいるという実感はなかった。

窓ごしに見える下界の景色が異様なまでに殺伐としたものであることはいたく私の心を動かした。見はるかすかぎり茶褐色の荒れ果てた山の嶺々がどこまでも続いていた。一本の木の緑も見えない。全く死の世界にも似た荒々しさと厳しさをもった風景であった。どこにも人間の甘い感傷をよせつけない、とても人間が住めるとは思えない、そんな感じであった。ところが私はそこに不思議なものを見たのである。山麓のところに人家らしいものが見える。たしかに人が住んでいるのである。どうやってこのようなところで生活しているのか、水はどこから得ているのだろうか。それらしいもののなにつ見いだされないこの荒れた山中に、とても人が住み生活できえようとは思えないところに暮らしている人々がいたのである。私は不思議でならなかった。このような場所にも人間の生活がある。それは恵まれた生活条件の中にある者には想像もできない現実なのである。私はいまその上空を越えてボリビアに近づいている。私は食い入るようにその荒れた風景を眺めていた。

アンデスを越える。それは私にとって実に意味深いことであつたのだ。私たちが目ざしている場所における生活がどんなものなのかにもわからない。しかし越えつつあるこのような場所においてさえ神は人間に生きることを可能ならしめているではないか。この地上のどのような場所にも 神は私たちをかえりみてくださり、生き、仕える知恵と力を備えてくださるに違いない。私の目にうつる景色は厳しく、悲惨なものであつたけれども、従う者を支え、生かしてくださる神への信頼と希望は、ますますたしかなものとなつて私の心を満たしていた。

私たちはついにボリビアの土を踏んだ。ラパスの飛行場にはバルビエリ監督はじめ、教会の主だった人々が迎えにきてくれた。バルビエリ監督はボリビア式の暖かな抱擁で私たちを迎えてくれた。標高四千メートルのラパス飛行場は冷たく厳しい風が吹きつけ、希薄な空気が私たちの胸をしめつけるように息苦しい思いをさせたけれども、私たちを迎える人々の暖かな心はじかに身体に伝わってきた。そして、この日から私はボリビアメソジスト教会の牧師の一人となつたのである。

ボリビア

南アメリカ大陸の西部、太平洋に沿つて北から南にかけて五千キロメートルをこえる長大な山脈が走っている。これがアンデス山脈である。その高さにおいてはヒマラヤ山脈に劣るけれども、規模の雄大さは世界最大といわれており、アコンカグア、イリヤンフー、イリマニなどの六千メートルをこえる高山がその美しい

山容を連ねている。その中央部、アンデス山脈が横にもつとも大きな広がりを示す部分にボリビアがある。周囲をペルー、チリー、アルゼンチン、パラグアイ、そしてブラジルの五ヶ国にかこまれ、海への出口をもたない内陸国である。ボリビアの面積は一一〇万平方キロメートル、日本の約三倍にあたる。人口は少なくとも三五〇万人を数えるだけである。一平方キロメートルあたり三人といったところで、日本とは比較にならないほど少ない。国土の半分かかぐがアンデス山脈の中にふくまれる。古いインカの伝説に富む、世界でも一番高い所に位置する湖、チチカカ湖はここにある。国の東半分はブラジル国境までセルバと呼ばれる原始林におおわれている熱帯性地帯である。

ボリビアの主要産業としては錫、銅をふくむ鉱業をあげることができよう。かつてはその錫生産額において世界一を誇った時代もあるが、いまは昔日の面影は失われてしまつてゐる。

サンタクルス州には優秀な油田が発見されているがまだ開発途上にある。農業はサンタクルス州を除いて見るべきものはない。一つ興味をひかれることは、日本では一般に知られていないことであるけれども、アンデスの山岳地帯がじゃが芋の原産地だということである。また、トーマロコシなどもその原種はこの地方から生まれたものだそうである。

ボリビアの人口のうち、約六五パーセントがケチュア族、アイマラ族などのインディオで、大部分が山岳地帯の高地に住んでいる。一般に農業を営んでいるが非常に貧しく、かれらの九〇パーセントが文盲だといわれている。これらのインディオたちは人種的に非常に日本人に近く、顔も日本人によく似ているところがあ

るし、乳児の尻には蒙古斑が見られる。アイマラ語などはその文法的構造が日本語とそっくりなところがあって興味をひかれる。

インディオの他にメステイソと呼ばれる混血系の人々が二五パーセント、そして、残りは旧スペイン系植民者の子孫や、国外からの移住者などで占められている。ごくわずかではあるが半裸の土人がセルバの中に住んでいる。

インカ帝国がスペイン人ピサロによってあつけなく征服されて以来三〇〇年の間、ボリビアはスペインの植民地としてその苛酷な支配の下におかれてきた。一八二四年、シモン・ボリバルによつてはじめて独立をかちとつたのであるけれども、以来現在に至るまで、一四〇年の間に繰り返された革命の数は数えるに疲れるほどである。そして、革命はごく一部の支配層の人々の間で行なわれ、いまだに土着民族であるインディオと呼ばれる人々、つまりケチュア族やアイマラの人々が革命の主役を演ずる機会は訪れていないのである。

ボリビアの宗教は主としてカトリックであるが、別に国教というわけではない。この国においても宗教の自由は憲法によつて保証されており、かつて公然とおこなわれた宗教的迫害も現在はまったく姿を消してしまっている。

スペインの植民地時代、インディオたちはカトリック教徒になることを強制され、拒否することはかれらにとつて死を意味することであつた。現在、かれらのほとんどがカトリックであるけれども、かれらの信仰の内容はまったくキリスト教とは似て非なるものである。外衣はカトリックであるけれども中味は古来の民族宗教そのままなのである。

- 19 -

新教徒はここでは一般にエバソヘリコと呼ばれており、多くの異なつた教派の教会が活動している。これらの教会は大半がフアソダメンタルであるが、主な教派としてはメソジスト、バプテスト、アセンブリー、その他にインデアンミッションと呼ばれる教会がある。信徒数はカトリックにくらべればごくわずかなものにすぎないけれども、どのような辺境に行つても新教の教会の活動は顕著に見られる。

一八七七年、アルゼンチンから一人の聖書普及員がボリビアに入国し、各地で活発に聖書の頒布を行なつた。しかし、かれはカタガイカという小さな村に至つた時、カトリック司祭に扇動された村民たちから迫害され、ついに石で打ち殺される運命にあつた。当時、ボリビアの憲法および刑法ではカトリック以外の宗教活動をする者は死刑に処せられるということが定められていたのである。

一八九九年に憲法が改正され、宗教の自由が認められるまで、どれだけ多くの尊い生命が福音のために献げられてきたかわからない。

一九〇六年にハリングトン宣教師によつてラパスに学校が開設され、ボリビアの教育界に新しい息吹きを吹き込むとともに、はじめて公的な伝道活動が始まつた。そして、これがボリビアメソジスト教会の始まりとなつたのである。以来ボリビアメソジスト教会は、主として学校教育に力をつくし、多くの有能な人材を政財界に送りだしてきた。しかしながら長期にわたる活動にもかかわらず、教会としての発展は実になかなかで、第二次世界大戦終了時における会員数は五〇〇名をわずかに越える程度にとどまつて

いた。これはカトリックの影響力の強い社会の中での伝道がいかに困難であったかということも一つの理由には違いないが、活動の重点が主として学校にのみおかれていたことにもよるのである。

第二次世界大戦が終わり、世界の情勢が大きく動くにつれて、ボリビアの社会情勢も、封建的社会から脱皮して新しい世界に順応していきうという動きが始まった。その以前、世界一の産出量を誇った錫鉱山は財閥によってすべての利益を占有されていたので、ボリビアはいつも貧しく、黄金の座にすわる乞食とさえいわれてきた。

一九五二年、一般労働者、農民を背景とする国家革命運動党による革命が成功し、鉱山は国営化され、農地改革も行なわれるに至って、ボリビアは大きな変貌をなしたのである。政府は新しい農業政策の重点をサンタクルス州におくばかりでなく、日本、沖縄からの移民を受け入れ、また国内的にも、山地のインディオたちをサンタクルス州へ移住させ、新たな植民地育成に力を注ぎはじめたのである。

このような情勢の変化は教会にも大きな影響を与えずにはおかなかった。この頃からボリビアメソジスト教会は伝道の重要性に目覚め、多くの伝道宣教師が迎えられた。そして、ボリビア人牧師の育成に力が注がれると共に、アルティプラノ（高原地帯）のインディオ伝道、サンタクルス州の農業地帯における伝道が大きくなりクローズアップされるようになったのである。

一九五九年、私たちがボリビアに入国した当時、サンタクルス州の伝道はようやく緒についたばかりであった。

幼子の死に迎えられて

ラパスに一週間ほど滞在して、入国の手続きや荷物の通関をすませた私たちは、そこから陸路アンデスの高原をぬけ、高さ五千メートルをこす山路を経てコチャバンバに向かった。コチャバンバはラパスから四〇〇キロメートルほど南に下ったところにある高原都市の一つで、ラパスとならんでボリビアメソジスト教会のもう一つの活動の中心がここにおかれていた。町の高さは二五〇〇メートル、ラパスと違ってだいぶ息苦しさも和らぎ、はじめて見るアンデス山岳地帯の珍しい風物を楽しむ余裕もでてきた。

コチャバンバに着いた翌日の朝、長い間留守にした家のことを心配して、私たちをこの町で働いているマクレリー宣教師に託して、ペース宣教師は一足先に飛行機でサンタクルスへ発つていった。その頃、かれの留守宅には思いがけない悲劇が起こっていたのである。

この日の朝、家の前にとめてあった小型トラックの背後で遊んでいたペース宣教師の次男リチャードが、不注意にもそのままバックした車の下敷きになってしまったのであった。ペース宣教師がサンタクルスに着く少し前のできごとである。かれは一ヵ月ぶりにあう子供たちのためにいくつかの玩具を腕にかかえて、かれらの顔を見るのを楽しみに出かけていたのであった。

この知らせをコチャバンバで受けた私たちはあまりのことにしばらく呆然としてしまった。さっそく、次の日の飛行機でサンタ

クルスへ向かうことにきめたのであるけれども、私たちの心は、たんに未知の世界に飛び込んでいくということだけでなく、この思いがけない、厳しいできごとのためによりいっそう強くひきしめられることになったのである。

コチャバンバからサンタクルスまでは空路一時間ほどの距離である。殺風景な山岳地帯をぬけてすこし東に下ると景色は一変して果てしない緑のセルバ、原始林となる。そのセルバの一角にサンタクルスの市街が見えてくる。高度を下げた飛行機の窓から椰子の葉で葺いた小屋らしいものがいくつか見えてきた。人影も見える。

「ごらん。あそこに家があるよ」

そう妻に語りかけていた私は本当にそれらは森に住む土着の人の家だと思っていた。まさかそれらが一般の人の住む家であり、私たち自身もそのような家に暮らすようになるとは夢にも考えはしなかったのであった。

サンタクルスの飛行場から指定されたホテルまでタクシーを雇う。窓ガラスは割れ、シートも板張りのおそろしくボロのタクシーであった。急に幾世紀か後退したようなおどろきを味わいながら、古ぼけた町中を通ってそのホテルらしきところに落ち着いた。しばらく待っていると迎えるの車がやってきた。五〇キロメートルほど離れたモンテローロという町までいくのだそうである。なにがなにやらわからないままに車は私たちを乗せると走りだした。道はどこまでもまっすぐに続いている。見わたすかぎりの草原があったかと思うと、次には原始林の緑の茂みが目に間近く迫ってくる。なにかまだ夢心地でいる私たちにはボリビアの広さは実感と

- 23 -

して身に迫ってはきていなかったけれども、この広漠とした景色の中に置かれて、ついに私たちはボリビアに、私たちの召されている場所に着いたのだという感じがひしひしと身に迫ってくるのを覚えるのであった。

五月五日、はじめてモンテローロに着いたその日、それは幼児リチャードの葬いの日であった。まだ二才になったばかりの可愛い子供を突然の事故で失ったペース宣教師のことを思うと私たちの心は重くなる。しかし、かれはコチャバンバで別れた時と同じように笑顔で私たちを迎えてくれた。はじめて会うかれの妻エベリンも、その悲しみを覆いかくして優しく私たちに手をさしのべてくれた。この二人になんと挨拶したらよいのか言葉を見いだすことはむずかしかった。

やがて葬式も終わり、私たちはリチャードの棺をかつぐ人々に従って墓地に向かった。声をだす者はだれもなく、深い悲しみが人々の心を重く支配していた。深く掘られた墓穴にその小さな棺が降ろされ、ネギイ宣教師が白と赤のバラをその上に落とした。

「この花のように、み国において主の冠の飾りとなりますように」
低い声で祈る祈りの言葉が胸にしみこんでくる。

「アディオス、リチャード」

棺の上に土がかけられる間、口々に人々が告げる別れの言葉を聞きながら、この幼子の死によつてこの地に迎えられたことを私たちは意味深く受け取っていた。そしてこの日から私たちはこの悲しみの家に共に暮らすことになった。

サンタクルス州は、ボリビアの東部、ブラジルとパラグアイにその境を接するボリビア九州の中の最大の州である。その面積は

三七万平方キロメートルで日本全体がすっぽり入りこんでしまう大きさである。アンデス山脈にかかる一部分を除いて、ほとんどの地域は原始林に覆われている。この広大な地域に住む人口はわずか三六万人程度である。一部にはいまだに原始的な生活をつづけている半裸の人々も住んでおり、州全体が未開発の状態におかれている。

主都サンタクルス市は建設されてからすでに四〇〇年を経ているが、長い間交通路が開かれなかったために陸の孤島の如き存在として発展を見ることはなかった。

革命政府によって、新しい農業政策の焦点がサンタクルス州にあてられるようになって、この広大な地域が、ボリビアの新しい発展を約束する希望の地として、はじめて大きく浮かび上がったのである。アンデスの山岳地帯をぬってコチャバンバ、サンタクルスを結ぶ新しい道路が建設され、ブラジルそしてアルゼンチン両国との間に鉄道が敷設されるに至って、長い間かえりみられることのなかったサンタクルスは、一躍時代の脚光を浴びるにいたったのである。

サンタクルス市から北方に五〇キロメートル、そこにモンテローロという町がある。人口一万ほどの小さな町であるが、国営の製糖工場が建てられ、かつては眠ったような町であったが、新しい発展の中心となりつつある。

モンテローロから右に折れ、東に四五キロメートルいくとそこは沖繩コロンビアである。左に道をとって七五キロメートルほど西にいくと、ヤパカニ河に沿ってサンファン移住地がある。私たちは、日本本土からの移住者の住むこのサンファン移住地に入って働く

- 25 -

ことになるものとばかり考えていた。ところがボリビアメソジスト教会は沖繩コロンビアを私たちの任地として選んだのであった。これはまったく予想もしなかったことであったけれども、私たちはそこに主旨のあることと信じてこの任命を受けた。

サンタクルス州の開拓伝道は数年前から始められており、一九五八年、私たちが到着した前年にモンテローロに中学校が開設されたばかりであった。まだその頃はカトリックの妨害も激しく、宣教師たちの働きは困難を極めていた。

ペース宣教師はその中学校の校長として働きながら地道な伝道を続けていた。かれは私よりも若かったけれども、さながら長兄のように細かに私たちのめんどろを見てくれた。リチャードの死がどんなに深い悲しみをかれら夫婦にもたらしたか計り知ることはできない。けれども、かれらは私たちにその悲しみをすこしも見せなかった。そして、かれらの暖かな心づかいの中で、慣れない異国の生活に私たちもだんだん慣れ親しんでいった。

スペイン語はまださっぱりわからず、英語も十分でない私たちにとつて、かれらとの六カ月にわたる同居生活はけっして楽なものではなかった。一緒になかよく暮らすことができたのは、ひとえにかれの忍耐づよい配慮によるものであった。私たちはいつしかお互いに兄弟のような親しさを感じあうようになっていった。とくにエベリンは妻をいたわってくれた。言葉が思うように通じないので時々おかしいこともおきた。

「ねえ、あの人たち、よくコロッケ、コロッケというけど、今夜のおかずはコロッケでも作ってあげようかしら」
「コロッケだって？」

「そうよ。よくわからないけどエベリンがコロッケ、コロッケと
いうのよ」

「まさか、コロッケというのは日本独特の名前なんだよ」

「でも変ねえ」

よく聞いてみると、どうやらクレオ・ケというのをコロッケと
聞き違えているらしかった。クレオ・ケというのは「……」と
思います」という意味なのである。

その晩の食卓にコロッケがでてかれらを喜ばせたのであるが、
訳を聞いて皆大笑い、楽しい食事になった。

この家の夕食はいつもスープにパンだった。スープといっても
残りものを一緒にした雑炊のようなもので、これと毎朝のオート
ミールが私はだいきらいであった。あまり喜んで食べようとしな
い私のそばで、妻は「おいしい、おいしい」といってよく食べ、
私をカバーしてくれた。

ある日、冗談に、「スープは貧乏人、オートミールは病人の食
物だ」と私がいうと、ペース宣教師は私の顔を見て笑っていった。

「君は幸せな男だ。良いワイフを持って」

かれはなにもかも知っていたのだった。

伝道開始

戦火に荒らされた沖縄から、最初の移民団がポリビアに渡って
きたのは一九五四年の八月のことであった。

最初の移民団、約四〇〇名はリオ・グランデ河東岸に新しい植

- 27 -

民地をつくった。しかし、不幸なことに入植間もなく黄熱病が発
生し、それに加えて洪水に見舞われるなどの悪条件が重なり、他
に移住地を求めなくてはならなくなつて、別な場所に移動を余儀
なくされたのであるが、そこも立地条件が悪く、三度定着地を求
めて、血のにじむような労苦をくりかえしながら、ようやく現在
地に落ち着いたのは一九五六年のことである。

原始林を切り開き、土地区分をして道路をつけ、移住地らしい
体裁を整えてはいたが、私たちがこのコロニアに入った頃はまだ
外部から人が入って住めるような状態ではなかった。

コロニアの広さは約一万五千ヘクタール、一戸あたりの配分耕
地面積は五〇ヘクタールであった。広い地域にわたつて、それぞ
れの配分地に仮小屋を建てて住んでいる移住者たちは、原始林の
中に埋没してしまい、おたがい遠く離れて生活しているので、
隣どうしですらもおたがいの顔を長い間見ることがないような生
活であった。

私たちはこの沖縄コロニアに入つて働くように任命を受けたの
であつたけれども、どこにも手がかりはなく、どうやってこのコ
ロニアに入つて住むことができるようになるのかいかにも見当が
つかなかった。ペース宣教師の話によれば沖縄コロニアの組合長
をしている人はバプテスト教会の会員であるということであつ
た。この人に会えばなにか便宜をはかつてもらえるかもしれない
と考えてかれを訪ねてみた。

「いや、私はバプテストではありませんよ。それはたぶん私の友
人のことなんですよ」

なにか要領をえない返事であつた。ペース宣教師が以前に訪ね

た時は、かれはたしかに「私は新教です」といつて援助を求めたというのである。しかし、この不可解な組合長の態度も間もなく理解することができた。それは、私たちがこのコロニアで働くようになるということが知られて、すでにカトリック教会が動きだしていたのである。その頃、かれらはモンテロー周辺でメソジスト教会の新しい活動が始まる毎に、それに対抗する動きを示していた。

Ｚ組合長にはいろいろな利害がからんでいた。かれは「エバンヘリコ」（新教）と自称することによってなにかの利益を得ようとしていたに違いなかった。けれども、カトリックの働きかけが始まると急に態度を変えた。カトリックに味方することによってより多くの利益を受けることができると思えばんをはじいたに違いない。かれは間もなく公然とカトリックを支持するようになり、同時に私たちの働きに対して強い圧力を加えるようになったのである。

カトリック教会はすでに、コロニア中央の本部用地内に敷地を与えられて会堂を建てる準備を始めていた。私たちもなんとかしてコロニア内に土地を得て、そこに住んで伝道したいと願ったのであるけれども、組合長の冷たい態度にはとりつくしまもなかった。

そこである日、私たちは琉球民政府サンタクルス駐在所長Ⅰ氏を訪ねてみることにした。しかし、「Ⅰ氏は熱心なカトリック信者であったから話がうまくいくわけがなかった。かれは冷たく私たちを迎えてこういった。

「ボリビアはカトリック教国です。コロニアにもし新教が入ると

- 29 -

すると対外的にもおもしろくないし、また内部で二つに分かれる心配もあります。いま一つにまとまっていかなければならないコロニアが宗教的対立抗争のために二つに分裂するようなことがあっては困るのです。琉球民政府はボリビアにいる沖縄移民がカトリック一本でまとまっていこうと望んでいます。山畑さんは日本コロニアで働いたほうがよいでしょう。沖縄コロニアに入って布教しないでいただきたい」

私にはかれの意図していることがよくわかっていた。けれども、そのままひきさがるわけにもいかなかった。コロニアのなかには新教の信徒もいるかもしれない。カトリックを望まない人もいるに違いなかった。宗教の自由の認められている国に移住してきて、どんな理由があるにしても、これらの人々が自己の意思に反して特定の宗教を押しつけられてよいわけがない。ましてや、琉球民政府がそのような方針で移住政策を実施するとは考えられなかった。

私はⅠ氏の意向にそえないこと、ボリビアメソジスト教会の牧師として、教会の伝道方針に従って独自に行動することを述べてそこをひきあげた。

結局、私たちは振り出しにもどってコロニアの伝道のことを考えなくてはならなかった。これからはコロニアの人々に直接ふれて道を切り開いていかねばならないし、どんな妨害を受けるかそれもわからない。しかしたとえどのような困難があるにしても神はかならず道を開いてくださるであろう。閉ざされている門をたたきながらその時を待つ覚悟はすでにできていた。

コロニアには中央と北部とに二つの小学校があった。学校と呼

ぶにはあまりにも惨めなひどい建物であった。壁も満足についていない豚小屋同然の校舎の中で泥とほこりにまみれて子供たちは授業を受けていた。これらの二つの小学校で教えていた二人のポリビア教師がエバンヘリコであったのは幸いであった。私たちはかれらと親しくなると共に、それぞれの学校で毎週子供たちのために歌を教えたり、話をしてやることになった。北海道の美唄で初めて開拓伝道を始めた時のように子供たちへの伝道が最初の仕事となった。

コロニアの中にはまだなにも子供たちの心を楽しませるものはなかった。初めて紙芝居を見たという子供も多かった。沖繩にいた頃でも紙芝居を見る機会はなかったのだろうか。ポリビアにきてほとんど歌を唄うこともなかったらしい。どんなにしても、唄のように皆だまりこんでいたが、紙芝居の画面を食い入るように挑め、小さな手を固く握りしめて話に聞き入る子供たちであった。回を重ねる毎にかれらの表情はすこしずつ変わっていき、その瞳に明るい光がさしてくるようであった。

コロニアの指導者たちの態度は相変わらず冷たかったけれども、私たちの訪問をこころ待ちにして迎えてくれる子供たちは、私たちにとって大きな慰めであった。コロニアを訪れる時はいつも車と娘といっしょであった。いわば家族ぐるみの伝道である。妻が歌の指導をすると私が話をする。彼女がゲームの方を受けもてば私は紙芝居屋になる。その間、娘の方は生徒の一人になっている。こんなふうにして私たちのコロニア訪問はつづけられていった。

学校を訪問して子供たちとの楽しいひとときが終わると、私た

- 31 -

ちはさつそく付近の家庭の訪問にかけた。すこしでも多くの人と知りあい、私たちの働きを理解してもらいたいと思ったからである。このような時、たとえ週に一度でもペース宣教師が運転手をつけて私たちに車を貸してくれたのはありがたかった。まだ私は車の運転を知らなかったのである。

エスペランサ新聞

その頃、コロニアの中でラジオを持っている家庭は一つもなかった。もちろん新聞などもあるわけではない。かれらの生活は文明世界からまったく隔絶した生活であり、文字どおり原始林の中に埋没してしまっていた。

私はかつて海軍の通信兵であった頃、毎日、新聞電報を受信しては部隊内部にニュースを提供していたことがある。だれでもニュースを知りたい。世界のできごとについて知りたいと思う。ましてこのような原始林の中に暮らし、遠く祖国から離れておれば、日本のできごと、世界のできごとを知りたい気持ちはいっそう強まるものである。しかし、このコロニアの生活はまったくそういうた外の世界とは縁がなく、ニュースの窓は閉ざされていた。

私は自分の小さな体験がここで役にたつことを知った。小さな新聞を作って配付してみよう。この新聞が閉ざされたコロニアの生活に、広い世界への窓となつて役立つように、そしてここに住む人々がこの新聞を通して福音にふれる機会が与えられるように、こんな願いをもって私は新聞を作ることにしたのである。ようやく日本から持ってきたラジオ、テープレコーダー、印刷用具が役

にたつ時がやってきた。

朝五時、まだ夜は明けずどこも真暗闇である。その頃南米向けの日本語放送がはるか東京から送られてくる。ニュースの取材はこの放送からすることにした。

モンテローの宣教師館にはまだ電気はついていなかった。うす暗いローソクの光の下でラジオを聴き、録音をとらねばならない。他の人の眠りを妨げないように静かに仕事をしなくてはならない。しかしそれよりも、眠い目をこすりこすり周波数をあわせ、録音をとるのはらくではなかった。いつの間にか机に伏せて眠りこんでしまつて、明るくなるまでテープレコーダーを回し、電池を使い切ってしまうようなこともしばしばであった。

このようにして一週間のニュースを録音すると、その中から目ぼしいものをえらんでまとめ、二ページだての新聞ができあがる。もちろんそれに小さな勧めや聖句の説明などを入れることも忘れはしなかった。新聞の名前は「エスペランサ」とした。「エスペランサ」とはスペイン語で「希望」という意味である。それは、この新聞が少しでもコロニアの人々の希望のしるしとなるように願っていたからである。

私たちはこの新聞をもつてコロニアを訪問するようになった。二つの小学校で子供たちに配る。道であう人に手渡す。訪ねた家では名刺代わりに出す。このようにしてできるだけ多くの人にこの新聞を配るように努力した。配付枚数は週毎にふえていった。そして、コロニアの人々がこの新聞をこころ待ちにするようになったことを知ったのはそんなに遠いことではなかった。

週に一度のコロニア訪問がどれだけの効果をあげていたのかそ

- 33 -

れは私たちには解らなかった。しかし、子供たちは喚声をあげて私たちを迎えてくれるようになったし、見知らぬ人から路上で新聞を求められることもあった。

ある時、モンテローを訪れた黒人牧師夫妻をコロニアに案内したことがあった。わりと年輩の落ち着いた感じのご夫婦であった。車がコロニアの中に入つてしばらくして、ふと気がつくと、奥さんがニコニコして通りすがりの人々にしきりに手をふつておられる。そのうちに妻に向かつて「あなたも手をふらなければだめよ。小さいことのようにだけれども大切なのよ」と注意してくれた。私たちもあわてて手をふり笑顔を道いく人にふりまくようになった。

Ｚ組合長はすでにカトリックの旗色を鮮明にしていた。カトリック教会はかれの強い支持で会堂工事も始まつていた。組合長名で児童の洗礼志願者を募る通達がコロニア中にだされたのもその頃のことである。コロニアに私たちを入れまいとする動きが顕著にはじめていた。

このような時、毎週の小学校訪問と新聞配付が思いがけない効果をあらわしてきた。コロニアの人々の中に、私たちの働きを理解し、その働きがコロニアのために必要なのだと考える人々がでてきたのである。私たちの知らない間に組合長に対する働きかけがかれらの間で始まつていた。新教にも土地を与えよう、そういう声が強まつてきた時、またそれに対する抵抗も強くなつてきた。ある日、いくどかの訪問で親しくなつたある家庭を訪れたところ、いままでとは違つたそらぞらしい態度で迎えられた。理由は解らなかつたけれども、私たちの訪問を喜ばないようすが明らか

に見えた。あとになって解ったことであるが、私たちと親しくするならばコロナから追放するというようなことを、組合長がいったらしいのである。そういうことができるわけもないけれども、こうした蔭の発言が私たちとコロナの人々との交わりにブレーキをかけたのは事実あった。そして長い間、私たちは反組合的な存在として眺められ、この誤解を解くために苦しい思いを強いられたのである。しかし、そうしたおもしろい空気の中でも私たちの訪問は続けられていき、支持してくれる人の数もふえてきた。数カ月経って組合総会が開かれた時、これらの人々の主張が通って、私たちにもカトリック教会と同じ条件で教会を建てる土地を与えようということが決議された。

一駐在所長がこの知らせを聞いてあわててコロナにかかけ、組合長に文句をつけたらしかったけれども、もうすでにあとの祭りであった。総会の決定を変えることはできなかった。

恵みの雨

カトリック教会はコロナの中央にある本部用地の中に会堂を建てた。Z組合長はできるだけ私たちをカトリック教会から離れた所におこうと考えたらしい。東にすこし寄ったところに墓地があつて、そこに隣接したまだ原始林のままの土地を私たちに提供しようといった。たぶんそうすることによって地理的にも私たちに不利にしようと考えたのであろう。しかし、この場所があつたことによって私たちの働きのために最も適当な場所になろうとは夢にも思わなかったことに違いない。

- 35 -

その土地にブルドーザーが入って約一ヘクタールの土地が整地されたのはそれから間もなくのことである。そして私たちはまず家を建てなくてはならなかった。

家を建てるといっても十分な予算もなく、また土地の事情になれていない私たちにはどうやって家を建ててよいのかまったくわからなかった。

コロナに住む人々の家は、丸太を組み、モタクーと呼ぶ椰子の葉で葺いた屋根、壁はモタクーの葉を編んだものや、檳榔子の幹を四つ割りにして平らにしたものを打ちつけてあつたりで、まだ板を用いている家はすくなかった。家を建てる時は、コロナ内ではみな共同作業でたがいに助けあつていたので、私たちのように外部からいきなり入ってきて家を建てようとしても助けもらうわけにはいかなかった。ボリビア人を雇おうと思つたが付近に住んでいるボリビア人はいなかった。途方にくれていると、幸いに請け負いで家を建ててやろうという人がでてきたので、やつと家が建つことになった。

十月の末になって、待望の家ができあがつた。家と言っても、コロナの他の家々と一つも変わったところはない。同じようなモタクー屋根の堀つ建て小屋ではあつたけれども、壁だけは全部板でかこい、窓もつけ、床も板敷きにしてもらつた。板といつても鉋がかかっている荒板である。それでも、コロナの中では一番立派な家ができあがつた。日本のどこへいってもこんな牧師館はないだろう。物置でももっとましなものだろうと思われた。けれども、私たちにとってこの家はなんとすばらしく見えたことであろう。これでいよいよコロナに入って住むことができるの

だ。そうすれば私たちもコロニアの人々の仲間入りができる。そして腰を落ち着けて仕事ができるのだ。他の人々の家に比べればわが家は板でかこつてあるし、窓もついている。それだけでもぜいたくだと私たちは思っていた。

十一月上旬、私たちはコロニアに移動した。ボリビアに着いてから半年経っていた。

新しい家に移る、そして、たとえどんな粗末な家であつたにせよ、親子三人みずいらずで暮らせるようになることはうれしかった。そのうれしさにとりまぎれて大事なことをいくつか忘れていた。第一に水をどうして手に入れるかということ、野菜がコロニアの中では入手できないということである。

組合には購買部があつて、塩や砂糖、メリケン粉など、ある程度生活に必要なものは売っていたけれども、野菜は売っていなかった。米も店で買うわけにはいかないので個人的に頼んで分けてもらうより方法がなかった。コロニアの中では売るほど野菜を作っている人はいなかった。結局、一〇〇キロメートルはなれたサントクルスの市場まで籠を下げて野菜を買いにいかなければならなかった。雨が降れば道が悪くなってバスも通らなくなる。ひどい時には二週間ぐらい交通が途絶する。こんな時は青物はおろか他の食糧まで不足してしまう。台所をあずかる妻が溜息をつくようなことがしばしば起きた。しかし、彼女は愚痴一つこぼさないで頑張ってくれた。

コロニアの中には、不思議なことに井戸が一つもなかった。ここでは井戸を掘っても塩分を含んだ水しかでてこなかったからである。飲用にはまったくならなかった。コロニアの人々はどころ

- 37 -

どころの凹地（彼らはポーソーと呼んでいる）に溜っている水を汲んできて飲用にしていた。その水は黄色く濁った泥水である。場所によっては落ち葉の色がでて紅茶のような色をしているものもあつた。人々はポーソーの水は甘いといっていた。井戸の塩からい水を飲むよりははるかによかつたのである。

私たちの家から一番近いポーソーまで三キロメートルあつた。小さなバケツ一つでも三キロメートル先から水を運ぶのはつらい仕事だった。だれも私たちに馬車を貸してくれない。自転車も持っていない。私たちには水を運ぶ方法がなかった。そして水がなくては生活ができない。大喜びでコロニアに移ってきたものの、その日から飲み水にことかくようになってしまった。

ペース宣教師は見かねて、モンテローロから水を運んでやろうといってくれた。そして、五〇キロメートル先のモンテローロから週に一度、ドラム缶一本の水を運んでもらうことになった。そのうちに雨でも降れば、敷地内にブルドーザーで掘り下げた所に水が溜るだろうし、たとえ泥水でも飲用に使えるようになる。それまではドラム缶の水を大切に使うことにしてこの急場をしのぐことになった。

ボリビアの十一月は非常に暑い。家の中でも三十六度を越す、戸外では五〇度にもなろうかという暑さである。そのような時には二〇リットルの水で親子三人が一週間を過ごすのは容易なことではなかった。それでもバケツを下げて三キロメートル先から泥水を汲んでくるよりはましだった。たとえそうしたとしても、必要な水を手で運ぶにはすくなくとも毎日一二キロメートルは炎天の下を歩かねばならなかつたであろう。

水を節約するために私たちはどんなに汗をかいても、体が汚れても、行水を使うことすらできなかった。顔を洗い、口をすすいだあとの水でせいぜい体をふく程度であった。

一カ月過ぎても雨は降らなかった。水の補給も遅れがちになる。ドラム缶の水も残り少なくなったある日の午後、急に天候が変わった。黒い雲が南の方から押しよせてきたかと思う間もなく土砂降りの雨になった。雨だ、雨だ。どんなにこの雨をこころ待ちにしていたことであろう。恵美子も大喜びで家の中をはねまわりだした。親の喜びがこの四才の子にもじかに伝わっていく。しかしいつまでも雨を眺めて喜んでいるわけにはいかなかった。私たちはありとあらゆる容器を外に持ち出すと、それに溜る雨水を懸命にドラム缶に入ればじめた。雨にぬれることなど考えている閑はなかった。ドラム缶は間もなくいっぱいになった。そしてどの容器にも水があふれている。妻の顔をみると雨にぬれているのか、あるいはうれし涙であったかもしれない、顔をクシャクシャにして私に笑いかけてくる。「よかった、よかった」と私たちは豊かに与えられた水を心から喜び感謝した。

雨は激しく降り続いた。泥水となってどんどん流れ去っていく水が惜しかった。こうして降り注ぐ雨を眺めていると、ふと昔の海軍時代のことを思い出した。「そうだ。この雨でシャワーを浴びよう」。そう思いつくと、軍艦の甲板でスクールを浴びた時の要領で素裸になって雨の中へ飛び出していった。恵美子も私のまねをして裸になると、いっしょになって外に飛びだしてきた。

大きな口を開けて空を仰ぐと口の中は雨水でたちまちいっぱいになる。甘い。雨水は甘くておいしい。恵美子は大喜びで雨の中

- 39 -

をかけまわりだす。私と恵美子はそので大きな雨のシャワーを浴びた。大きな、大きなシャワーであった。しかし、いくら熱帯の雨でもそれは冷たかった。しばらくすると私も恵美子も唇を紫色に染めて体をガタガタふるわせるようになった。それでも私たちはいつまでも雨の中に立ちつづけていた。

恵みの雨であった。体も心もきれいに洗い清めてくれた。飲み水も豊富になったし、ブルドーザーで掘っておいた所にも十分水が溜った。降り続く激しい雨の音の中に私たちは神の激励の言葉を聞いていた。

それからのち、暑い日が続くと恵美子は口ぐせのように「パパ、また雨が降ったらシャワーを浴びようね」というようになった。けれども、もう二度と雨のシャワーを浴びることはなかった。神は私たちに必要なものを備えてくださったからである。

2 拾った聖書

拾った聖書

私たちの家はコロニアの中央から少し離れたところに建てられた。周囲にはもちろん人家もない。厚い緑の壁に囲まれていて、夜も昼も恐ろしいほどの静けさがあたりを支配していた。ときおりキツツキが鋭い音を立てて木の幹を突つくのが聞こえる。雨でも降れば外にもでられない。周囲は蛙の鳴き声で大さわぎになる。蛙にもいろいろな種類があつてその鳴き方もさまざまである。ミヤオ、ミヤオと、まるで小猫のような鳴き声をだす蛙もいた。家のまわりがすっかり蛙の物悲しい鳴き声に取り囲まれてしまふような時、ともすれば人恋しい思いにとりつかれてしまう。そして、なぜこのようなところへきたのだろう、いったいなにが私をこのポリビアまで駆り立てたのであろうか、なんのためにと、さまざまに思いが胸中を駆けめぐるようになり、過ぎた事柄が思い出されるのであつた。

戦争がいよいよ終末の色を深めてきた昭和二十年の二月のことである。私は海軍砲術学校の研究部付下士官教員として神奈川県茅ヶ崎に駐在していた。そしていく組かの電波探知機の要員を訓練することになっていた。

その日、海は静かであつた。遠い岩礁には当たって碎ける波が白く光って見えた。海岸に沿った松林の中にバソガロー風の建物

- 41 -

が点々と見え、その奥の方に病棟らしい大きな建物がいくつかあった。そこは戦前からよく名の知られた南湖院という結核サナトリウムである。兵員の宿舎にあてるために、私はそのいくつかの病棟を接収する役目を負っていた。すでにそこには療養患者の姿は一人も見えなかった。ガランとした建物の中にはまだ消毒薬の臭いがいくらかただよっている。私は一部屋ずつたんねんに見て回った。家具はすべて取り去られ、からっぽになった部屋はなにか無気味な感じであつた。いつごろまでここに人が住んでいたのかわからないが、どの部屋にも、病める人々の織りなすさまざまな人生模様があつたに相違ない。けれども私の目にうつるものはないもなかった。あけ広げられた窓から潮風が部屋を吹きぬけていき、私は無感動な視線を部屋から部屋へ移していった。

その部屋は建物の一室はずれにあつた。そこをひととおり調べればその日の私の仕事は終わりであつた。他の部屋と同様になにもないガランとした空虚な部屋の中に足をふみ入れた時、片隅に一冊の小さな本が埃にまみれて捨て置かれてあるのが私の目にとまった。取りあげてみるとまだ新しい赤表紙の小さな本で、「新約聖書」と表紙には金色の文字が美しく光っていた。なにか捨ててしまふのは惜しいような気がしてそれをポケットに入れた。その小さな本がやがて私の運命を大きく変えてしまうだろうとはすこしも考えはしなかった。

南湖院は戦前からキリスト教主義の結核療養所としてよく知られていた。しかし、私はそのようなことはなにも知らなかったし、またどうでもよいことであつた。接収した病棟での生活が始まり、激しい訓練が続けられるようになった。その頃 B29 の本土空襲

はますます激しさを加え、来襲する敵機は私たちの訓練のよい目標になった。

しばらくしてから、松林の向かい側から毎朝聞きなれない歌声が聞こえてくるのに気がついた。いままでに聞いたことのない歌であった。それが讚美歌であるなどとは知りもしなかったし、ただそれもそういうことにふれようとしなかった。南湖院の正門を入って本館の方へ向かう途中、左側の松林の中に見なれない格好をした建物が一つあった。その正面には「医王堂」と達筆にするされた額がかけられてある。朝の歌声はここから聞こえてくるもののようにであった。訓練を受けていた電探要員の各グループの指揮官や兵隊の中には学徒兵として海軍に入ってきた人たちがいた。まだ学生気分ぬけきらない明るい若者たちであったし、年も私と同じ年令であった故かおたがい親しみを感ずっていた。

- 43 -

かれらが親しくしていて、外出のたびに訪ねていく家庭があった。ある日、私もかれらに誘われてこの家を訪れてみた。その家には父親の姿は見えず、母と娘の二人暮らしのようであった。かれらがクリスチャンであるといっていた。その家には私が今までで経験した事のないような暖かな雰囲気がかもっていた。厳しい軍隊生活の中ではあじわうことのできない家庭的なもてなしを受けてここは和み、話がはずむのがうれしく感じられた。

私は茅ヶ崎で初めてキリスト教にであった。思いがけなく聖書を手にすることができたし、クリスチャンを識ることができた。けれども日増しに苛烈さを加えていく戦争の最中のことである。キリスト教はまだ私の関心の外にあったし、イエスという名さえ

知らなかったのである。

終戦の日が訪れた。その日、私は横須賀の海軍砲術学校にいた。校庭に整列した私たちは拡声器から流れてくる天皇の声を懸命に聞いていた。天皇の声はかすれてよく聞こえなかった。しかし私たちはすべてが終わったことを知った。虚脱したように立ちすくんでいる私の上に、燃えるような真夏の強い日がさし、地面を黒々というどつている影は動きを止めていた。だれ一人口をきく者はいない。そして、重苦しい沈黙の流れが静かに兵舎の方向に向かって流れはじめていた。

六年間の海軍での生活はいついたいのためであったのであろうか。親しかつた多くの友が南方の戦場に散っていった。もうかれらは還つてはこないのだ。私もかれらと共に死んでいたらよかったと思う気持ちが胸につきあげてくる。自分を支えていたなにかがガラガラと崩れていく音を心のどこかで私は聞いていた。

その夜私は死を想った。一度も使う機会のなかった軍刀を減茶苦茶に振りまわし、兵舎の横に立てかけてあった竹竿を切り刻んだ。しかしどんなに暴れてみても心は落ち着かなかった。夜半、本部当直に立っていた私のもとに同僚の一人が割腹自殺をとげたという知らせが入った。他にも何人か自殺を図り、異様な空気が暗い校内に満ち始めていた。だれもが同じ想いかられていたに違いない。しかし私にその機会は同じようには訪れなかった。死におくれた悔いに身をさいなまれながらも、どこかで、生きなくてはならないという声を私はかすかに聞いていた。けれどもそれは確かなものではなかった。

天皇が横須賀に行幸されたことがあった。山本五十六元帥の遺

骨が横須賀にもどってきた時のことである。私は儀仗隊の一員として天皇を迎えた。その時、私は初めて現人神といわれる天皇を間近に見た。若い私は天皇を見ることのできた感激にふるえ、天皇のために死ぬことこそ自分の生きがいだと思ったのであった。

戦争が終わると、天皇は現人神であることをやめて人間であることを宣言した。天皇は神などではなかったのだ。かれは神だと教えられ、そう信じていたのは私だけではなかったにしても、天皇が人間になった日、私になにが残ったのであろうか。かれが人間を取りもどした時、私は神を失った。かれのために生き、かれのために死ぬことに人生を賭けてきた者が、かれの人間宣言と共に同じように人間を取りもどすということはできなかった。私は神を失うとともに私自身をも見失ってしまったのである。

終戦の日から一週間ほど経って私は家に帰った。多くの復員者の間にもまれながらやつとの思いで家にたどりついたものの、しばらくの間私は呆けた者のようであった。

町は荒れ果て、人の心も荒んでいた。生きていく希望も目当てもない私の心を慰め励ましてくれるようなものはないもなかった。

特攻隊くずれの若者たちの無軌道な行動が新聞をにぎわせはじめていたが、やり場のない心を思い切った行動に移し、昇華させてしまうかれらの無法さが私にはうらやましかった。できることなら私もそのように、自ら泥沼の中に転げ込んでいきたかった。

しばらくして、私は東京のある中学校の事務員として働くことになった。焼け跡にわずか残っているコソクリートの建物のひと隅に事務室があった。満足にガラスの入っている窓は数えるほど

- 45 -

しかなかったし、どこも皆黒くくすぶっていた。冷たい風は容赦なく破れた窓から吹き込んでくる。終戦の年の冬は寒さがとくに厳しく感じられた。

事務室には私の他に二人の人が働いていた。わりと年輩の人たちで戦争中からずっと働いているということであった。田泉保興、石川養之助とそれぞれ自己紹介してくれた。二人とも、どこか荒んだところのあるこの新来者に対して優しく親切であったが、口数の少ない人たちであった。まさかこの二人がキリスト教の牧師だなどとは思いつかなかったことである。

毎日変わりばえのしない仕事が続いた。長い軍隊生活にすっかりなじんでしまっていた私には、この単調な職場は退屈で、ときには苦痛でさえあった。兵隊の頃は軍隊の外の市民生活を娑婆と呼んで憧れたものであったけれども、いまこうして自由な空気を味わえるようになってみるとそれも重荷に感じられるのであった。軍隊の生活には自由はなかったけれども、規律に服しているかぎり自ら生きようと努力する必要もなかった。けれども、いまは自分で努力して生きていかねばならない。そして、生きようと思うほどに私はなんとか自分を取りもどしたいと願うのであった。しかし、一度見失われたものは容易に取りもどすことはできなかったし、単調な生活がよりいっそう私に生きる重苦しさを感ぜさせるようであった。

ある日の午後、事務室を訪れた人がいた。田泉さんや石川さんと親しそくに話をしているようすで、三人ともキリスト教の牧師であることがわかった。

私にはキリスト教のことはなにもわかっていなかったのである

から、まして牧師がどういう存在なのかわかるわけはなかった。しかしなにかが私の心を動かしはじめていた。

夕方になり石川さんは先に帰って、事務室には私と田泉さんだけが残っていた。

「田泉先生、あなたは牧師さんなんですか」

「え、そう。でもどうして」

「いや、べつにどうっていうことはないんですがね。ちょっと興味をひかれたものですか」

話のいとぐちがほぐれるとあとはごく自然に話がすすんでいった。いつの間にか私は自分の悩みを懸命に訴えていた。生きる悩み、それは敗戦によってえた自由と引き替えに与えられた重荷だった。それまでだれも私の苦しみを理解し、悩みを聞いてくれる人がいなかった。また自分から話しかける相手もいなかった。私は孤独であったのだ。しかし、田泉さんと話をしているとなぜか心のしこりが急速に解きほぐされていくような、安堵に似た気分が胸の中に拡がってくるようであった。

「山畑さん、いっしょにお祈りしましょう」

田泉さんはそういうと、机の上に手を組んで目を閉じた。これからは始まるのか、祈るということはどういうことなのか、私には解らなかつたけれども、私も真似をして目を閉じ、頭を下げた。

田泉さんの口から静かなつぶやきがもれてきた。かれはだれかに語りかけているようであった。あたかもかれの言葉を聞いている者がすぐそばにでもいるかのようであった。

たしかにだれかがその言葉を聞いていた。それがだれなのか私

- 47 -

には解らなかつたけれども、そのだれかは私の心の奥底にあるうめきも聞いていてくれるような気がした。私は懸命にそのだれかに向かって心を集中しようとしていた。

田泉さんの口から言葉が消えた。そしていいしれない平和な、落ち着いた静けさが私たちを包んでいた。これが祈るということなのだろうか。呼びかけ、語りかける相手を持つていうことはすばらしい。私にもそうした喜びが与えられるのだろうか。破れた窓ごしに射し込んできた夕日が、うす汚れた事務室の中を赤々と照らしだしていた。この時、私の心の中にも新しい光が射し込んできていたのだった。

私の心の中に「求める」気持ちをはっきりした形をとり始めていた。

私は一冊の本のことを思い出した。南湖院の一室に捨て置かれてあつた本、赤いレザー表紙の小さな「新約聖書」のことを思い出した。私はこの本を捨ててしまわないで家に持って帰っていた。なぜ持ち帰つたのかわからない。たぶんほとんど手垢のついていない真新しい本が惜しかったからかもしれない。それまで一度も興味を持ったこともないのに、大事にしまいこんでいたのは不思議であつた。

家に帰ると早速私はこの本を取り出して読みはじめた。私にはよく理解できない不思議なことばかり書いてある本だと思つた。一つもおもしろくはなかつたけれども、なぜか手放すことができなかった。

私はこの本を通してはじめて「イエス」という名を知つた。その人は見知らぬ人のようにではなく、親しい友のように私に語り

かけてくるような感じがした。

「すべて重荷を負うて苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」

私の目はその文字の上に釘づけになって動かなかった。

わたしについて来なさい

武蔵野の奥づまり、秩父の山並がそこからはじまろうとするところに飯能という町がある。市街の西には天覧山という小高い山があつて、その麓には名栗川が流れ、景色のよい落ち着いた町である。このあたりは古くから織物業が盛んなところである。私の家はこの町にあつた。

はじめて手にした聖書が私に語りかけるなにかを心の中に聞きながらも、まだ私の心は混迷を続けていた。週末に家にもどつてくるたびに、私は山に登り、川に遊んで、その捉えようのないなにかをえようと彷徨を続けていたのであつた。自然のたたずまいの中に静けさを求め、とりとめのない思索をくりかえしながらも、どこかにあるはずの出口は容易には見いだせなかった。私はどこかへいかねばならないと思う。私の魂に語りかけてくるその声の主に会いたい。どうしたらその人に会うことができるのだろう。年の暮れもおしつまつた頃、田泉さんは私を津田沼にある自宅に招いてくれた。その時は十数名の学生もいっしょだった。にぎやかにゲームなどして楽しい一夜を過ごしたのであつたけれども、それがクリスマススを祝う集まりであつた。田泉さんは近くの教会へいくように勧めてくれた。

- 49 -

教会とはどんなところだろう。私のような人間でも入っていけるのだろうか。教会がどんなものかなにも知らない私にはなにか漠然とした不安があつた。しかしそれでも、私の心の中に教会へいつてみようという気持ちが強まってきた。未知の扉を押す不安とおそれが交錯していたけれども、私の魂に語りかけてくる声をもっとはつきり聞きたいという願いがそれに打ち勝つた。

その頃、飯能の町にはまだ教会はなかった。飯能から東に六キロメートルほど離れたところに豊岡という町がある。そこに教会があるということを知つたので、私はその教会を訪ねてみることにした。まだいくらか私の心にはためらいが残っていたが、思ひきつて出かけることにした。

昭和二十一年の三月も末のことであつた。そしてこのあたりでは一番風の強い時期でもあつた。からつ風が埃をまいて吹きあれていた。私は顔を伏せて歩いてしたが、それは風をよけていたわけではない。心は重くよんどんでおり、足も重く感じられた。駅から教会までたいした道のりではなかったけれども、それでもなにかしら遠い道を歩いてきたような気がした。

教会は川のほとりにあつた。高い尖塔がついている大きな建物だった。十字架が塔の上についていた。教会の扉は大きく開かれていたが人の姿は見えなかった。扉を開けることに重苦しい心の負担を感じていた私にはなにかホッとしたものが感じられた。しばらく外に立っていると、教会の中から子供の歌声が聞こえてきた。

なにかが私の心を押しもどしてしまったようであつた。子供の明るい歌声を聞いているうちに、いつしか私は教会とは反対の方

へ歩きだしていた。河原にはあまり水はなく、わずかな水が流れを作っていた。その上を風が激しく吹き荒れていた。あたりは風にまきあげられた砂埃でどこもかしこも黄ばんで見えた。私は来た時と同じように顔を伏せたまま、その埃の中を歩いて駅までもどつてしまった。

教会の扉は開いていたのにどうして入ることができなかったのだろうか。そこにはもう一つ、目には見えない扉があるようだった。その扉はどうしても自分の手で開けなければならない。他人に開けてもらうことのできないものだった。結局、私にはその見えない扉を押し開ける勇気がなかったのだ。

駅のベンチに腰かけたまま、数台の電車の発着を見送っていたが、そうかといってそのまま家に帰ってしまう気にもなりかねていた。ひどい砂埃が駅前の広場から、風を巻いて待合室の中に吹き込んできた。思わず腰をうかした私は、それを機会にもう一度教会の方へ歩き出した。

「わたしのもとに來なさい」

聖書の中から語りかけてくる言葉が現実のことに感じられた。さあ今度は大丈夫だ。教会の前に立つと私は思い切つて玄関の中に足をふみ込んでいった。

教会の玄関には一人の青年が立っていた。軽く会釈して奥へ入ろうとする私に、一枚の紙と聖書と讃美歌を渡してくれた。私のはじめて教会にきた者だということがわかったのだろう、静かに座席の方へ案内してくれた。

教会の中はわりと広く、席に着いていた人の数は四〇人もいただろうか。牧師らしき人の話はすではじまっていた。静かな会

- 51 -

堂の中に語る声だけが強く響いていた。はじめて聞く説教である。なにが語られているのかよく意味をとることができなかった。そして、なにか期待はずれな、砂をかむような思いが胸にこみ上げてきた。私の期待が大きすぎたのだろうか。それとも私はくるべきところを誤っていたのだろうか。私はうつろに耳もとを過ぎていく言葉を聞きながら、苦い思いを胸の中でかみしめていたのであった。

しばらくして話が終わると、皆一勢に立ち上がつて歌いだした。ちようど私の前の席に一人の小柄な男が座っていた。立ち上がつて歌いだしたので気がついたわけであるけれど、見たところ三〇をいくつも越してはいないようだった。身なりも立派で、血色のよい艶々した顔をしていた。高くよく通る声で歌っているのを後ろから眺めていると、なんとなく不愉快な気分になってきた。こちらはこんな歌を唄うのははじめてなんだ。声だつて満足にでやしない。とても歌う気分にもなれはしない。下をうつむいて立つたまま私は別なことを考えていた。ここはどうやら私のくるところではなかったようだ。

礼拝が終わつたらしい。人々がざわざわと席を立ちはじめた。私は顔を伏せたまま玄関に向かった。少しでも早くここから出よう。早く外の空気を吸いたかった。

「あなた、はじめて來られたんですね」

急に後ろから声をかけられたのでふりむくと、そこにあの小柄の男が立っていた。米軍の基地にでも働いているのだろうか、身だしなみの整つたようすをしていた。見すばらしい自分の姿が惨めに思えるような卑屈な気分におそわれて返事もせず立って

ると、

「よくいらつしやいました。私、藤田です」

かれは私の気持ちに頓着なく言葉を続けた。

「あのね、毎週土曜日の夜、この教会で『青年をキリストへ』という集会が開かれているのです。アメリカの兵隊たちもいつしよに集まるんですよ。ちょうどよい。今度の土曜日には出ていらつしやい。いいですね」

なにがちやうどよいのかどうかわからなかったけれども、そこで私は強引にその集会に出る約束をさせられてしまった。そして、これが私と藤田正武牧師との最初の出会いであった。

深い失望感が私の心を占めていた。ようやくの思いで教会の門をくぐつたにもかかわらず、そこで得るものはなにもなかった。再び教会を訪れようという気持ちはもうどこかへ消えていたし、かえって惨めな思いをかみしめながら私は家にもどつてこなければならなかった。

それから物憂い一週間が過ぎていき、次の土曜日が訪れた。朝早く私は家を出て天覧山に登った。山といつても一息に登つてしまえるような小さな山である。頂上で一休みすると、裏手から塔ノ巢山に通じる小径を下つて降りていった。私はただ歩いてきたかった。じつと立ちどまっていると重苦しくて仕方がない。奥の方へ、だれもない奥の方へ入っていきたかった。そしてただ一人だけになりたかった。

暗い顔で毎日を過ごしている私を、家の者は異様な目で眺めていた。小さなことにも気を高ぶらせて荒れ狂う姿を見ては恐れた。どうにも手がつけられない。そんな目で私を見る家族からも逃れ

- 53 -

たかった。確かに私は正常ではなかったかもしれない。

一度失ったものを取りもどすことは容易ではなかった。しかも、だれもそれを私のために取り返してくれることはできない。どこまでも自分一人でこの失われたものを追ひ求めていかななくてはならない。悪いことに、こんなふうに悩んでいてもだれも理解してくれたり、慰めてくれたりはしない。思想をもたない若者のこうした悩みはどこにもその行き場所を見つけないことができず、ただ一人、地団太ふんで暴れる他にその気持ちのけ口をみつけないとはできなかったのである。私が見失ってしまったのか、それとも、私自身が見失われたのであろうか。いつしか私は再び死を思うようになっていた。

山は静かで、ときおり小鳥がさえずるのが聞こえる他はなにも耳に入るものはなかった。狭い小径をたどつて谷間に下つていくと、そこに塔ノ巢山へ通じる道があった。道は右に左にうねり、再び上り道にかかるところ、両側にかかる山の斜面が上から覆いかぶさるように迫ってきていた。木立にさえぎられていて見通しはよくないけれどこの道はもう一つの山の頂に通じている。私はそこまでいつてみようと考えた。

もう一つの山に登つてみようと考えたとき、私に一つの転機が訪れた。

今日は土曜日である。藤田牧師は今夜かならず集会に来るようにと、無理やりに出席を約束させたのだった。再び教会を訪れようとは思っていなかったけれども、私はどうやらこの約束にしばられてしまったようである。思い出してみるといまいまいしい感じではあつたけれど、もう一度教会へいつてみようかという気持ち

がわいてきた。そして塔ノ巢山へいく道から私は引き返すことにした。

教会を訪れる者がみな、最初から心に満足感を味わい、喜びや希望をもって帰るというわけではないだろう。たぶん、多くの場合、不明確な印象をもって帰るのではないだろうか。違った世界へ入り込んでしまったというようなとまどいと不安をだれもが経験するに違いない。かれがもう一度教会の門をくぐるためには、このとまどいを打ち消すなにか強い力が必要なのである。もしそれがなかったらかれは再び教会へはもどってこないであろう。

その夜、私は少し遅れて教会へいつてみた。会堂は若い人たちであふれていた。こんなにたくさんの方が集まっているのかと少々びつくりしたが、私にとっては人の多いのはかえって都合がよかった。こつそりと隅の方へもぐりこむことにした。だれも私に気づきもしないし、またもちろんのこと、かまってくれる人もいなかった。アメリカ兵がコーラスの指導をしていた。集まっていた人々の顔は大変楽しそうで、どことなく浮き浮きした調子がただよっているのが感じられ、いたって居心地の悪い思いを味わわなければならなかった。

藤田牧師は忙しそうに人々の間を往来していたが、私のことなどべつに気にもとめていないようであった。あれだけ強引に約束させたのだから、声でもかけてくれるかと内心期待していたけれども私の方をふりむきもしない。失望に似た思いを味わいながら、それでも私は話のはじまるのをこころ待ちにしていた。そこでどんなことが聞けるのか、それが知リたかった。

正面の高い壇の上にあがって話をしたのは背の高いアメリカ人

- 55 -

であった。そばで通訳している藤田牧師は対象的に小さく見えてなんとなくおかしかった。英語のわからない私は藤田牧師の声だけを聞いていた。力をこめて話をしているらしいのに、なにか空まわりしているようで、なにも私の胸にこたえるものがない。虚しい思いがフツと胸をかすめる。私は再び教会を訪れたことを悔いる気持ちになっていた。

話も終わり近くなっていた時、突然私の耳に強い調子の言葉が聞こえてきた。

「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」

その言葉は広い会堂の中に一きわ強く響きわたった。通訳をしている藤田牧師の顔は紅潮して力がこもっていた。

「わたしについて来なさい」。これはだれに向かって語られているのだろうか。一瞬私の心は騒いだ。周囲を見回してもだれもこの言葉に反応を示しているようすはなかった。私には話の内容はよく理解できなかったけれども、この言葉だけは仙異常に強く心にしみこんできたのであった。これは私に向かって語りかけられた言葉ではなかったであろうか。「私のところへ来なさい」と、前に聞いたことのあるあの言葉が心の中によみがえってきた。私はその人の声を再び聞いたのだろうか。たしかにそれに違いなかった。やはり教会へ来てよかった。ここだけがその声を聞くことのできる場所であったのだ。その声の主こそ私に、私の失ったものを取りもどしてくれることができる。そう思うと、胸の中にジーンと熱いものがこみあげてくるような感じであった。私は小さな声で「イエス様」とその人の名を呼んでみた。

藤田牧師は私が集まりに出ていることを知っていた。集会が終わるとすぐに席を立て帰ろうとしている私のところへかけよってくるなり、いきなり私の手をにぎっていた。

「きみ、よくきてくれたね。本当によかった」

いったいなにをこの人は喜んでいいのか私には理解できなかったけれども、いま聞いたばかりのあの言葉が与えた感動に満たされていた私は、素直にこの人の言葉を受け入れていた。私はこの時にすでに捉えられてしまっていたのであった。

藤田牧師は私をすぐに帰してはくれなかった。謄写版原紙を一枚もつてくると、次週のプログラムの表紙を書いてくるように私に求めた。それはほとんど命令に近いものであった。ずいぶん身勝手な人だ。はじめて集会に出てきたばかりの人間にも無理やり仕事をおしつける。急に怒りがこみあげてきたけれども、不思議なことに逆らうことができなかった。結局、藤田牧師のいいなりになってその仕事を引き受けることになった。それからというもの、私はいつも集會に引つ張り出され、なにかしら用をいいつけられ、忙しい週末を過ごすようになってしまった。まるで藤田牧師に手玉にとられているような感じであった。

求道者はどこの教会でも、そつと優しく取り扱われるのが普通である。深い思いやりといたわりがたえず求道者の上に注がれている。こうした配慮が、冷たく固く閉ざされている求道者の心を和らげ、その重い心の扉を開かせてくれるものである。しかし、神はいつもそのような優しい取り扱いをしてくれるものとはかぎらないようである。神が求められる時は、もつと激しく一方的な迫り方することだってある。拒否することのできない圧倒的な

- 57 -

神の迫りを経験した者も多いだろうと思う。私の場合、あまりにも人間的な強引さや、あつかましいとさえ思われるような要求に引き回されたとはいえ、逃れることのできない神の手がこのようにして私を捉えて離さなかったのであった。

私はいく度も藤田牧師から離れようと思った。とてもついているものではなかった。その善悪にあふれた人柄はなんとしても憎むことはできなかったけれども、その頭の回転の早さや行動の敏捷さにはどうしても追いついていけないのである。けれども、逃れたいと思う気持ちが強まる反面、私はいつしか強く惹かれていくものを感じていた。そして私は藤田牧師の身邊にいつもついてまわるようになっていた。

人と人との結びつきにはさまざまな不思議がある。愛によって結ばれる者、尊敬と信頼で結ばれることもある。あるいは利害がからむ場合だってある。いずれにしても、おたがいに離れ難い存在であることに気づいた時に、はじめて、おたがいを結びつけているものがなにであるかということを知るのである。私と藤田牧師とを結びあわせたものはいったいなにであったのだろうか。

「わたしについて来なさい」という声を私は確かに聞いていた。いろいろな声が入りみだれて聞こえる中で、私の耳は確実にその声を捉えていた。もしそうでなかったら、私はまったくべつの道を歩んでいたに違いない。

価なくして受けたもの

土曜日の夜、「青年をキリストへ」の集会はいつも多くの若い人々にぎやかであった。その頃はキリスト教ブームなどといわれていたくらい教会には多くの人が集まったものである。ものめずらしさも手伝って、いままでなかった雰囲気を楽しもうとこの集まりに出てくる人々もあった。豊岡の町はずれにある米軍の基地から多くのアメリカ兵が加わっていたことも、この集まりに特殊な雰囲気を与えていたことはたしかである。私も初めのうちはいくらか抵抗を感じていたけれど、いつのまにかその雰囲気になじんでしまった。藤田牧師は私がまだ求道中の人間であるにもかかわらず委員会のメンバーに加えてしまった。そしていろいろな雑用が私にまわってきた。プログラムの印刷はほとんど私の仕事になってしまった。

一つの仕事を受け持つということは全体との関わりの中に自分を見いだすということにもなる。私はこの仕事を通して、「青年をキリストへ」という集会のためにどういう労苦が払われ、どのように関係者がそのために祈っているかということがわかるようになってきた。初めは傍観者にすぎなかったけれども、いつしか私自身もその祈りのグループに加わるようになり、この集会のために祈るようになった。

他のメンバーといっしょに祈るようになってきた時、私は自身自身の救いのために祈るようになった。ここでなされていることは他のだれのためでもない。私のように失われた者たちのためになされていることであった。集会のために祈ることは私自身のためにも祈ることであったのだった。

祈りの輪の中に入れられた時に、私は初めてそこに生きた交わ

- 59 -

りのあることを教えられたのだった。私がえらびとった交わりではなくて、なにもそのようなことについて知ってはいない、解ってもいない人間ではあったけれども、そこに招き入れられたのであった。私はその時自分が神の手の中にあることを感ぜざるをえなかった。そして私はもはや孤独ではなかった。

「青年をキリストへ」の集会は、その後も数年にわたって続けられた。ブームが過ぎてしまうと、もはや以前のようなにぎわいはなくなってしまうけれど、後には真剣に救いを求める者たちが引きつづき集まるようになっていた。そして何人か次々に救いの喜びに顔を輝やかせながら恵みの座に進んでいった。

私たちは、一人の魂の救いのために神がどのような犠牲を払われたのかよく知っている。それを知る時に私たちに信仰が生まれてきたのであった。しかしながら、私たちは自ら進んでこのことを知ったわけではない。私たちがそのことを知ることができるようになる働きかけるものがあつたのである。もしそういう働きかけがなかったとしたら、私たちはこのことについていつまでも盲目であり啞者であつたことであろう。そして、この働きかけの蔭に払われている別な労苦と犠牲がどんなに大きなものであるか知らなければならぬのである。

私は委員会のメンバーに加えられてみて、初めてそこでどういう労苦がなされ、どれだけ多くの費用が費やされているかということを知った。それだけでなく、この集会のためにどれだけ多くの祈りが献げられているかということを目で見たのであった。一人の魂が救われるために支払われるこれらの祈りと努力、その労苦は実に莫大であった。

一人の求道者が救いに至るまでに費やされるものを価に見積もるならばどんなことになるだろうか。それはとても計り知ることはずかしい。解ることは、それはけつして安いものではないということである。そして、その高価な救いを（私はこの世的ない方をしているわけであるが）、価なくして受けるということほど恵まれたことがあるだろうか。

「罪人が一人でも悔い改めるなら、神のみ使たちの前でよろこびがあるであらう」

ただ一人のために神が払いたもうた高価な犠牲に加えて、このことを宣べ伝えるために、地上において教会が、伝道者が、そして信徒たちが献げる労苦と祈りも、ただこの一人のためになされているのである。そして、その一人が悔い改めて神に帰る時、喜びは天においてではなく、この地上にもあふれるのである。

その年の八月、ある暑い日曜日の朝、私は洗礼を受けた。その時、受洗の喜びは私一人のものではなかった。「青年をキリストへ」の集会のためにいっしょに労苦し、祈つてきてくれた仲間たちの喜びであつたし、なによりもまた、藤田牧師の喜びであつた。はじめて集会に出席した夜、藤田牧師は私の手をとって「よかった、よかった」と喜んでくれた。もどつてきた一人を迎えて喜んでくれたその喜びを、私はこの時になってようやく理解できたように思う。

私に洗礼を授けたのは藤原政太郎牧師であつたが、洗礼式の終わったあとで会衆の前に私を立たせると、

「今日ここに一人の魂が救われたことによって、天上においても、この私たちの間にも大きな喜びがあります。しかし同時に、

- 61 -

サタンの国においては大きな驚きがあるに違いありません」といわれた。

洗礼を受けるといふことがどんな意味をもっているのか、そのことをよく理解していたわけではなかった。私にとつては、迷える魂がようやくたどりつくことができたゴールのようなものに感じられていたし、新しくクリスチャンとなつて歩み出そうとする出発のセレモニーとしか考えてはいなかったのである。しかし、私は洗礼を授けられてはじめて、自分がまさしく神の手に捉えられていることを実感したのだった。それは、失われたものを見いだし、それを勝ちとつた神の勝利であり、サタンにとつては敗北であつた。そしてこの時から、私はサタンの激しい逆攻勢の前に立たされるのであるが、同時に神の力強い手に支えられ、守られていることを身をもって知るようになった。

藤田牧師が好んで私に語ってくれた言葉の中で特に強い印象を私に与えたのは、「価なくして受けたものは価なくして与えよ」という言葉である。そして、このイエスの言葉は私のその後の生き方を決定的なものにしてしまった。弟子はその師にどこか似るものだそうである。私は親に似ない鬼子とでもいうのか、藤田牧師とはまったく違ったタイプの人間になつてしまったけれども、この言葉だけは今も私の中に強く生きている。

価なくして私が受けたものの、それは計り知ることのできない大きなものであつた。つまらない計算かもしれないけれども、「青年をキリストへ」の集会に費やした費用と、救われた人間の数をくらべてみた私は、一人あたり、あまりにも大きな金額が費やされていることを知つてびっくりした。その他に関係者の労苦と祈

りを計算に入れたら大変なことになる。私は自分の信仰において理解していたところの、受ける恵みの偉大さに加えて、このような現世的な計算から割り出したものがいかに大きいかということに改めて知ったのであった。私はただ救われたといって一人で喜んでいられるけれども、この救いはまことに高価なもののだと考えるをえなかった。その高価な救いを私は無償で受けたのであるから、それは同じように価なく他の者にもわがち与えられるべきである。自分のものにだけしておいてはいけないものである。もし恩を返すということがこの場合にいえるとしたならば、救われた者がいまだ救われていない他の者のために、この労苦にあずかり、そのために祈る、つまり伝道の業に加わることとは非常に重要な意義のあることであって、伝道ということはただ福音を伝えるとか、救われた喜びを証しするとかいうだけのことでなく、報恩の業であるともいえよう。

私は洗礼を受けたことを単に自分が信徒になり、教会員になったというようには理解しなかったのである。受けたものは返さなくてはならないと心に想いこんでいた。

価なくして与えられたものを、価なく人に与える道は、献身して伝道者になり、身をもってこの労苦に仕える者になるということの他に、私のえらぶ道はなかった。

さまざまな形で私の行く手には暗雲がかかり、そして消えていった。激しい風雨にさらされることもあったが陽光は再びもどってきた。神が私に何を求めていたものか、もう疑う余地はなかった。そして決断の時がやってきた。

- 63 -

蟬の鳴き声

昭和二十二年四月、私は千葉県四街道にあった聖書農学園に入學した。この神学校がどういう性格のものなのか、どの教派に属しているのか、そういうことはさっぱり解らなかったけれども、学資のない私が勉強できるのは当時この学校だけしかなかった。寮に入れてもらい、食べさせてもらえ、その上勉強までできる、こんな都合のよいことはなかった。とにかく、私は伝道者になるために勉強できればそれでよいと安直に考えていた。こういう安易な考えがやがて厳しい試練の下でもろくも崩れ去っていく日はそんなに遠くなかった。

食糧の非常に欠乏していた時代であった。半日は農場に出て働き半日勉強という状態が続いた。食事でも悪かった。じやが芋の間に米粒を探すというような食事で、とても若い私たちが満足できるようなものではなかったけれども、当時の食糧事情からいえばぜいたくはいえなかった。三度の食事を欠かさずいただけということは恵まれたことであつたに違いない。いずれにしても、働きながらも勉強できるということはありがたいことであつた。しかし日が経つうちに、毎日の生活は息苦しいものに変わっていった。神学校の雰囲気はまるで修道院のようなもので、とりつくるた敬虔さと静かなふるまいがいつも要求されていたし、学校側に迎合した動きが神学生の間にも見えはじめ、朝五時に起きて早天祈祷会が行なわれるようになり、出席が義務づけられるようになった。

そうした中で私はだんだんとこの雰囲気になじめない気分にな

りつつあった。私は神学生の中でも少し変わった方であったかもしれない。粗野な言動は学園の雰囲気にもちろん合いはしない。重苦しく落ち着きのない外の世界の空気を学園に持ち込み、二、三の同じようにあまり芳しからぬ級友と共にいくらか、勝手な行動をとりつつあった。周囲の行儀の良さに反発してみたり、ことさらに偽悪家ぶってみたりして小さな抵抗を試みたりした。私は自ら墓穴を掘っていたようであった。

この学園の園長は中田羽後という人であった。入学して一カ月ほど経ったある日、私は園長室に呼び出された。

「きみは今日かぎりこの学園から立ち去ってもらいたい」

突然退校を命じられて私はびっくりしてしまった。原因がどこにあるのか私にはすぐに理解できた。私は少し甘く見くびっていたのだった。しかし義理のある家を飛びだしてきた私は帰っていく家がなかった。いままら悔やんでも仕方ないことであった。自分の非を認めて再度学園においてほしいとくり返し頼んでみたが園長の言葉は冷たかった。

「この学園ではきみのような人間に食事を与え、勉強までさせることはできない。とにかく出ていってくれたまえ。きみがたとえ伝道者にならなくなったら神様は別段悲しまれはしないよ」

園長の最後の言葉は胸にこたえた。もういべきことはない。道は閉ざされたのだ。私はだまってそこを立ち去るよりほかに方法はなかった。寮ですでにこのことは知らされていたらしくみな異様におしだまり、園長室からもどってきた私に声をかける者もいなかった。

「きみが伝道者にならなくなったら神は悲しまれないよ」

- 65 -

本当にそうなのだろうか。神は私を必要としたまわらないということは本当なのだろうか。もしそうだとしたら私はつまらない決心をしたものだ。ただ一すじに伝道者になろうと思ひ込んでいた私は愚かであったのだ。そう思うと悲しくてたまらなかった。

その頃は汽車の切符も自由に手に入れることができなかったのだ、私はトランクを手にとると、学園から千葉市まで約六キロメートルの道を鉄道線路をたどって歩き出した。もう二度とここへもどることはないだろう。しかしこれからどこへいったらよいのかわからない。いくあてもなく私は途方にくれながら重い足を引きずって歩いていった。囁々と音をたてて列車がそばを通り過ぎていく。ひと思いにあの鉄輪の下に身を投げ出してしまおうかと、投げやりな気持ちにおそわれもした。

神は本当に私を求めているのか。いく度も心の中でこの問いをくり返しているうちに、なにか熱いものが胸の中に吹き出してきた。どうしてもここで引つ込むわけにはいかない。私はたしかめてみなければならぬ。中田園長のいったことが真実なのか、それとも神は他に道を備えていたものか、私はこの道がどこへ通じているのか自分の目でたしかめてみたいと思った。

東京へ出てきた私は、縁故を頼って目黒の駅近くにある小さな掘っ建て小屋を借りて住むことにした。ちょうど畳一枚ぐらいの広さで、横になって足をのぼすと前後がつかえてしまう、そんな小さな小屋であった。金もまだわずかではあったがいくらか持っていた。仕事を探して働こう。しかし、まず第一にどこか神学校に入れてもらおう。そう考えるとすぐに、当時目白の宣教師館で授業していた日本聖書神学校を訪れてみた。夜間部に入れてもら

いたいと思ったのであった。

すでに五月に入っていた。いまとなつてはたぶん断られるに違いない。しかし私はこの扉をどうしてもたいてみなくてはならない。そこに道が開かれているかどうか、私はなんとしてもたしかめたいと思った。

幸いに私は岡田五作先生に会うことができた。他の神学校を追い出されてきた者をそう簡単に迎えてくれるとは思えなかった。けれども、み旨と信じて献身を一度決意した者が他のどこへいくことができよう。私はなんとしても入学を許してもらおう、それまではけつして引き下がるまいと考えていた。懸命に入学の希望を訴える私の言葉を、岡田先生は静かに聞いておられたが、「わかりました。明日からでも学校へ出ていらつしやい」といつてくれた。

神は私にもう一度機会を与えてくださった。道は閉ざされてはいなかったのである。私はうれしかった。今度こそ失敗しないで、どんなことをしてもこの道を歩き続けよう、けつして途中で投げ出したりしまいと心に誓った。しかしながら今度は人に食べさせてもらうわけにはいかないので、自分で食べていく道を探さなければならなかった。私はその日から仕事を求めて心当たりを歩いてみたがなかなかよい仕事は見つからなかった。まごまごしているうちに日は過ぎていき、所持金は底をついてきた。

六月に入つて間もなく、私は芝、愛宕山の元の放送局の跡にあった米軍の通信隊を訪れてみた。そこには、海軍時代の友人が働いていた。私は元海軍通信兵であつたので、なにか通信関係の仕事でもないかと思つて訪ねてみたのである。しかし私の望んでい

- 67 -

たような仕事はなかった。友人は、もし他の仕事でよかつたらなんとかしてやるから明日もう一度出てこいと親切にいつてくれた。その時私の手にはもう一銭の金も残つてはいなかった。本当はいくらか金を借りたいと思つて訪ねたのであつたけれども、それもいいかねてそのまま目黒にもどつていった。電車に乗ることもできないので、結局目黒まで歩いて帰るより仕方がなかった。

芝から三田にぬけ、目黒に向かう道は思いのほか遠かつた。目黒から新橋までの電車賃を払つたあとは文無しになつてしまつていたから、昼食もとれなかつた。歩いていこううちに腹はすく、どうにもがまんできない状態になつてきたけれども仕方がない。とにかく歩くことだけに心を集中して、一刻も早く自分の小屋にたどり着きたいと思つた。

その頃はだれもが腹をすかせ、飢えている時代だつた。一人ぐらい目の回るようなひどい思いをしながら道を歩いていたからとて、特別不思議なことではなかつたであらう。そうはいうものの、初めて厳しい飢えに直面した私には空腹がひどくこたえた。一文無しでは神学校へ通うこともできない。明日からは授業も受けられないと思うとますます気がめいり、足も重くなつて余計に道が遠く感じられたのであつた。

ようやく目黒にたどり着いた時にはもう夕方になつてしまつていた。駅前から右へ折れ、ガードをくぐつて坂をおりようとするあたりには多くの露店が軒をつらねていた。駅の裏側、坂道の右側は小高い丘になつていて木立が見える。坂の途中まで切り通しになつていて、この切り通しが終わるあたりから急に視野が右手に大きく広がつて、その向こうには無線学校のものらしい鉄塔が

高く空に突き上がっているのが見えた。

夕方のその坂道は勤め帰りの人々や買物にきた主婦たちでにぎやかであった。そこまでたどり着いたものの、すっかり疲れ果ててしまった私には人波をくぐりぬけることさえ重荷に感じられた。ガード下を通りぬけて、立ち並んでいる露店の前を過ぎていく時、私はもうすっかり思考力を失って、まるで魂のぬけた人間のようにおぼつかない足どりで歩んでいた。ちょうど切り通しの一番端のところ、そのあたりで露店も終わりになるところまで歩いてきた時、なにか私の朦朧とした意識を強く刺激するように香ばしい匂いがしてきた。露店の一番おしまいのあるところにある一軒の焼鳥屋の屋台から流れてくる匂いであった。

空っぽの胃の腑を刺激された私の足は立ちすくんでしまい、もう一步も前に出ようとしない。生つばをぐくと飲むようにして目をそむけてそこを通り過ぎようとしたけれども、それも無駄なあらがいに過ぎなかった。空腹には勝てなかった。こんな場合、人間らしい思考は一時停止してしまうものなのであろう。なにも考えることはなかった。ただ食べたいと思う気持ちだけが私を引きずるように屋台の方へ引っ張っていった。私の目はコンロの上で焼けている串ぎしの肉に釘づけになってしまった。そばにだれがいたかなにもわからない。その後どんなことになるのか、そんなことも考えはしない。金もないのにどうしようとするのか、どこかでチラッとそんな反省めいた思いがひらめいたようだったけれども、手の動く方が早かった。

ちょうどその時だった。突然切り通しの上で蟬が鳴き出した。

「ミンミン、ミン、ミン、ミン」

- 69 -

あたかも空襲警報のサイレンが鳴り響くように、蟬の鳴き声は強く私の耳に聞こえてきた。胸に食い入るように強く響いてきたその鳴き声に思わずわれにかえった私は、はじめて自分がいまなにをしようとしているかということを知ったのであった。恥ずかしかった。急いで手を引っ込めると顔を伏せたまま坂道を転がるように駆けおりだした。屋台の中からあつけにとられたような目が私を追っていた。

息を切らせて、やつとの思いでそこから遠く離れたところまできた時、私は夢を見ているのではないかと思った。こんなことがあるはずはない。どうして私は金もないのにあの肉を食べようとしたのだろう。惨めだ。いくら私が腹をすかせていたとしてもそこまで落ちぶれるなんて考えられない。きつと私は夢を見ているに違いない。そう思うといたたまれない気持ちになってきた。夢だ。きつと夢なのだと自分にいきかせながら、私は自分の腕を強くつねってみた。激しい痛みが感じられた。その痛みは心の痛みとなつて胸の中にまでとどいた。私は夢を見ているのではなかった。

私は転落の淵に立っていたのだった。一度そこから転げ落ちてしまえば、救われようのない泥沼に落ちこんでいくことは解りきったことであつた。小さいことのように思えるけれども、踏み越えてはならないものなのである。もしそこで踏みとどまることができなかったなら、私は一串の焼き肉のために再び自分を見失ってしまったに違いなかった。

つねった腕の痛みは私の心に直接しみこんできた。夢を見ているのではない。これは現実のことなのだ。そして私は生きている。

こんなみじめな思いに打ちひしがれている時にも、私は生きている。腕の痛みは私が生きているしるしであった。私はそのことに深い感動を覚えた。私は生きているということよりも、むしろ生かされている事実に突きあたったのであった。私は蟬の鳴き声によつて救われた。わずかな生の一刻を懸命に鳴き暮らす小さな存在が、私の生命とこのように関わってくるとはまったく不思議なことであつた。

小屋にたどり着いた私は急いで聖書を取り出して読みはじめた。

「空の鳥を見るがよい。まく事も刈る事もせず、倉に取り入れる事もしない。それなのに、あなた方の天の父は彼らを養つていてくださる。あなた方は枯れらよりも、はるかにすぐれた者ではないか」

イエスの言葉が深く、深く心の中に突き入ってくる。人を愛してくださるお方の心が、そのまままっすぐに私の魂にまでとどいてくる。この私もそのみ心の中に配慮してくださるのか。神は私をこのような時も見いだしてくださる。けつして見すてはしまいたまわないのだと思うと、心の底からありがたいと思う気持ちかわいてくるのであった。

小屋の中も、周囲もすでに暗くなっていた。私はいつまでもその暗さの中にうずくまっていた。祈る言葉が見いだせなかった。ただ一人静かに声をひそめて泣くのみであつた。

結 婚

- 71 -

焼け跡の掘つ建て小屋の中で空腹のまま一夜を明かした私に、やがて明るい朝が訪れた。思いがけなく小屋の主がふかしたての芋をもつてきてくれた。恥をしのんでいささかの無心をするに氣持ちよく金も借してくれた。そして、愛宕山には新しい仕事私が私を待っていた。道は開かれた。そしてこの道はその後二度と私の前に閉じられることはなかった。

働きながら勉強を続けることがなまやさしいことではないということはだれでも知っていることである。とくにその頃の学生は厳しくそのことを味わつてきた。神学校に通つてきていたどの学生もみな私と似たような苦しみを味わいながら勉強をつづけていた。過ぎてしまふとその頃の苦しみがどれもなつかしい思い出となつて返ってくる。

働き口がみつかり落ち着いてきたので、私は夜間部から昼間部に変わることになった。本当のことをいえば、仕事が夜の勤務であつたからである。夜通し勤務のアメリカ兵たちにコーヒーやコカコーラをサービスする仕事であつたから、私ももちろん眠ることはできない。朝になると職場からまっすぐに学校へ出る。そういう生活が二年近くつづいた。

私が入学した頃、神学校は板橋の元火薬廠跡の焼け残りの建物を使用していた。火薬廠の跡であるから、どの建物もわざわざ土塁の北側の日当たりの悪いところに建てられていた。冬の寒さとはくに厳しく感じられるような建物であつたけれども、一晩中眠らないで働いてから学校へ出てくるのであつたから、どんなに寒い日でも、私は最前列に座つていながら居眠りばかりしているしまつた。なんのために学校へ出てきているのかわからないの

- 72 -

で、学校もボロだけど生徒もひどいもんだなと自ら苦笑せざるをえなかった。

予科二年を終わると、学校は目白に移り、昼間部を廃して夜間部だけの神学校になった。こうなると夜働いて学校へ通うわけにもいかなかったので昼の仕事に変わることにして、飯能に近い米軍基地に職場を変えてもらった。もうこの頃には私の仕事も本来の通信関係の仕事になっていた。

勤務先を自分の家の近くに変えてもらった代わりに、学校へ通うには片道一時間半は電車にゆられなくてはならなくなった。家に帰り着いて夕食をとるのはいつも真夜中であつた。病氣もしないで過ごしたのはまったく不思議といつてもよいだろう。

五カ年はずいぶん長く感じられた。いろいろとつらいこともあったけれども、私は「きみが伝道者にならなくても神は悲しまれない」といわれたことを、けっして忘れはしなかった。伝道者になるかならないかということは、私の問題ではなくて神ご自身の問題なのだ。神が私を用いられるならばそのように道は開かれるはずである。私は「ついて来なさい」という言葉に忠実に従おうと志してここまでやってきたのである。どんなことがあっても自分で自分の幕を降ろすようなことはすまい、幕を降ろすのは私ではないのだと考えていた。

いつしか電車の中が私の勉強部屋になっていた。往復三時間、しつかり身を入れて勉強できるわけではないけれども、他に自由な時間のなかった私には貴重な時であつた。はじめは窓ガラスもろくに入っていないかった電車も、後には立派な車輛に変わっていった。そして私の長い道程も終わりになった。しかしながら、この

- 73 -

五カ年の長さは私にとつてではなく、むしろ神学校の先生方にとつて長かった月日ではなかったであろうか。いつ姿を消すかわからない頼りげない学生、欠席がちな、あまり見込みのない人間をじつと耐えて待つてくださった先生方に、私は深く感謝せざるをえない。本当のことをいうと、いつ学校から「きみはもう出てこなくてもよい」といわれはしないかと、内心ヒヤヒヤしていたのである。

この五カ年の間で教室らしいところで勉強したのは最後の一年間だけであつた。まだ神学校にはそれらしい教室さえも十分備願わっていないからである。

食べていくのが精一ぱいの時代であつたから、生きること追われて、勉強の方もとかくおろそかになりがちだつた。忙しい牧会伝道の中から、先生方が手弁当下げて神学校のために働いてくださり、授業してくださるのに、私たちは勝手な熱を吹き、授業をサボることも多かつた。心の中で考えていることは反対に、実際の学生生活はあまり立派なものではなかった。それでも、このみずばらしい神学校が年毎に立派になっていく過程で、おそまつな神学生であつた私たちもそれなりに育ってきたのであつた。

「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」

同じ年に神学校に入った者は十数名いたけれども、最後まで残つたのはわずか三名しかない。しかもこの三人は正規に入學したのではない。一人は聴講生として入り、他の二人は夜間部から中途でもぐり込んだ、いわば半端者なのである。無事に卒業できたといつても私にどんなとり柄があるといえよう。いつ消えていくかわからないようなそんな人間を、終わりまで耐えて支えてく

ださったのは先生方であった。そして、そのかげにはなお大きな手が伸ばされていたことを私は考えずにはおれない。

国電目白駅の改札口をぬけて表通りに出て左に道をとる。商店街を過ぎてしばらく行くとそこに目白教会の会堂が道に沿って横長い姿を現わす。そこに神学校がある。

長い間通いなれた道ではあったが、もうこれからは毎夕ここを通ることもなくなってしまう。言葉には表わしえない思いが胸ににじみ出てくるのをおさえながら私は教会へ急いだ。

昭和二十七年三月のある夕方のことである。「日本聖書神学校第四回卒業式会場」と書かれた紙が入口にはられてあった。会堂の中はすでに人が一ぱいであった。やっと卒業か。私は一つの道を走り終えた安堵と、これから先の働きへの一抹の不安と緊張とがおりまざった複雑な気持ちで定められた席についた。

やがて式も終わり、卒業生たちと参会者との間に明るい挨拶が交わされはじめた。

「まあ、山畑さん。おめでとう。よく頑張ったわね」

突然、私に声をかけてきた人がいた。三年先輩ですでに牧師夫人になつていた人である。

「でも私感心しちゃったわ。だってね、山畑さんなんか一番先に神学校から消えていってしまうんじゃないかと思っていたのよ」

私は苦笑してこの祝いの言葉を受け取った。まったく不思議なことなのである。この私が落伍せずに五年間神学校に通い続けることができた。この人だけではない、他の人々も同じような感じをもっていたらしかった。それにしても、一番先に落伍しように見えた人間をここまで引っ張ってきたものは一体何であったので

- 75 -

あろうか。過ぎた日々のいろいろな思い出が、会堂の隅にたたずんでいる私の心の中を走馬灯のように通り過ぎていった。

卒業して間もなく私は結婚した。相手は予科時代の同級生である。先に消えていった者と後まで残った者が結びつくまでにいろいろなことがあった。

本科三年になって、卒業もいよいよ間近だと思うと私は先のこととが心配になってきた。気持ちだけは精一ぱい牧師になるつもりでいながら、いざその時がきて実際に伝道者としての生活に飛び込んでいくとなると、はたして神学校で学んだだけで通用するかどうか不安であった。教会のいろいろな習慣でも知らないことがたくさんあったから、牧師として勤まるかどうかまったく自信はなかった。

先輩の先生方の話を聞けば、牧師は奥さん次第で良い仕事もできるし、うまくいかない場合もあるという。そういうことならまず牧師の妻としてふさわしい人を見つけることが大事である。

よい奥さんを見いだしたら私のような者でもなんとか勤まるかもしれないと思った。

神学生として奉仕していた教会に一人とくに親しくしていた女性があった。彼女の父親は熱心な信者で、親娘ともに忠実な教会生活を送っていた。私には彼女のようにクリスチャンホームに育ち、熱心に教会に仕えているような女性こそ牧師の妻として最もふさわしいのではないかと思えた。私たちはおたがいの家庭にも出入りして親しくしていたからけっして唐突なプロポーズではなかったと思う。しかし結婚の申し出ではあっさり断わられてしまった。

- 76 -

「あなたが牧師にならないのでしたら考えてもよいお話ですけども、私は牧師夫人にはなりたくありませんからお断わりいたします」

この人は牧師の妻として生きることがどんなに厳しいことなのかよく知っていたに違いない。うまいこと断わられてしまった。利巧な人であった。たとえ熱心な立派なクリスチャンであっても、牧師の妻になるということは、たんに一人の男性の妻になるということ以上にむずかしいことがあるに違いないと思う。そうはいってもここであきらめてしまうわけにもいかない。私は別の機会を待つことにした。

その頃、よくいろいろな相談を私のところへ持ちかけてきていた一人の女子神学生がいた。神学生ともなれば、牧師の妻になるということは将来の問題として一応考えているはずである。いくぶん親しくなってみればまんざら可能性がないわけでもないと思つた。

ある晩、授業が終わると早速彼女を誘つて人気の少ない学習院の前の通りへ出かけていった。道々歩きながら懸命に口説いたわけであるが、どうも私の期待どおりにことは運ばなかった。遊び半分に女を口説いていたわけではない。牧師になるならば恥づかしいくない仕事をしたい。そのためにはなんとかよい協力者をえたい。そう思つて真剣にプロポーズしてみたのである。いつの間にか私たちは池袋駅まで歩いてしまった。こんなプロポーズの仕方であつて相手の心を捉えることができるはずもなかった。私は再び失望を味わう破目になつたのである。

結婚にはまずおたがいの愛情が前提となる、とよく言われる。

たしかにそうには違いない。しかしながら、牧師の妻になるということが本当に愛情だけで決められるものだろうか。愛していても相手は牧師である故に結ばれないこともある。一人の男性を愛し、かれと結ばれる。それだけでかたづかない問題が牧師夫婦にはあると思う。牧師の妻は夫と共に主のご用のために召されているはずである。牧師夫婦の愛はこの召命の基礎の上に保たれるものだと私は考える。このような根拠がなかったならば、どうして妻が夫を助けて、経済的にも精神的にもその負担に耐えて縁の下で力持ちとしての役わりを果たしていくことができるだろう。牧師夫婦は人間的な愛情のみに成り立つものではないはずである。

しかし、いくら相手が神学生であっても、使命感だけで口説き落とすのは無理であつた。私はどうやら作戦を誤つたようである。それでも私はあきらめなかつた。三度目の正直ということもある。私はその機会の訪れるのを待つことにした。

夏になつた。修養会や講習会などいろいろな行事がはじまる頃である。私のもとに一通の手紙がとどいた。それは保育学校へ進むために、予科だけで神学校を去つていった同級生の一人からであつた。私のクラスには女子は一人しかいなかった。高校をでたばかりで神学校へ入つてきた、まだお下げ髪の彼女を私たちは共通の妹のような感情で取り扱つたものであつた。特別親しかったというわけでもないがおたがいによく知り合つていた。

彼女は牧師の妻になるには幼稚園の先生の資格をとつておくことが一番よいと考えて、神学校を途中でやめて保育学校へ進んだ。彼女の頭の中には、そのことが将来夫を助けて働くために必要な

ことだという考えがあつたのである。

彼女の手紙は近く上京するという内容であつた。なにか私の心にひらめくものがあつた。牧師の妻になるということを最上の使命と考えている人がそこにいたのだつた。どういう結果になるかわからないけれど、彼女に会ってみよう。そして思いきつてぶつかつてみようと思つた。

しばらくすると彼女は上京してきた。話し合う機会はすぐやつてきた。しかし彼女はすぐに返事をくれなかつた。あまり唐突でびつくりしてしまつたらしい。しかも彼女は私の求めに返答する前に解決しなくてはならない難問題をかかえていたのだつた。そのため上京したのだということであつた。話を聞いて詳しい事情を知つた私は、彼女に同情すると共に、そこに大きな可能性もあることを見いだした。そして私は強引に彼女の返事をかちとつてしまつた。

私たちの結婚は一種の政略結婚のようなものかもしれない。牧師になろうという者と、牧師の妻になりたいと願つていた者が共通の目的のために結ばれたのである。私たちは召された働きのためにおたがいが必要としたのである。そのことの中におたがいを理解し、愛が育つてきた。それからというもの、私たちは同じ目的のために分かち合う労苦の中で、おたがいの愛情をたしかめあつて生きてきたのである。

結婚式をあげると間もなく私たちは北海道へ向かつて旅だつた。新しい任地への旅が私たちにとつての新婚旅行であつた。

- 79 -

3 原始林の中の歌声

南十字星

ここには三つの沖縄コロニアが連なつて存在する。その中で第一コロニアが一番大きなコロニアである。約二五〇世帯、一五〇〇人の人が住んでいる。第二コロニアはその半分、第三コロニアはずっと小さく第一コロニアにくらべると四分の一ぐらいである。どのコロニアも面積からいえば大体同じくらいの大きさで、平均一万六千平方キロメートルもある。このような広大な地域に、点在して住んでいるわけである。現在三つのコロニアをつなぐ縦貫道路ができていて、コロニア相互間の連絡は容易になつたが、私たちがコロニアに入つた一九五九年（昭和三十四年）頃には、第二コロニアに入植がはじまつたばかりで、奥深い原始林が二つのコロニアの間にわだかまり、徒歩か馬によるのほかは往来することはできない状態であつた。

第一コロニアはモンテローを経てサンタクルスまで約一〇〇キロメートルの距離があり、コロニアから先は道路らしい道路もなく、このあたりで一つの奥づまりを形づくつていた。まだどこも原始林はかりで、切り開いて耕地になつていゝ部分はごくわずかであつた。

コロニアは中央の道路を境に北と南に分かれていて、二キロメートル間隔に左右に道が延びている。どの道も約一〇キロメートルほどの奥行きがあり、この道にそつて移住者たちが点々と住ん

でいた。

このコロニアに移ってきてしばらくしてから、生活が落ち着きを取りもどすと共に、早速活動をはじめることにした。コロニアの中は家と家とはなれていたので徒歩ではとても訪問はむずかしい。そこで馬を一頭買うことにした。生まれて初めて馬に乗るわけである。他人が乗っているのを見るとたやすいようでも、いざ自分が乗るとなるとそんなにうまくはいかないものである。うつかり馬の後ろに回って手をかけたので、下腹部をひどくけり上げられて息がつまるような痛さを味わったこともあった。どうやら馬の御し方を覚えて道に出るようになったものの、馬の動きに自分の体を合わせる事ができず、絶えず下から突き上げられて尻をすりむき、痛さに耐えかねて馬から降りて歩かねばならないようなこともあった。しかし間もなく馬にも慣れて広い範囲を訪問できるようになった。

日本から持ってきたトラクトや、自分で作った新聞、こういったものを持って毎日のように一戸ずつ訪ねて歩いた。

「今度このコロニアで働くようになった新教の山畑というものです。よろしく」

まるでなにかの選挙運動でもしているかのように、コロニアの人々に顔を覚えてもらおうと必死になって家々を回って歩いた。心よく迎えてくれる家は少なかった。半年の間、毎週子供たちを通して新聞を配り、いくらかは名前を知られていたにしても、実際に訪問してみると案外多くの人は冷淡であった。馬の背にゆられて長い道のりを行くのであるから、一日にそんなに多くの家を訪ねて回ることはできない。心よく迎えてくれる家があつて、茶

- 81 -

の馳走にあずかるようなことがあればなおさら多くの時間を要する。そして馬の足はのろい。帰途につく頃はいつも日が暮れて暗くなっていた。

どこまでも真つすぐに続いているコロニアの道には人影も見えない。日中でもこの道で人に出会うことはまれであった。道の両側はまだ開拓されていないうつそうとした原始林で、木々の茂みは道におおいかぶさり一層道幅を狭めていた。家の入口らしいところを見つけてはそこに入っていく。奥の方に見すばらしいモタクー屋根の家がある。しかしほとんどの家に人影は見えない。チラリと子供らしい姿が見えるがすぐ消えてしまう。声をかけても応答がない。馬から降りてしばらく待っていると家の蔭から子供の顔がのぞく。声をかけると脅えたような表情で引込んでしまう。あまり人を見ることのない孤独な生活の故か、子供たちは人影にも脅えるのである。親たちは畑に出て行って家には子供たちだけしかいない。それも小さな子供たちばかりだ。三才位の子供が一人で赤ん坊のおもりをしている家もあった。そして、犬や猫やニワトリだけがかれらの遊び友だちであった。

私は持ってきた印刷物を目につきやすいところにおいて再びもとの道にもどっていく。そして私の心にはいいようのない重いしこりがよどんでくる。こういう訪問をくりかえしながら、日も沈む頃になってやっと家路につくのであった。砂ほこりの暗い道をたどりながら、馬の背にゆられて帰ってくる私の心はけっして晴れやかではなかった。

孤独。コロニアの生活を一言でいえばこの言葉しかない。厚い緑の壁にへだてられ、原始林の中にわずかに切り開かれた狭い小

さな空間に息づいている生活。ここでは「隣」という言葉の持つニュアンスは、その言葉自体がもっているものとは大分違うのである。この「隣」は近くへおしやられてしまい、その間に大きな距離と空間がわだかまっている。おたがいに顔を合わすことも少なければ、言葉を交わす機会もまれである。「隣」を意識することの本当に少ない生活である。このような孤立した、原始林の中にすっかり埋没してしまった出口のない生活をしている人人、そして子供たち。おそろしいほどに単調な生活になじんでしまったのか、その無表情な顔には生氣といったものもあまり感じられない。小さい子供の中には私の顔を見ると火のついたように泣きだす子供もいた。見なれない姿に脅えてしまうのである。

家々を訪ねる毎に私の心は暗く重くなっていくのであった。この世から遠くへだてられた場所に生きる人々は、また自分たち自らも狭い枠の中へ閉じこもろうとするように見える。親しく話し合うことはまれであった。そして手ごたえのない訪問をくり返すことに私は急速に疲れを覚えていた。福音を伝えなくてはならない。特にこのような場所に生きる人々にこそ伝えなくてはならない。私はそのためにここへ遣わされたのではなかったであろうか。そう思えば一層責任を強く感じるものであったけれども、単調な訪問の明け暮れがいつしか耐え難いものとなっていたのであった。

ある夕方のことである。その日は特に遠いところまで足をのばして訪問して歩いたので、帰路についた時はもうすっかり日が暮れていた。暗い夜道を馬の背にゆられて歩いている私の心の中には、過ぎたこと、日本の生活、いろいろなことが次々に思い出されていた。私はその時、エジプトの肉を恋したうイスラエル人の

- 83 -

ようであった。こんなところへ来なければよかった。そんな気持ちさえ頭をもたげてくる。いつまでもこのような訪問をくりかえさなくてはならないのだろうか。明日の訪問はどうしようか。どうしても消極的になってくる気持ちを引きしめながら馬を急がせるのであった。

こうして道をいく間に私は一つのことを思い出した。それは私の最初の任地であった北海道の美唄で聞いた話である。

北海道の伝道の初期に、上川天塩方面で一人の宣教師が働いていたそうである。かれは天塩川流域を馬の背にゆられて伝道して歩いた。その当時のこのような辺地では乗り物といっても馬ぐらいしかなかったのである。まだ未開拓の時代のこのあたりを、馬に乗って開拓農家を回りながら伝道して歩く宣教師の姿。私はふとそのことを思い出した時に、その宣教師の味わったであろう厳しい労苦を考えざるをえなかった。私自身も今同じように馬の背にゆられながら開拓地の伝道に励んでいる。同じような苦しみを味わいながら私も一人前の宣教師に育っていくのかもしれない。その宣教師に似た自分の姿を見た時に、私は味わうべき労苦も似たものであるべきだと考えた。姿の相似が労苦の相似にいたってはじめて、主に仕える者として共通の場に自分を見いだすことができたのであった。そして私の心から急速に暗い重圧が取り去られていくのが感じられた。

月のない暗い夜であった。晴れた夜空には銀河が美しく流れ、無数の星が輝いていた。私は南に向かって歩いていた。行く手にはひととき美しく南十字星がその姿を見せていた。私は十字架に向かつて歩いていたのであった。十字架の道。それはヴィア・ド

ロロサ（苦しみの道）である。私が召されていたのはこの道ではなかったであろうか。「わたしについて来なさい」。私はもう一度そこでこの声を聞いたのであった。いつしか激しい感動が全身を包んでいた。そして手綱とる手にも力が入り、馬の足どりも心なしか軽やかになったようであった。

ここはお国を何百里

クリスマスが近づいていた。小学校は十一月から休みに入っていたので、私たちは小学校を訪れることも子供たちに話を聞かせてやることもできなくなっていた。コロニアに移ってきたばかりで訪問の他はなにもしていなかった。ボリビアにきて初めて迎えるクリスマスをどのように祝ったらよいのか見当もつかない状態であった。そこで私たちはまず日曜学校をはじめることにした。幸いに私たちの家は二間に仕切られていて、一つは寝室で他は三坪ぐらいの広さの居間になっていた。その部屋は床が板張りになっていた。子供たちを座らせることができた。さっそく近所の顔見知りの子供たちに呼びかけてみると、第一回はそれでも一〇人ほどの子供が集まった。二回目には二〇人近くにふえ、三回目がちょうどクリスマスになった。子供たちは近い所だけでなく、遠い所からも来ているようであった。ここでは隣といつても一キロメートル近く離れているから、遠いと言えは少なくとも六キロメートル以上は離れているはずであった。かれらはそうした遠い道を歩いてやってきた。くつをはいている子供はいなかった。ほとんどが裸足であった。かれらには日曜学校がどんな学

- 85 -

校なのかわからない。日本語でも教えてくれるのかと思つて帳面を持つてきた子供もあった。それでも、はじめて出席した日曜学校がかれらの知っている学校とは違つて楽しいものだということや、まったく違ったことを教える学校だということを知つて興味を持つたらしかった。日曜日毎に生徒の数はふえていったのである。

クリスマスの前夜、私たちは徹夜で子供たちのためにプレゼントを用意した。と言つても、このようなコロニアの中でどんな立派なプレゼントができるだろう。私たちにできたことはまったくみすばらしい小さなことであった。私たちは一生懸命に小さな天火を使ってパンを焼いた。中に手製のジャムやクリームをつめた。かれらのために用意できた最上のプレゼントはこのジャムパンやクリームパンであった。

クリスマスの朝が訪れた。部屋の中にはなにも飾りつけはなく、焼けつくような暑さの中で迎えるクリスマスはなにか異様な感じであった。それでも心待ちにしている私たちの前に二人、三人と子供たちは姿を現わし、とうとう小さな部屋一ぱいになった。二五、六人もいたであろう。初めて見る顔もだいぶふえていた。

子供たちにクリスマスの讃美歌を教え、いっしょに歌う。小さな家が子供たちの歌声で一ぱいになって、その歌声は向こうの原始林に当たつてはねかえつてくる。人気のないさびしいコロニアの一角に、楽しいうれしい歌声が響き渡つていった。お話を聞いてから外で仲良く輪になって遊ぶ。ひとしきりゲームを楽しんだ後、用意してあった手製のパンを配つてやった。どの子もなにか不思議なものでも見ているかのように、自分の手にのせられたパ

ンを眺めていた。まだこのコロニアの中ではパンも作ってはいなかったらしい。子供たちはそれがどんな食べものなのか見当もつかなかったのである。

「さあ、みんなで食べましょう」と、妻の声にうながされておそるおそるパンを口に運ぶ。一口食べると急にどの子もニコニコしだした。おいしかったのであろう。だれも口をきかない。黙黙として食べている。しかしどうやらみなこのパンが気に入ったようであった。「おいしい？」と聞いても黙っていて返事をしない。それでも手に持っていた二つのパンはあつという間になくなってしまっていた。

貧しいクリスマスだった。しかしパンを手にして少しおどろいたような表情をしながらもうれしそうにしている子供たちの顔には、どんな立派なクリスマスの祝いにも見ることもできない真実な喜びが輝いていた。そこには共に分かち合うクリスマスの喜びがあった。主イエス・キリストはこの原始林の中にも、このようなへだてられた場所にも来たりたものであった。子供たちが帰っていった後、再びもとの静けさにもどった家の中では妻があとかたづけする音だけが残っていた。夜通しかかって焼いたパンがこんなにも子供たちの喜びに変わったと思う満足感が私たち夫婦の心を満たしていた。

日曜学校に通ってくる子供たちは一般にどの子も無表情で無口であった。単調で孤独なコロニアの生活は、子供たちを喜ばせたり楽しませたりするものを何一つ持つてはいなかった。親たちは激しい毎日の労働で疲れきっていて子供の心まで考える余裕もない。子供たちはまったく取り残されてしまっていたのだった。そ

- 87 -

れでも、初めのうちは口を閉じて歌おうとしなかった子供もだんだんと大きな口を開けて歌うようになってきた。そして日曜日毎に原始林にこだまする歌声は大きさを増していった。

私たちの生活もコロニアの人々と一つも変わりはなく、遠い隣人と顔を合わすことも声をかけることもないさびしい毎日を送るだけであった。家に閉じこもっているかぎり、私たちは家族以外のだれの顔も見ることができなかった。恵美子はいつもひとりぼっちだった。かわいそうだと思っても、一日中いっしょになつて遊んでやるわけにいなかったし、私が訪問に出かければなおさら家の中はさびしくなってしまう。隣の家は遠くてまだ四才になったばかりの娘を一人で遊びに出してやることはできなかった。

妻は孤独な毎日を、懸命に草取りをしたり、野菜作りをしたり、なにかに仕事を見つけては上手に過ごしていた。暗くなつてから訪問を終えて家に帰りつく時、小さなランプの灯の下に用意されてあるささやかな食卓にも、毎日訪問に出歩く私へのいたわりと心づかいがこもっていた。言葉には表わさなくても、さびしさに耐えて家を守ることがいまの彼女にとって精いっぱい夫への協力なのであった。そして、彼女のそばではいつも恵美子が一人で人形をもつて遊んでいた。恵美子は良い子だった。わがままもいわず、まるでそれが自分の役わりだと思っているかのように、おとなしく一人でよく遊んでいた。

コロニアの他の親たちのように、私たちも自分たちの仕事にまけて、いつしか娘のことを深く考えることを忘れてしまっていたようだった。訪問に疲れて帰ってきてても、あどけない顔で無心に寝入っている子供の寝姿を見ることは私には大きな慰めであつ

たけれども、その子の中にいつのまにか起きつつあった変化には一つも気づかなかったのである。

ある日の午後、スペイン語の勉強をしている私のそばで恵美子はうれしそうに独りではしゃいでいた。あまりうるさいので強く叱ってしまったのであるが、その日、訪問にも出ないで一日家にいる父親の存在が、娘の心をどんなに楽しいものにしていったか理解していなかった私が悪かった。強い剣幕におどろいて恵美子は急に泣き出すと妻のところへかけていった。隣の部屋から妻に訴える娘の声が聞こえてきた。

「ママ、恵美ちゃんがパパをしかられた」

妙なことを言うなと思ったその時、私は娘の言葉が意味するものが何であるかを悟った。そして、私の心の中には激しい渦が巻きおこってきた。今まで気づかなかったけれども、恵美子の言葉づかいの中でデニオハの使い方がすっかり乱れてしまっていた。

幼い子が一人遊びをするかどうかになるのか学んだことがある。友だちのいない子の一人遊びは、一人で何人もの役をするので、自他の区別がつかなくなるといふ。それならば、きつと言葉づかいも変わってくるはずである。そうすると私たちは知らずしてその実験をわが子の上に試みていたのではなかったであろうか。私は自分のうかつさを悔やんだがすでにおそかった。

親といっしょにおれば子供もさびしいことはないだろうと思っていたのは誤りであった。この子も孤独であったのだ。そしてなによりも友だちを必要としていたのであった。気がついてみると、恵美子はこの頃しきりに弟を欲しがっていた。夜寝る前には必ず「かみさま、恵美ちゃんにかわいい男の赤ちゃんをください」と

- 89 -

祈ることを忘れなかった。この祈りがきかれ、私たちの家が赤ん坊の泣き声でにぎやかになったのはそれから一年も後のことである。

恵美子の足は蚊にさされたあとが化膿して、たくさん腫れものができてひどい状態になっていた。なにしろ夕方になるとものすごい蚊の大群がおしよせてくる。そして軒下には三〇センチぐらいの厚みのある蚊の層ができて、家全体がウワツというなるような音をたてるのである。薄暗いところで食事していると口の中にまで蚊が入ってくるような状態であった。もちろん日中もひどい蚊である。その蚊の大群から逃れることはできない。昼間とはかく、夜ともなれば、蚊帳の中に早くから逃げこまなければ、食事をすることも、本を読むこともできなかった。娘の足だけではない。妻の足もひどく腫れ上がっていた。コロナの人々は蚊に慣れるまでのしんぼうだといって笑っている。かれらも同じような苦しみを味わってきたのである。その話を聞いていた故であるかもしれない。胸が痛む思いをしながらも、私は妻や娘のみにくい足から目をそらすことができたのであった。しかし、今度娘の中に見いだした事柄から私は目をそらすわけにはいかなかった。

恵美子に友だちを見つけてやりたい。そう思うともうじつとしておれなかった。娘の上に、同じコロナの他の子供たち、日曜学校に手を引かれてついできた小さな子供たちの顔がいくつかダブってきた。これはけっして自分の子供だけの問題ではない。コロナ中の子供たちに共通のことに違いない。そう思うといっそう強く胸が痛んできた。とにかく、小さいことでもよいからでき

ることをはじめてみよう。私はそう考えるとさっそく近所の人々を訪ねてみることにした。

コロナに住むようになってすでに数カ月過ぎていたけれども、隣近所との交際もまだはじまっていなかった。隣といっても五〇〇メートル以上は離れていたし、カトリック教会の支配力はコロナ全体にいきわたっていたから、どこへ行っても新教の牧師は特殊な目で見られ、警戒心をもって迎えられたので、とても親しくなるところまでいかなかった。訪ねていったどの家でも私の言葉に耳をかしてくれなかった。私が新教の牧師だからかもしれないと思っただけで、費用のかかることを恐れる親もいたし、距離を問題にする人もいた。けっきょく皆のいうことをまとめてみれば、まだ保育園を作る時機ではないというのであった。親は畑仕事で忙しい。特に開拓初期のコロナではそこまで考えている余裕はないといきる親まであった。なんということだろう。このような時にこそ本当に保育園が必要であるのに親たちは目先のことに追われて理解してくれない。私は深い失望感に襲われてしばらくは訪問することも中止してしまった。

何もわからず一人でおとなしく遊んでいる娘を見ると、あきらめてしまつてはならないという気持ちが強まってくる。だれかがやらなければ子供たちはいつまでも置きざりにされてしまうのだ。再び勇気をだして私の訪問は始められた。しばらくの間根気よく周囲の人を訪ねて説得をつづけた。そして、やっと私の気持ちを理解してくれる親が何人かでてきた。おそらくどの親も考えることは同じであったはずである。しかし私の申し出を素直に受け入れるには時間がかかった。たぶん何かに利用されるのでは

- 91 -

ないかという恐れと、カトリック側の顔をうかがう思惑がどこかにあったのであろう。それでもどうやら五人の子供をえることができた。それも、週に一度だけその子供たちを借りるという形でやっと実現したのであった。そして小さな、本当に小さな保育園がはじまったのである。

恵美子に友だちができた。飛んではねて喜ぶ娘の顔を見ているとなぜか泣けてくる。そしていつしよになった子供たちにも初めて子供らしい世界がこのコロナに与えられたのであった。この子供たちはまだ歌うことも、遊び方さえもしらない。途方もなく違った世界に飛び込んだようなとまどいを感じていたのかもしれない。じつと身動きもしないで部屋の隅にうずくまってしまうただけであった。

妻にも仕事ができた。生き生きとした表情で子供たちを迎える姿を見ると、ここにも別の必要があったことを知るのであった。

初めて子供たちが集まってきた日、私はこの子供たちがどんなに孤独な状況の中で育っていたのか改めて感じさせられたのであった。しばらくして雰囲気にもなれたのか、子供たちはにぎやかに遊びはじめた。しかし女の子は人形を与えられてもその人形をかかえているだけであつたし、男の子に自動車を与えてもそつとふれてみるだけで動かすことも知らない。慣れてくると、中には妻の体にさわったり、むやみやたらに手で打つては逃げていったりする子もでてきた。かれらはその他に親愛感を表わす方法を知らないようであった。子供どうしの遊びといえ、ただ外を駆けまわったり、おたがいに取っ組みあつてころげまわることだけであった。そこには疎外され、孤独の中に育ってきた子供たちの偽

りのない姿があった。この子供たちも保育の回数を重ねるにつれて、新しい遊びも覚え、元気に歌う明るい子に変わっていった。

ある日、一人の男の子にたずねてみた。

「トシ坊、きみはどんな歌を知ってるの」

「………」

「ねえ、なんでもいいから知ってる歌を歌ってくれないか」

コロニアの子供は一般に非常に口が重い。どんなことを聞いてもだまつていて返事をしないのが普通である。意思表示ということを母親の胎内に忘れてきたのではないかと思うほどである。しかし単調で殺風景なコロニアの生活のことを考えれば、この子供たちがハキハキ返事をしないからといってかれらを責めるわけにはいかないだろう。

トシ坊はしばらく黙っていたが突然元気よく歌いだした。まったく調子はずれのひどい歌であったけれども、強く私の心にくいこんでくるように感じられる歌であった。

ここはお国を何百里

はなれて遠きポリビアの

赤い夕日にてらされて

友は野ずえの石の下

トシ坊には歌の意味はわからない。けれども父親の膝にだかれて覚えた歌だった。遠く故郷沖繩を離れ、ポリビアの原始林の中で孤独な明け暮れを送っている父親が、一日の激しい労働の後でわずかな酒に酔って子供に歌ってきかせた歌だった。入植して間もなく病気に倒れていった仲間を想い、口にはいい表わすことのできないさびしさを歌に託し、心をまぎらわしている父親。その

- 93 -

そばでいつも耳にし、そして覚えた歌なのである。昔よく歌われ、戦後もその哀調に富んだメロディーが好まれて歌われてきた軍歌を、このようなところで子供の口から聞くとはい思ひもよらぬことであつた。ポリビアに場所が移しかえられて歌われている歌詞を聞くと、それを歌っている父親の深い孤独感を痛いほど感じさせられるのであつた。子供も親もみんな孤独なのであつた。

週に一度の借りものの子供相手に開いた保育園であつたけれども、それは娘のためにも、またコロニアの子供たちのためにもなくてはならぬものであつたのである。子供たちだけではない。私も妻もこのことによつて生きがいを与えられ、かいく見当もつかないコロニアにおける働きの中で、歩むべき道を示され、勇気づけられたのであつた。そして、身のまわりの小さな体験を通して新しい目を開かれて、どのように私たちは仕えていかななくてはならないかということを学んでいった。

女子青年学級

正月も過ぎてしばらく経つたある日の午後、一人の若いセニョリータ（ここでは未婚の女子青年をこう呼ぶ）が通りから入ってきた。私たちの家は板で囲つてあるのだが、その板壁も乾燥してしまつて板と板との間が一センチも隙間があいているので、家の中にいてもだれが敷地の中へ入ってくるのかよく見えるのである。めつたに人が訪れてこない頃のことであつたから、私はまったく不思議なものでも眺めるようにそのセニョリータの近づくのを板の隙間から眺めていた。

やがて戸口に着いて案内を乞う声がした。もちろんその時にはこちらですでに立ち上がっていた。

「あの、こちらは新教の教会でしょうか」

教会ですかと開かれて少々返事にとまどってしまった。コロニアのどここの家とも変わりないモククー屋根のあばらやである。とても教会ですと答えるわけにもいきかねる。まだ信者もいないし、強いていえば牧師だけがいるに過ぎない。

「私は牧師ですが何かご用でしょうか」

うまい返事をしたと思ったのだが、さりとて他に返事のしようもなかったのである。それでも彼女は私の返事を聞くと非常に喜んで、目を輝かしていった。

「まあよかった。先生、集会はいつありますか」

私は自分の耳を疑った。「集会」という言葉を聞かなくなってからだいぶ時が経っている。このコロニアの中でこの言葉を使う機会はまだ一度もなかった。日本にいた頃は耳にタコができるほど「集会」という言葉を聞きもしたし、使ってもきた。しかしここで久しぶりに聞くこの言葉はなんと新鮮な響きをもっていることである。ふだん気にもとめないで使っていた言葉も、こうしたへだてられた場所で聞く時、それはまったく意味深くなつかしいものに変わってしまう。私はすっかりうれしくなってしまった。そしてこの人はクリスチャンに違いないと思った。

「集会ですか。じつはまだやっていないんですよ。日曜学校は始めていますけどね、大人の集まりを聞くとこまでいいくないんです。あなたはクリスチャンですね」

「ええそうです。私沖繩にいる時に洗礼を受けました」

- 95 -

「それはよかった。私たちもここで一日も早く礼拝を守れるようになりたいと願っているんですがね、私たち夫婦以外にだれも信者がいないのでさびしく思っていたところです。あなた今度の日曜日から来ませんか。いっしょに礼拝を守りましょう」

「私がポリビアに来た時、ここは皆カトリックで新教の教会は無いと聞かされていたのです。け

れども数日前に、このコロニアに新教の牧師さんが来ているという話を聞いたものですからお訪ねしてみたいのです。本当に今度の日曜日から礼拝に出られるのでしょうか」

「もちろんですよ」

「よかったわ。私が沖繩にいた時は教会が遠くて礼拝にはなかなか出られなかったのに、ポリビアに来たら毎日曜日礼拝に出れるとは、こんなうれしいことはありません」

思いがけないところに一人のクリスチャンを見いだした私たちの喜びも大きかった。そして次の日曜日、私たちはこのコロニアに入って初めての礼拝を守ることができた。私たち夫婦とこのセニョリータの三人だけの礼拝であつたけれども、私は一生懸命に説教した。ポリビアへ来て最初の説教であつた。牧師にとって、たとえどのように貧しく小さな礼拝であっても、福音を語り、言葉をもって礼拝に仕えることができるということはなんと光栄なことであり、またうれしいことであろう。

この日から私たちにとって日曜日はなによりも楽しくまちどおしいものになった。日曜学校が終わって子供たちが帰った後、三人集まって礼拝を守る。ともに主を賛美し、み言葉を聞くことは孤独な私たちにとって大きな慰めであり、励ましとなった。

コロニアはほとんどカトリックの勢力下におかれていた。このセニョリータが外人登録の書類を作るために事務所にいくと、係の人はなにも聞かないで宗教欄に「カトリック」と書き入れようとした。彼女があわてて「私は新教です」というと、「この方がよい」といわれたそうである。とにかくここでは「新教」ということはタブーであったのである。それだけに自分の信仰の立場を明確にして私たちのところへ来るのは非常に勇気のいることであった。彼女はやがて私たちの家族の一人のようになり、共に主に仕える労苦を分かち合うようになった。

おたがいにキリストの故に疎外されてはいても、それ故に心と心を合わせてたがいによりそって歩むようになった。不思議なことに私たちにもたらされたこの交わりが新しい働きの門を私たちのために開いてくれたのである。

この若いセニョリータを通して私たちはコロニア内の同じ年頃のセニョリータたちのことを知るようになった。まだ開拓初期のコロニアのことであるから、婚期に近い彼女たちが洋裁や料理など結婚前に学びたいと思うようなことはなにも一つできなかった。彼女たちも親たちといっしょになって山を伐り開き、真つ黒になつて終日働くだけであつた。せめてブラウス一枚でも縫うことができるようになりたいというのが彼女たちの願いであつた。

洋裁を教えてほしいという声がだんだんと強くなつてきた。たとえ新教であっても教会が洋裁を教えてくれるならば喜んで出てきますという声も聞こえてきた。そこで私たちは週に一度女子青年学級を開くことにした。主な目的は洋裁を教えることであったけれども、聖書を学ぶこともふくめて教養的な内容を加味するこ

- 97 -

とにした。いくら宗教的なものがふくまれることになつたけれども、案外どこからも苦情は出てこなかった。

はじめはそれほど多くのセニョリータが集まるとは考えていなかったが、回を重ねるにつれて人数もふえ、とうとう六〇名を上まわるようになってしまい、うれしい悲鳴をあげるようなことになった。コロニア中のほとんどのセニョリータが集まつたといつてもよかつた。

だれも訪れてこなかつた私たちの家も、この日ばかりは若々しさに満ちたセニョリータでいっぱいになつてしまふ。ふだん、身のふりかまわず働いている娘たちが、その日には小ざつぱりした服装に着替えてコロニアの各方面から楽しそうに集まつてくる。その様子を見て、「いったい今日はなにがあるのですか」と不思議そうに聞く人もいた。

「セニョリータを見たかったら、木曜日に新教の山畑のところへ行け」と人々がいうようになったとか、そんな話も耳に入るようになった。

週に一度の学級であつたけれども、私たちにとつてもこの日はとくに楽しく充実した一日であつた。妻は朝早くから仕度して娘たちの来るのを待っている。この日ばかりはいくらか化粧もしてなんとなく女らしさが匂ってくるような感じ、そして仕事を持つ喜びとでもいおうか、目の輝きもいつもと違うように見えた。孤独なコロニアの生活の中で、こうして働くことのできる日がどんなに大きな喜びを私たちにもたらしてくれたかわからない。開拓初期の私たちの働きの中心になつたこの女子青年学級は、彼女たちのために役立った奉仕であつたに違いないけれども、また同様

に私たち夫婦のために備えられた働きであったと思う。一つ一つ新しい働きの場を与えられる毎に、私たちは勇気づけられ希望をもやすのであった。

山ブタ学校

偏見が私たちとコロニアの人々との間に冷たい厚い壁をつくっていた。しかし私たちの小さな奉仕がいつしかこの壁を越えて人々に近づいていく機会をもたらしてくれた。

日曜学校に集まる生徒もだんだんふえて六〇名近くになっていた。そうなる、訪問しても前のように冷淡な態度ではなく、子供を中心にした話題が多くでるようになり、いろいろと意見を求められることも多くなった。そして、子供たちに日本語を教えるほしいという声も強く聞かれるようになった。ボリビアでは十一月に学年度が終わり、休みに入る。二月に新学年度がはじまるまで三カ月近い休みがある。そこでこの期間を利用して日本語学校を開くことにした。しかしコロニアの中には、ボリビアに来たのだからもう日本語の必要はない、スペイン語だけ学べばよいのだ、という声も強かった。とくにカトリック支持の人々の間では強く主張されていた。

その頃、コロニアの小学校で教えていたボリビア人教師の水準があまりにも低いので父兄の間に不満が高まっていた。一般にスペイン語の方は親もよくわからないので問題にならなかったが、算数となると絶えず日本の教え方とくらべてその程度の低さが問題になった。満足に中学も出ていないような者が、うまく取り入

- 99 -

って代用教員として採用され、コロニアに派遣されて来ていたのである。教師の中には逆に生徒から答えを教えてもらうようなひどい者もいた。

日本語学校を開いてみると、それでも八〇名ほどの子供が集まってきた。はじめのうちは日本語だけ教えるつもりであったが、算数も教えてほしいという希望も強かったのでこれもあわせて教えることになった。しばらくすると、子供たちの勉強ぶりに安心した親たちは、このまま正規の小学校にしてスペイン語もいっしょに教えてほしいといいだした。しかし私は伝道を主な目的としてきたのであるし、本来教育者でもないので、小学校をはじめることにはどうしても踏みきることはできなかった。

その頃のコロニアの小学校は公立の学校であり、組合がその運営に当たっていたが、カトリック教会が建てられて神父が定住するようになると共に、まるでカトリックの学校のように神父の支配下に置かれてしまっていた。そのためにほとんどの生徒は差別的に洗礼を受けさせられ、洗礼を受けようとしなない生徒は差別されるような状態であった。カトリックにならないとボリビアでは上級学校へ進学できないとか、良い職業にもつけないということがまことしやかにいわれ、本当にそのことを信じる人も多かった。新しい土地に来て少しでもその土地の人に疎外されないようになるため、かれらはカトリックになることが最善の道だと信じていたし、そのためには、たとえ形式的でも洗礼を受けることが得だと判断したのかもしれない。はなはだしいことには、生まれた子供の出生届けもカトリックの洗礼を受けていないと受理されな

い、とまでいわれていたのである。こうしたことはみな、コロナをカトリック化しようという目的で流された宣伝ではあったが、ボリビアの国情にうとい移住者たちは、それを真実として受け入れていた。しかし日曜学校へ通ってくる生徒たちはそういう強い圧力の中でも洗礼を受けようとはしなかった。そのためにかれらもカトリックの人々から激しい敵意をもって差別されるようになった。

ある生徒は日曜学校へ出席することを教師から禁止され、他の生徒は落第点をつけられた。教師の圧迫は日増しに強くなり、ついには日曜日の朝教師が路上に立って生徒を見張るようになった。そのため日曜学校の出席は激減してしまった。

私の心は痛んだ。日曜学校の生徒である故に、この子供たちが理不尽な圧迫を受け、苦しなくてはならない。それは黙って見過ごすことのできない現実であった。それでも二十数名の生徒がそうした圧迫に屈せず日曜学校の出席をやめなかった。私はこの生徒たちを守らねばならないと考えるようになった。そしてついに私は小学校開設に踏みきったのである。

政府の許可も得て、コロナ沖繩メトジスタ小学校が正式に発足したのは、一九六一年の二月のことであった。日本語学級や女子青年学級のために建てたモタクー屋根の見すばらしい建物が校舎になった。熱心な信徒であるボリビア人の教師が一人協力してくれることになり、まがりなりにもスペイン語と日本語の二つの言葉を併行して教える小学校がはじまった。実際に小学校をはじめてみると、父兄の態度はすっかり変わってしまい、妨害しようとする者まで現われてきた。私はいつのまにか反逆者扱いされる

- 101 -

ようになり、多くの父兄が離れていった。カトリック側の働きかけの他に、沖繩と日本本土の人間との間にある溝が表に出はじめていたのであった。私はまだそのことに気づいてはいなかったけれども、いくつかの苦い体験が私に日本本土の人間としてより深い意味で牧師として、どのようにこのコロナの中で働いていかなくてはならないかを教えてくれた。

集まった生徒は結局五四名に過ぎなかった。吹けば飛ぶような心細い状態であったけれども、やむにやまれない気持ちで出発したこの学校の将来を、ただ主のみ手に委ねて私たちは最善をつくすことを誓ったのである。

小学校の開設はコロナの中に一つの波紋をまきおこした。メトジスタ校へ子供を出した親たちは、組合校へ子供を出さないという理由で、反組合的行動をとっていると激しく非難され、子供たちは学校へ登校する途中でカトリックの生徒やボリビア人の子供たちからさまざまな悪口をあびせかけられるようになった。

「エバンヘリコノシルベ」(新教は能無しだ)とか、「サタナ」(悪魔)などののしられたけれども、泣いて不当を訴える子供たちを慰め励ましながら、私たちは歯をくいしばってこれらの悪口に耐えた。

もし私共の働きが真に主によって求められていることであるならば、必ずや主ご自身が私たちをかえりみてくださるに違いない。この一刻の苦しみは勝利に歩む一つの道程なのだ。私たちは困難の中にもそこに主のみ旨のあることを信じて疑わなかった。

日が経過するうちに、コロナの人々の学校に対する見方は徐

々に変わっていった。年毎にいろいろなデマがカトリックの人々によって流され、いまにもメトジスタ校はつぶれてしまうかのような印象を外部の人に与えていたけれども、その間に、学校の基礎は固まりつつあった。組合指導者たちの態度もいたって冷淡で、すべての点で私たちは疎外されていたけれども、私たちは沈黙を守り、与えられている子供たちに内容のある教育をしようと、すべての努力を授業に傾けたのである。

子供たちの勉強が進むにつれて、コロニアの中の日本語不用論はだんだんと影をひそめてきた。ポリビア教師だけの組合校にも問題が起きていた。ポリビア式の感覚で教育を受けている子供たちと親たちとの間に奇妙な阻隔が生じてきたのである。古い生活習慣を身につけてきた親たちには理解できない行動を子供たちがとるようになった。子供たちは親のいうことよりもポリビア人教師のいうことに従い、ここはポリビアだからといってことさらに親に逆らう子供も出てきた。

こうした移住地における教育は特殊である。現地式にすべてを律することはできない。どうしても民族本来の特色を生かしながら、現地に即した教育のあり方を見いだしていかなければならない。私たちが日本語を教えていることについてカトリックの人々は「山畑は日本教育をしている」と非難し、「いまにポリビア政府からにらまれるぞ」とおどかした。私たちは別に日本の教育をポリビアに持ち込んだわけではない。日本にくらべてはるかに低い、こうした地域におけるポリビアの教育の水準を認識し、どのようにしてその欠けている面を補っていったら良いかということを考え、日本語を教えると共に、日本式の算数を教えるようにしたの

- 103 -

であるし、コロニアの事情に即して女子の上級生に洋裁を教えるようにしたのである。しかしもっと重要なことは、この子供たちが日本人二世として将来ポリビア人社会の中でどのようにに有能な社会人として育っていかねばならないかということを考えなければならなかったということである。

私たちにとって学校は単に知識を与えるだけの場所ではなかった。原始林の中に閉じこめられた生活の中にも人間として学ばなくてはならないことが多くあることを子供たちに教えたかったし、また将来この子供たちが自由な人間として育ってほしいと願っていた。教師としての訓練も受けていない私自身にとって、ここで教鞭をとることはずいぶん大胆なことと思えたけれども、私は日曜学校教師としての心構えをそのままこの仕事にあてはめて働くことにしたのである。

コロニアの親たちがどのような目で私たちの働きを眺めていたのかよく解らなかつたけれども、年毎に生徒数はふえていった。三年目には一二〇名となり、四年目になるとついに組合校は解散してしまつて別個にカトリック校として再発足するようになってしまった。そして私たちの学校は一举に二四〇名を数えるようになったのである。

組合校が解散したのは、結局コロニアの親たちがポリビア式だけの教育のあり方に疑問を持つようになったためでもあるし、ポリビア人教師との関係がうまくいかなかったことにもよるのである。

私はこの学校がどのように発展していったかをこと細かに語る

気持ちはない。しかしこの学校をはじめるように私を動かしたものは、私の個人的な理想や興味ではなかったということは強調しておきたいのである。そこには人間を越えた深い動機がひそんでいるように思える。もしこのコロナに真に必要なものが何であるかということを示されなかったら、もしその必要に真実に応えることをしようとしなかったならば、私たちはとつくの昔に絶望し、カトリックの圧力に抗しきれずにこのコロナを去っていたことであろう。そして何一つ主の名において為すこともできず、伝道の戦いに惨めに敗れ去っていたに違いない。

教会は地域社会の必要に応えていかなくてもならないといわれている。しかしながら地域社会のすべての必要に教会が応えていくことは不可能である。むしろ教会は自ら応えることのできる地域社会の必要を見いだしていかなければならないのではなからうか。たとえそれがどんなに小さなことであるにしても、教会自身が応えることのできるものを明確に把握しておかないならば、地の塩として、世の光として、真実にこの世にあって仕えていく場所を見いだすことはできないし、教会が生きて働くことのできる場所はその他にはないように私には思える。

どこの移住地でも開拓当初はどうしても子供の教育はおろそかにされてしまうようである。親たちにどんなに強い関心があったにせよ、目先の営農に追われて子供のことは二の次にされてしまうのである。このコロナがまだそうした状態から脱しきれないでいた開拓初期に、私たちが学校をはじめたことは、多少の波紋をまきおこしたとはいえ、良い刺激になったようである。政府に対する一方的な依存から脱け出して、少しでも親たちが子供たち

- 105 -

の教育に責任を感じ、良い教育を受けさせようとする努力がはられるようになった。

生徒の増加につれて校舎も次々に建て増されていった。モタクル屋根で荒板囲いの粗末な校舎ではあったが、コロナの現状に即した建物といつてよかった。どこの家もみな似たようなものであったからである。私たちは見かけは貧しくとも、教育の内容を問われた時に恥ずかしい思いをしないように最善の努力をはらってきた。

私たちの学校の生徒がふえるにつれて、カトリック側はいくらあせりの色を見せるようになり、アメリカ人神父は大量のアメリカからの援助食糧をカトリック校の生徒の家庭に配給はじめ、同時に生徒の勧誘をはじめだした。もちろん私たちの学校関係者には何一つ配給はなかった。なぜそのようなことをやりだしたのか目的は明瞭であった。

子供たちは大量に運び込まれる食糧を見てうらやましく思ったに違いない。まだどこの家庭も生活は苦しく、子供たちはオヤツさえ十分に与えられてはいなかった頃である。ある子供は配給を受けている隣家の子供が自家製のパンをおいしそうに食べているのを見て父親にいった。

「おとうさん、学校が変わったらたくさんメリケン粉やミルクがもらえるそうよ。私今度からカトリックの学校へ通いたい」

父親は子供の言葉におどろいた。しかしこれも本当はのどから手が出るほどこの配給がほしかったのであるが、その気持ちをおさえて子供にいつてきかせるのであった。

「いま、うちは貧乏だけれども、メリケン粉やミルクはお金さえ

あればいつでも買えるんだよ。少しがまんしていればお前たちにもたくさんパンを食べさせてあげられるからね。もう少しのしんぼうだからがまんしようね。それよりも、お前たちはお金で買うことのできないものをメトジ
スタ校でいただいているんだよ」

私はこの話を聞かされた時、カトリック側のえげつない行為をいきどおるよりも、このように私たちの働きを理解してくれている親のいることが涙の出るほどうれしかった。

メトジスタ小学校のことをここでは一般に「山畑学校」と呼んだ。正しく名前をいつてくれる人はほとんどいない。カトリック校の方は煉瓦建ての校舎が建てられていたので、モタクー屋根の粗末な私たちの学校をカトリック校の生徒は「山畑学校ボロ学校」と呼んだ。とうとうしまいには「山ブタ学校」とまでいうようになった。けれども私たちはたとえ校舎はボロであっても立派な内容を持っているのだという誇りをもっていたから、なんといわれなくてもへこたれはしなかった。

一九六七年九月にはとうとうこのボロ学校に別れを告げる時がやってきた。それまでに、日本の教会学校のクリスマス献金で立派な食堂が一棟でき、大きな教会堂、そして校舎が次々に建てられ、見ずばらしい古い校舎はみな取り去られてしまった。その後には煉瓦建ての美しい校舎が立ちならび、立派な校門もでき上がった。かつてのボロ学校も山ブタ学校もどこかへ消えてしまった。周囲を蛙の鳴き声に取り囲まれ、層をなす蚊の大群に苦しめられたあの古い住居もなくなった。広々ときれいに整地された校庭では子供たちが明るく笑顔で遊んでいる。古きは過ぎ去りすべてが

新しくなったのである。

校舎の落成祝いを兼ねて運動会が催された日、州知事がわざわざ出席して祝いの言葉を述べてくれた。このコロニアを州知事が訪問したのはこれがはじめてのことであった。

新たに組織された鼓笛隊を先頭に、州知事の前を元気に行進する子供たちの表情は明るく希望に満ちていた。その時生徒数はすでに三六〇名をこえていたのである。開校当初のわずかな生徒がこのようにふえ、モタクー屋根の粗末な建物が煉瓦建てになって、見違える程に明るい姿を私たちの前に現わすとは、だれにも予想できることではなかった。

もう悪口をいう人もいない。「エバンヘリコノーシルベ」という者もだれ一人いなくなってしまうたのである。

4 北国への初陣

ぬかるみの道

ポリビアではマニアナ（明日）という言葉がよく使われる。「マニアナはいつまでもマニアナで決してオイ（今日）にはならない」という諺があるくらいで、まことに頼りない言葉である。

まだモンテローの宣教師館に寄食していた頃、身分証明書をもらうためにサンタクルス役所に行ったところ、係は午後きてくれというので午後にもう一度出直してみた。すると明日こいというのである。そこで次の日に改めて行ってみると「マニアナ」という。何回行っても「マニアナ」で、とうとう二一回もサンタクルスの役所に通わされてしまった。もつとも本当のことをいえば、係はそれとなく賄賂を要求していたらしかったけれども、そんなことにはさっぱり気がつかず、くそまじめに役所通いを続けたものである。私は「マニアナ」でしんぼうよく待つことを学ばされたことになる。

同じように私に忍耐を教えてくれた言葉に「アキ・ポリビア」という言葉がある。ここはポリビアだという意味である。なにか私たちには理解できないような不都合なことがおきたり、約束を守ってもらえなかったりして苦情をいうと、必ず「アキ・ポリビア」という言葉が返ってくる。郷に入っては郷に従えとでもいうのであろう。結局腹の虫をこらえてがまんしなくてはならなかった。これらのことは性急な私にはまことに苦しい経験であつたけ

- 109 -

れども、待つことと耐えることを学ぶことができたのは良い薬であつた。

町から遠く離れて住んでいる私たちは、日本のような便利な場所に住んでいる人々のようになにもかも都合良く暮らすことはできなかつた。郵便物も家まで配達してくれるわけではない。一〇キロメートル離れたサソタクルスの郵便局までいちいち取りに行かねばならない。雨でも降れば道は泥沼となり交通は途絶してしまう。道がかわいて車が通れるようになるまでは待たなくてはならないから、孤独な生活の中でなによりも楽しみにしている日本からの便りも、それまでおあずけということになる。

とにかくここではあせることは禁物である。いつも待つことがなによりも大切であつた。しかしこうしていつも耐えて待つことの多い中で、私は自分が一人の伝道者としてだんだん育てられてきていることを考えさせられた。まだ西も東もわからない牧師一年生として北海道に渡り、美唄の開拓伝道に従事したこと、そしてこの美唄での開拓伝道の労苦がポリビアに召されるために良い訓練となつていたことなどを思いおこしていた。いろいろな困難に出会う毎に私は美唄で経験した多くの事柄を思い出した。そして美唄伝道は私にとって初陣の美しい思い出としてだけでなく、苦難の中にあつても主を信頼し、従っていく力となつて私の心の中によみがえつてきたのであつた。

昭和二十七年の春四月、結婚するとすぐに私たち夫婦は北海道へ旅立った。東京で聞く「北海道」という言葉にはどこかエキゾチックな香りがする。実際に私たちは北海道については何も知ら

なかったけれども、東京仕込みの甘い幻想をいだいていた故か、遠い北の国で困難な働きに加わるのだという緊張感は少しも持つてはいなかった。

初めて開拓伝道に飛び込んでいく若い伝道者には、なにかしら悲愴な気持ちと、甘い夢のような希望や期待が不思議に入りまじった感情がある。その故かもしれないがいくらか気負いこんだ気持ちも手伝って「未知の国」の扉を開ける期待に胸をふくらませていたのだった。

札幌から汽車で一時間ばかり行ったところ、当時、北海教区総会議長をしていた平野一城牧師に伴われて降り立ったところは茶志内という小さな駅だった。駅には数人の人が迎えに出ていた。

初対面の挨拶もそこそこに、私たちはそこから目的の家まで二キロメートルほどの道を歩くために駅を出た。道は雪解けでひどくぬかっていた。うす汚れた雪がまだあちこちに残っていたし、駅前などの建物もくすぶったような色をしていた。とても想像していたようなロマンチックな場所ではなかった。

小さな市街地を通りぬけるともう人家もまばらであった。はるか道のかなたに大きな木が梢を高く伸ばし、どんよりとした雨もよいの空に黒々と立ちはだかっているのが見えた。

「あの木の下です。先生、もうすぐです」

平野牧師に話しかけていたのは、恰幅の良い落ち着いた感じの人であった。

「私、草地です。ここの郵便局の局長をやつとります」

駅で私たちにそう挨拶した人であった。その巨木の下にかれの

- 111 -

家がある。そこまで私たちは泥道を歩いて行かねばならなかった。周囲にはあまり人家の影もない。西の方には遠く、まだ、まだらに雪を残した山々が姿を見せており、その麓近くを流れる石狩川まで原野がはるかに続いていた。

このようなさびしいところでどうやって伝道したら良いのだろう。伝道の経験のない牧師一年生の私の心の中に大きな不安が鎌首をもたげてきた。東京を出る時心の中にえがいていたいろいろな計画も、この荒れ果てた風景の前に立ってみるとまったく無意味なものになってしまった。私はようやくこの厳しい現実に自分の目を向けなくてはならないことを悟ったのであった。もはや甘い期待はどこにもかけられない。

遠くはるかな地点までまっすぐに続いている道を歩んでいたが、私の目は足もとのぬかるみにだけ注がれていた。道はつづいていたが私たちの歩みはぬかるみの中であつた。私の目はそばを同じように顔を伏せて歩んでいる妻の顔に向けられた。思うことは同じであつたに違いない。おたがいの目があつた時、私たちはうなずき合つた。「ここから出発するのだね」「そうよ、ここからだわ」。私は顔を上げた。そして遠いはるかな道に向かつて元気よく足をふみ出していった。

昭和三十九年、ボリピアから休暇をえて帰国した時、私たちは再び美唄を訪れた。その時私は茶志内から二キロメートル、草地さんの家までもう一度この道を一人で歩いてみた。道はもはやかつてのぬかるみ道ではなかった。立派に舗装された、たんたんとした国道に変わっていた。黒々と前面に立ちはだかっていたあの

巨木の姿もすでになかった。いまはこの道を徒歩で歩く人はいない。バスが通り、さまざまな車が通る。独りそこを歩いている私の姿をげんそうに横目で見ながら自転車を通り過ぎる人がいるかと思うと、疾走する車の窓から不思議なものを見るような目が私を捉える。けれども私はそんなことは気にもかけない。一歩一歩ふみしめるように歩いていった。過ぎた日のことがあたかもつい昨日の出来事であったかのように思い出されてくる。この道が遠いポリビアに続く道であったことをだれが知っていただろう。

この美唄原野がやがてポリビアの原始林となり、あのぬかるみ道は膝を没する泥濘の道に変わったけれども、美唄伝道を通して与えられた多くの経験は、ポリビアにおいても再び私たちのものとしてよみがえってきた。ここで味わい知ることのできた多くの恵みを、遠く日本を離れたかなたの地でも同じように味わい知ることができた。ポリビアにあつて美唄を思い起こすことは、私たちにとつて、苦難の中においても主に信頼し従っていく道で望んでいることがらを確信する、大きな力となったのである。

ポリビアではまだ泥濘の道はつづいている。けれども、この道のように立派に舗装された道を歩む日はきつとやってくる。いま私たちは苦しい戦いを戦っているけれども、やがて祝福の日が訪れるに違いない。私はその日のたしかな訪れを、踏みしめている道の固さの中に感じとつていた。

草地さんの家に一応落ち着いたものの、私たちの住む家がまだ用意されていないと聞いて少しがっかりした。美唄の市街には適当な家がないということなので、市街から四キロメートルも離れ

ている茶志内では不便だと思つたけれども、一応そこに家を探して落ち着くことにした。郵便局の近くに空家があつたのでさっそくそれを借りることになった。しかしその家には襖も畳も入っていないので、急いでそれらのものを用意してその家に入った。家具も何もない部屋はいたつて殺風景なものであつたけれども、住める場所が与えられたことに私たちは満足していた。

北海道の四月はまだ寒い。家の中でふるえていると、草地さんが小さなストーブを持つてきて取り付けてくれた。家の前に小さな盛り上がった場所があつた。それが石炭だというのでよく見ると、細かな屑のような石炭であつた。初めてストーブの前に座つた妻は、どうしてこの石炭を焚いたらよいのかわからず、部屋をけむらせるばかりであつた。見かねて私も手を出してみたが結果は同じであつた。仕方がないのでもう一度草地さんに来てもらつてやつとストーブに火が入つた。

牧師になつたばかり、夫にもなつたばかりの私。そして妻になつたばかりの彼女。何もかも新米の私たちのままごとにもならないような生活がこうして始まつたのである。

ソーブとスープ

美唄は札幌から函館本線で北西五五キロメートルの地点にある。いまは炭砒の閉鎖や縮小などによつて人口は大幅に減つているが、当時は約九万人を数えていた。

市の東部は山地になつていて、その山あいにくつかの炭砒があつた。岩見沢から汽車で美唄にかかるあたり、右側の山腹には

三井美唄炭砒の砒員住宅が軒をつらねているのが見え、鉄道を境にして市の西側は、石狩川に至るまで広大な原野がつづいている。

美唄は屯田兵村として北海道開拓史上有名なところである。明治二十四年に最初の屯田特科隊が入植した。騎兵、砲兵、工兵隊がつくったそれぞれの部落に、美唄、光珠内、茶志内の名がつけられた。私たちが最初に住んだ茶志内は美唄市の中心から北へ四キロメートル離れたところにある小さな町である。

美唄駅を中心にして東南に向かって四キロメートルのところに三井美唄炭砒、北東に向かって谷あいによって鉄道が約八キロメートルほど奥に入っているが、その沿線に三菱炭坑の坑口がいくつかあり、山の中腹には月見台、旭台、常盤台などという優雅な名前をもった砒員住宅の集落があった。

このような地理的状况の中で、市の中心から離れたところに住んで伝道することはなかなか容易ではなかった。夜の集会を炭坑地域ですませて家に帰る頃には、もうバスも汽車もないので茶志内まで自転車を利用しなければならなかった。天気の良い日はともかく、雨の日や、冬近く雪が降るようになると家まで歩いて帰らなければならなかった。ポリビアでは四キロメートルぐらいの道のりは、すぐ隣へいくような感じでけっして遠いとは思えないけれど、その頃の私にはずいぶん長い道のりのように感じられたものである。

私たちの最初の仕事は子供会を開くことであつた。炭坑地域にある集会所を借りて付近の子供を集めて子供会を開いて回つた。開拓伝道をするにはいろいろな道具を用意しなくてはならないと思つたけれども、そんな予算もなかったので、とくに必要だと

思われた謄写版と紙芝居を少し用意して東京を出てきたのであつた。しかしそれだけでは十分だとは思われなかったから、子供会を一人でも開けるように準備したのである。

神学生時代に私は藤田正武牧師につれられていろいろな集会にでた。とくに教会学校関係の集まりに多くでたので、そこで関屋五十二先生と知り合うことができた。関屋先生は童話の名人である。私は関屋先生のレパトリーの一つである「ものぐさ仙人」をこつそりちようだいておいた。そっくりそのまま真似をするのである。これが非常に役に立つことになった。

一時間あまりにわたる子供会をカバーするには歌も教えなくてはならない。歌を教えるのはとても私の柄ではないと思つたけれども、心臓を強くしてやることにした。これは藤田式にやることの良いと思つたので、藤田牧師のやり方を取り入れた。下手くそな歌でも結構子供たちは私について歌ってくれた。

なにかまだ足りないような気がしたので手品をつけ加えることにしてみた。手品は春風イチローから手ほどきを受けてきた。どれもこれも借りものであつた。しかしどんなことが役に立つかわからないものである。春風イチローこと野田市朗は神学校で一年後輩である。昭和二十六年の夏のこと、教会学校教師講習会が信州・星野温泉で初めて開かれた時、事務局の仕事を手伝っていた私は、なんとかいっしょに連れて行ってくれとかれに頼まれたので、うまく都合をつけて事務局の中にかれを加えて連れていった。その時かれはケンちゃんという子供をいっしょに連れてきた。人形のケンちゃんである。かれは腹話術がとてうまかつた。そこで私は講習会の間に、昼食時を利用して野田に一席伺わせたところ

ろ、参加者から非常に喜ばれた。野田市朗がケンちゃんと共にキリスト教界に知られるようになったのは、たぶんこれが最初ではなかったかと思う。野田は私を寄席につれていって自分の高座姿を見せたがつていた。そこである日池袋の小さな寄席にいっしょに行つてみた。高座に上がつたかれは腹話術ではなくて手品をやつてみせた。実に器用な男であつた。そのことを覚えていたので卒業間近になつてかれから手品を教えてもらつたのである。

子供会はどこも満員であつた。子供たちだけでなく大人まで集まつてきた。ポスターを見て名乗りをあげてきた信者もあつた。子供会をきつかけにして数カ所で集会が開かれるようにもなつた。

どうやら手がかりがつかめて伝道が軌道に乗りはじめたものの、茶志内というごく小さな町というよりも部落といった方がよいような場所での生活はなんとなくものさびしかった。

周囲の人々はまだ北海道の生活になれていない若い私たちを暖かくいたわつてくれたし、ここでも小さな教会学校をはじめ、毎日曜日には子供たちが狭い家の中に一ぱいになるほど集まつてきたが、広い美唄地区全体の伝道のことを考えると、どうしたら効果的な伝道ができるのかと思ひあぐねるばかりであつた。

私たちの暮らしの方もあまり楽ではなかつた。妻は近所の人々といっしょに近くの山へウドを取りに行つたり、原野にワラビを摘みに出かけたりしたが、切りつめた生活の中で、これらの山菜が私たちの貧しい食卓をどんなに豊かにしてくれたかわからない。

ある日、函館の遣愛女学校のワグナーという婦人宣教師から小

- 117 -

包が一つとどいた。中にはいくらかの衣類や食糧が入つていた。若い伝道者の上に注がれる暖かな思いやりを感じてとてもうれしかった。その贈り物の中に茶色のボール箱が一つ入つていた。それは米軍基地でよく見かけた粉石鹼の箱によく似ていた。私はすっかりそうだと思ひこんでしまったので妻に粉石鹼だといつて渡したのである。

翌朝、家の裏手で洗濯をはじめた妻が奇妙な声をあげて私を呼んだ。

「ねえ、あなた、この石鹼ちつとも泡がでないのよ。どうしたのかしら」

「そんな馬鹿なことがあるもんか。アメリカの石鹼はとても品が良いんだぞ」

「だつて本当に泡がでないんですもの。ちよつと見てくださらない」

おかしいことがあるものだと思ひながら自分でゴシゴシやつてみたけれどやはり泡がでない。石鹼の量をふやしてみようと思つて追加して入れてみたところ、いくら入れても溶けもしないでかえつて洗濯物にベタベタくつきはじめた。変だなあ、と思つてボール箱をもう一度よく見た瞬間、私は思わず吹きだしてしまつた。

「ねえどうしたの。なにがおかしいの」

「これ、ソープじゃなくてスूपだったよ」

妻もいっしょになつて笑いだした。よくたしかめもしないで石鹼だと思ひ込んでいた私の大きな失敗であつたけれども、スूपではいくらやつても泡がでるわけがない。物ほしげな心でいると

こんな失敗もあるものだ。

どこの馬の骨

美唄には大きな炭坑労働組合が二つあった。三井と三菱の二つの組合は北海道内の労働組合の中でも最も有力な組合であったし、とくに三井美唄労働組合はその急進的な組合活動でよく知られていた。その頃、総評の高野実議長は「われわれはキリスト教になにも期待していない。むしろ邪魔をしないでほしい」と断言してキリスト教界に波紋を投げかけていた。

その年、日本基督教団に職域伝道専門委員会が設けられた。職域伝道という耳なれない言葉にとまどうことも多かったと思うけれども、一般にこの新しい伝道の意義がよく理解されず、単なる職場伝道と混同されることも多くあったようである。職域伝道が説かれる場合には常に労働組合との関連が強調されていたし、初期においては、職場内に聖書研究グループが作られるように働きかけが行なわれていたのである。

私自身職域伝道について十分な理解を持っていたわけではないけれど、伝道の場合が炭坑地帯であり、炭坑労働者がその対象になっていたのであるから、職域伝道に無関心でいるわけにはいかなかった。

美唄では労働組合と関わりを持つことは困難であったし、炭坑では職場内に伝道活動の場を持つということは実際には不可能なことであった。炭坑では職場と家族生活の場とは密接に結びついている。それ故目標は職場そのものよりも住宅地域に向けられる

- 119 -

べきであった。そこは炭坑労働者とその家族だけで形づくっている一つの特異な共同体であって、たぶん閉鎖的な性格を持っている。その閉鎖性は経営者との雇用関係から生まれてくるものもあるし、この社会を形づくっている人々自体の生活態度から生まれてくるものもある。いずれにしてもこの炭坑社会では職域という用語を職場だけに限定できない特質を持っているといえよう。そういう意味で私は青少年問題、家庭の問題など一般の社会的問題をひっくるめてこの炭坑社会で伝道することを考えていたのである。しかし現実には、この炭坑社会に居住の場を持たない者にとっては、炭坑伝道はあたかも蟻螂の斧をもって巨人に立ちむかうようなものであった。

私は組合事務所をいくども訪れてみたけれども、まったく相手にしてもらえなかった。強大な組織力を誇り、北海道における最も戦闘的な組合として評価される実力を備えた組合の目から見たら、その存在さえも知られていないような小さな教会の牧師など、まったく足りぬものに見えたことであろう。鼻もひっかけないといった冷たい態度であしらわれてみると、安直にこうした組合との関わりを求めていった自分自身を反省せざるをえなかった。

開拓伝道に深い経験を持っている〆牧師からこんな話を聞いたことがあった。

「開拓伝道をする人は少なくとも五年、あるいはそれ以上かもしれないが、どこの馬の骨かという扱いを受ける覚悟をもっていないければ、その仕事をやりとげることにはできない」

たとえその覚悟をしていたとしても、実際に馬の骨扱いされる

ことはつらいものである。しかし考えてみると、この馬の骨はただの骨ではない。サムソンはロバのあご骨一つで千人を打ち殺したと聖書に記されている。もし神がこの骨を用いたもうお方であるならば、とるに足りない馬の骨だとても主のために強力な一つの武器となりうるはずではないだろうか。≪牧師がいうところの馬の骨としての忍耐は、その時を待ったためのものに違いない。たとえ馬の骨であるとしてもそういう骨でありたいと私は思ったのである。≫

神学校をでたばかりでまだ伝道経験のない私には、炭坑伝道は少し荷が重すぎたようであった。どこもかしこも壁だらけで、その壁を突き破っていく力もなく、私は立ち往生せざるをえなかった。そのような時、妻は彼女の父親のことを折にふれて私に語ってくれた。炭坑労働者の中に入って働いているこの父親の苦しい闘いを知ることが私にとって大きな励ましと力になった。

妻の父、若林時正は旧ホーリネス教会の牧師であった。満州四平街で困難な伝道に従うこと数年の後、日本にもどって神戸にある小さな教会の牧師となった。日本の教会の上に弾圧の嵐が吹きすさんだ戦争の末期、かれは特高警察の手によって捕えられ獄舎につながれ、かれの教会は解散させられてしまった。

戦争が終わって帰宅を許された時には、そこには牧すべき羊の群れはすでにいなかった。かれは家族をつれて山口県宇部市に移り、宇部沖ノ山炭坑の一坑夫として働くようになった。かれの身をもってする炭坑伝道の厳しい苦難の道はこの時から始まった。

炭坑の切羽の奥深く、炭塵にまみれながら働く者の苦悩を身を

- 121 -

もって味わいながら、かれは周囲の人々に福音を伝えようと努力した。「労働者に福音を伝えるには、かれらと同じように労働の苦しみを味わわなくてはだめだ」という意見がある。その点ではかれは文字どおり炭坑労働者になりきって福音を伝えたのであった。しかしかれの働きの方向は途中から大きく変わっていく。労働者伝道は労働者になりきることによって可能化されるものではない。かれは労働者になりきることによって、まず労働者自体が解放されなくてはならないことを知ったのである。かれは真実な一人のクリスチャンとして生きる道を労働運動の中に見いだしていった。周囲の人々の切な要望もあつたにしても、かれの心には、いと小さき者の一人に仕える真実な思いが、かれをして組合指導者としての重い責任を負う決心をなさしめたのであった。

かれの心の中には伝道者として生きるか、あるいは組合指導者として生きようかという深刻な戦いがあつたと思う。しかしかれが選び取った道こそ、その時、宇部沖ノ山砦のすべての労働者がかれに期待していたことであつた。

かれは福音を伝えるということを言葉ではなく、この世に仕える姿の中に実現しようとしたのであった。組合内部における相剋、あるいは外部からの切りくずし、戦いは絶え間なくつづいていた。私が美唄の炭坑労働組合から冷たくあしらわれていた時、かれは別な場所で、労働組合自体の中にあつて厳しい戦いをつづけていたのであった。

かれの戦いの真実の苦悩は、組合活動の内部にあつていかに伝道者としての誠実さに生きるかということではなかったであろうか。かれの苦しい闘いを知ることによって私は、組合との関わり

をえられなかった現実の中に、私自身が組合を伝道のために利用しようと考えていた誤りを教えられたのであった。

かれは停年で退職した後、再び伝道者として献身し、困難な開拓伝道に身を投じていったのであるが、それはかれの長い組合活動の中で変わることのなかった誠実な生き方と、かれの使命感を示すものだと思う。私は妻を通してかれの信仰を知り、その実践を通して、伝道者として生きる苦悩にふれてきたのであった。

立って説教したい

炭坑地域への伝道は市の北端に位置する茶志内からは容易ではなかった。住居を炭坑住宅の中に移したいと思っても、会社の所有地の中に入ることは不可能であった。また炭坑地域が二方向に延びている美唄の地理的条件もあって、結局中心に位置している美唄市街の中に住居を求めることが最善と思われる。

夏も過ぎて秋の気配が濃くなると共に、なんとか根雪のこない前に家をみつきたいと願った。家探しは容易ではなかったが、草地さんの努力でやっと一軒あいている家が見つかった。八畳と六畳の二間であったけれども、二人の生活には十分な広さであったし、いよいよ町の中へ出て仕事ができると思うとうれしかった。もうそろそろ雪が降りはじめた頃であったので急いで引越してきた。この家もはじめは広いような感じもしたけれども、教会学校がはじまってみるとたちまち狭さを感じるようになってしまった。

仕事のはじめは例によって子供会を開くことからはじまった。子供会に集まった子供たちにチラシを配って毎日曜日に教会学校

- 123 -

があることを知らせる。まず近所の子供たちが興味をもって集まってきた。一カ月もするともう子供が入りきれないほどになってしまい、私は部屋の隅にへばりつくようにして話をしなければならなかった。

同じ部屋で聖日礼拝も行なわれるようになった。小さな朱塗りのちやぶ台が説教のための机の代わりをつとめた。正座して説教するので私の足はすっかりしびれてしまう。礼拝が終わって立ち上がろうとしても立てないことがしばしばであった。せめて二〇人、三〇人の会衆と共に、立って賛美し、立って説教ができるようになりたいと願う気持ちで一ぱいであった。わずか数名の礼拝出席しかない頃のことである。まったく夢のような願いであったけれども、しびれた足をなでさすりながら、私はその日の訪れを心から待つようになった。

やがて冬がやってきた。美唄で迎える初めての冬である。その年の寒さはとくに厳しくて何十年ぶりの寒さだといわれた。寒さになれていない私たちにはずいぶんつらい経験であったけれども、それでもだんだんと北国の生活になれていった。

はじめのうちは「しびれる」といわれてもなんのことかわからなかった。実際に厳しい寒さに出会ってみて、本当に「しびれる」という感じがわかるようになったのである。

ある寒さの厳しい朝のことである。妻が台所で悲鳴をあげた。何事がおきたのかと思つてのぞいてみると、手を真赤にしてベソをかいている。どうしたのかとたずねてみると、台所の床をぞうきんがけしようとしたら、拭くそばからみな凍ってしまった。しまいは手まで床に凍りついて離れなくなってしまったというので

- 124 -

ある。後で話を聞いた隣の人が、こんな寒い時にぞうきんがける方がどうかしているといったので、私たちもいっしょになって笑ってしまった。

寒さだけではなく、初めて迎える雪の中の生活も私たちにとっては容易なものではなかった。ぼやぼやしている間に雪は家の入口を埋めてしまったし、そこに積んであった石炭も雪の下になってしまった。なによりも大変だったのは、この雪まじりの石炭ではどうしても上手に焚きつけられなかったことである。いつまでも火がつかず寒さにふるえて過ぐす朝がいく日もつづいた。

不慣れた生活のために奇妙な経験をくりかえしたけれども、私たちはだんだん北海道の雪の生活になじんでいった。

美唄伝道がはじまって二年目の夏、補助金が出ることになったので会堂建築が具体化してきた。その頃には、私たちの家は教会学校だけでなく、大人の礼拝のためにも狭くなってしまっていた。

当時、市の婦人会の会長をしていたのは市長夫人であったが、同じ町内に住んでいた関係で、ある会合でいっしょになった時、「あなたの家の近くに婦人会館を建てる予定だが、そこに住んで幼稚園でもやってみる気はないか」といわれた。市長夫人の好意はありがたかったけれども、将来のことを考えると不都合なことも多くでてくるように思えたので、できればどこかに土地を求め、そこで独自の仕事をしたい旨返事をしたところ、「それでは私の土地があいているから、そこでよかったら貸してあげましょう」といつてくれた。

思いがけないところから道が開かれて、予期しなかったその土

- 125 -

地を借りることができるようになった。そこは市街地のはずれであつたけれども静かな場所ので、将来は住宅地の中心になりそうなところであつた。

土地が借りられるようになったのと前後して、▶宣教師が国際ワークキャンプを美唄で開くように計画を立て、その実施面いろいろと助けてくれることになった。実際には計画だけが先行してしまい、現地の方はまだ何も準備ができないうちに二十数名のキャンパーが到着するという事になってしまった。そのキャンパーたちが間もなくやつてくるという瀬戸際になって、思わぬ障害がおきた。土地の管理人から「権利金を払ってほしい。それまでは土地に立ち入らないでもらいたい」という申し入れがあつたのである。

権利金のこと考えないで、口約束だけで土地が借りられると思つていた私たちはよほど間がぬけていたに違いない。それにしても何の用意もない私たちにとってこれは難問題であつた。会堂を建てるといっても、私たちには資金の見通しさえついていなかったのである。強力に計画をおし進めていく▶宣教師の後から、モタモタついていった私たちは、無茶というよりも無責任な行動をとつていたのであつた。しかし、こういう私たちを追い立てて、いやおうなしにその重い腰を上げさせようと、のつびきならぬところへ追い込む何かがあつたように思われる。

ワークキャンプの予定を変えることはもうできない時点であつた。私は局面を打開するために、とにかくその管理人と話し合うつもりで長老の草地さんを伴つて出かけてみた。交渉は難航したけれども、権利金を半額にまけてもらふことで一応話はついた。

しかしその金を払うまではどうしても土地に入ってはならぬというのである。私に金策のあてがあるわけでもなし、どうしてよいかまったく困ってしまったが、草地さんがあちらこちら奔走してこの金を用意してくれた。やっとの思いで金を払い込んだその日、キャンパーたちが乗り込んできたのであった。

ワークキャンプの仕事は敷地の整地と会堂の基礎工事であった。受け入れ側の問題はかれらの宿舎を用意することであつたけれども、どこにも適当な場所を見つけないでできなかった。しかし幸いなことに市長の協力もあつて、近くにある神社の社務所を宿舎として借りることができるようになった。宿舎の用意ができたものの寝具もなければ炊事道具もない。仕事のためのスコップもモッコも、結局なにかも市役所から借りることになってしまった。まったく人のふんどしで角力をとるというのはこういうことであるかもしれない。

キャンパーたちがその社務所に落ち着いて、いよいよ今日から作業にかかるという朝、神社の神官が血相を変えて私のところへとんできた。

「あなたがたはとんでもないことをしてくれた。お社を汚したりして、どうしてくれるつもりです」

私はキャンパーたちが調子にのって何か不都合なことでも起こしたのかと思つたので、あわててとんでいてみると、炊事用の石炭を運ぶ馬車が社務所の勝手口のところまで入り込んでいた。そこは神域であつたのである。キャンパーたちがなにも知らずにそこへ馬車を引っ張り込んだわけであるが、それは神域を汚す行為だと説明されてやっとな理由がのみにこめた。深く詫びると、神官

- 127 -

も納得して帰っていった。

教会堂の基礎工事はキャンパーたちの働きで無事に終わったけれども、建築の方はなかなかはかどらなかった。補助金のものおくれ、いろいろむずかしい問題もでてきたけれども、草地さんの献身的な努力で少しずつ形ができてきた。

壁の下塗りもできて荒壁のままであつたけれども一期の工事が終わった時は十二月に入っていた。北海道の十二月はもう雪に埋もれている。塗られたばかりの壁はそのままでは凍ってしまう心配があつた。私たちは新しくできたばかりの会堂にストーブを入れて徹夜して火を焚き、壁を凍結から守らねばならなかった。

深夜、会堂で独り、私はストーブの火の番をしていた。いい知れない喜びが胸一ぱいにあふれてきて私はじっと立つておれなくなった。喜びはそのまま歌となつてあふれてくる。私はただ独り大きな声で讃美歌を歌いだした。

開拓伝道をする者にとって、初めて会堂を与えられた時の喜びは筆にはつくしえない。夢中で過ごしてきた月日を振り返つてみる。転々として集会の場を変え、礼拝の場を求めて歩んできた。

けれども、いまここに会堂がある。たとえ荒壁のままであつても、これからはここで会衆と共に立つて賛美を歌い、私は立つて説教ができるようになった。長い間願ひ求めていたことではあつたけれども、いまそれは実現したのであつた。伝道がはじまつてこの方、教会は人々の目の蔭におかれていた。しかし、いま教会はこのところにその姿を現わし、人々はその存在をはっきりと目だしかめ知るようになった。

わずかな期間にさまざまな困難に出会い、苦しい思いを味わつ

たけれども、それらはもう過ぎ去ってしまった。茶志内の広漠とした原野を前にして途方にくれた思いで立っていたあの日はすでに遠く過ぎ、新米牧師の悲哀を身にしてみても味わいながらも、夢中になって働いてきた私はいまこの新しい会堂の中に立っている。ことさらに取り立てていふべきほどのことをしてきた覚えはなかった。けれども、私の歩む道に絶えず私を支え導いてくださる方がいたのであった。私は胸の中に湧き上がってくる喜びをかみしめるように味わいつつ、いつまでも歌いつづけるのであった。

サタンの罠

美唄開拓伝道は日本基督教団の特別伝道計画の一つとして、昭和二十七年からはじめられた。一年毎に援助は漸減して五カ年で打ち切られることになっていた。北海道では美唄と千歳がこの特別開拓伝道地として指定され、千歳にはベテランの牧師が赴任し、美唄には神学校を卒業したばかりの新米の私が采たわけである。

牧師一年生の私に先の見通しがつくわけがなかった。何もかも新しいことばかりでまごまごするだけであった。特別にどこかに親教会のようなものがあって、物心両面の援助をするということもなかった。美唄開拓伝道委員会が教区に設けられたとはいえ、実際にはすべて自分一人でやらなければならなかったし、だれもこの新米伝道者を励ましたり教えてくれたりする者もいなかった。あちらにつまずき、こちらにつまずきしながらも、はい出しはじめた子供は、それでもいく度か痛い思いを味わいながら育っていった。牧師はその厳しい働きの労苦の中で独り育っていくも

- 129 -

のなのであろう。今日の苦しい体験が明日の困難な問題を解く上に役立ったのである。

援助が五カ年で打ち切られるということは、その時に教会は自給独立を達成するということを意味していた。それ故、毎年減らされる援助額に見合うものがそれぞれの年に補われていかねばならなかった。このことは同時に教勢の進展を示す一つのバロメーターにもなっていた。しかしながら、伝道は他の事業とは違うのであるから、一年の働きの実績を金額で表わすことはできない。不可避免的に強要された形になったこのことは、私には大きな心の負担としてのしかかっていたのである。

一カ年の伝道で一体何人が洗礼を受けて教会員になるのか、そのことによってどれだけ献金額がふえるのか、とてもあらかじめ予測できることではない。こうした漸減方式による開拓伝道は、まかり間違えばただ単に会員数をふやし、献金額を増加させることだけを念頭において働くようになり、どうしても無理なことをするようになって、宣教の本質から離れるようなことになりかねないのである。そして働く者を奔命に疲れさせてしまうおそれがある。

自給独立という目標が期限づけられていることが、私にとって一つの励みになってはいたけれども、思うように教勢の上がらないことは、日を経ると共に私を焦慮のふちに追い込んでいった。

魂を追い求めていたはずであったのに、私はいつしか献金だけを追い求めるような人間になってしまっていた。礼拝に一人でも多く出席すれば、その人々が礼拝に加わったことを喜ぶよりも献金の増加を喜ぶようになり、求道者を与えられれば、これらの人

々は幾らかの献金増加の可能性としてしか私の目にうつらなくなつてしまつた。このことに気づいた時、身ぶるいのするような恐ろしさを味わつたのであるけれども、このいまわしい泥沼から脱け出るために、私は血みどろの苦しい戦いを自らと戦わなければならなかつた。

金の故に失敗した若い伝道者が何人もいる。美唄伝道がはじまつた翌年、北海道特別開拓伝道計画ができて、美唄と同じような条件で北海道の各地に毎年数名の若い伝道者が送り込まれた。その中には、伝道に失敗してついには伝道者としての戦列から離れていつてしまつた人たちも何人かいる。失敗の原因にはいくつかの要素があるけれども、その中の最大のものはなんといつても金銭問題である。苦しい生活に耐えて働いていくために、かれらはどれだけ多くの犠牲を払つたかしかない。しかしその犠牲に対して報いられるところは少なくなつた。そして教勢の進展のおそさはかれらから平静さをうばい去り、心の焦りはさまざまな破綻となつて現われてきたのである。私はこのようにして戦線から脱落していった友に深い同情を覚える。たとえかれらが人間としてどのような欠点を持つていたにせよ、この開拓伝道方式そのものに介在する大きな落とし穴の存在をだれが知つていたであらうか。それは恐るべきサタンの罠であつたのである。

会堂ができ上がった翌年、先に市長夫人に約束したように、私たちは幼稚園を開設することになった。市内には公立幼稚園がすでに開かれていたけれども、入園希望者をすべて収容することはできなかつたので、他に私立幼稚園の開設が求められていたのであつた。幼稚園を開くといつても、教会にはそれだけの予算がな

- 131 -

かつた。しかしとにかく仕事をはじめさえすれば必要は満たされると思つて、私たちは踏み出したのであつた。園児募集をしてみると、約束と違つて婦人会はそつぽを向いてしまふし、話で聞いていたほどには多くの入園希望者はえられなかつた。それでもなんとか経営できそうであつたので、妻を中心に懸命の努力をほらうことになった。ブランコも鉄棒も古材を利用した手作りのものであつた。遊具と名のつくものは他に何もなかつた。当初、たしかに私の心に幼稚園経営が教会財政を援けてくれはしないかといつた依存心がなかつたとはいえない。ところが蓋をあけてみてそれどころではないと気がついた時、初めて真剣に教会の一つの働きとしての幼児教育のことを考えるようになった。すべての点において未熟な私たちのことであつたから、高遠な理想をもつて幼児教育をするなどということはできなかった。とにかくどんなことでも、与えられた働きを通して少しでも教会がこの世に役立ちうる働きをし、真実な証しをたてたいとそれだけを願つてできる限りの努力を傾けてきたのであつた。

二年目になると園児数は減り経営は非常に苦しくなつたけれども、少しずつ私たちの努力が幼い子供たちを通して実を結びつつあつた。三年目からは園児数もふえはじめ、この子供たちがだんだんと教会学校に定着するようになった。五年経つて私たちがボリビア伝道に献身を決意した頃には幼稚園の経営も軌道に乗つてきたけれども、幼稚園から育つた子供たちが教会学校の主流を占めるようになってきたことは、私たちにとって何よりも大きな喜びであつた。

幼稚園を単に一つの事業としてでなく、私たち自身の証しの場

として選り、働いてきたことは、後にポリビアで小学校を開設し経営するようになった時、私たちにとつて一つの指標として役立つことになったのである。

急げ、急ぐな

教会自立への道は遠く、教勢が思うように伸びてこないことは、私にとつて泣きたい程つらいことであつた。どんなに苦しくても泣きごとはいうまい、やれるだけやってみようと心の中に思いつつも、どうにもならない苛立たしさに、私は伝道の意欲も失いがちであつた。このような時に私の心に新しい息吹きを吹き込んでくれたのは草地幸太郎という一人の老信徒であつた。教会の長老として伝道当初から蔭になり日向になつて私を援けてくれた草地敬二郎氏の厳父にあたる人である。私の伝道牧会生活に少なからぬ影響を与えた人として、この人のことを少し語つてみたい。

- 133 -

かれは岡山県の出身である。若い時に高梁教会で洗礼を受けた。高梁教会は創立当初から激しい迫害を受けた教会として知られているが、この教会に育つたかれの信仰は鉄のような固さと深い落ち着きをもつていた。

明治二十四年、かれは屯田兵として茶志内に入植した。その当時、周囲はうっそうとした森林に囲まれていた。木を伐り倒し、焼いて耕地を作る。古い開拓地のどこにも見られる原始的な焼き畑農業である。その頃の写真を見せてもらったことがある。その写真から受けた印象が後にポリビアの開拓地で伝道するようにな

つた時に鮮やかによみがえつてきたことをいまも覚えている。古い北海道の開拓地の様子がそのままポリビアに移され、私は長い年月をさかのぼつてそこに立つてゐるような思いにうたれたことであつた。

開拓地の孤独で困難な生活、それに加えて激しい労働に明け暮れる毎を送りながらも、かれの心を離れないものがあつた。キリストを信じる者はかれ一人しかない。教会はもちろんこのような場所にあるはずもない。教会から遠く離れ、こうした状況の中で信仰生活を送る場合にはどうしても私たちの信仰は明瞭さを失いがちになる。しかしかれは、かえつてその信仰を燃え立たせ、この地に教会の与えられることを祈り求めはじめたのであつた。やがて岩見沢に教会ができたけれども、そこまでは約三十キロメートルほどの距離があつた。それでもかれは家族を連れて遠い道を歩いて礼拝に出席した。かれの住む美唄に教会が与えられるのはまるで夢をつかむような望みでしかなかった。

茶志内ではかれの地道な伝道がつづけられた。「キリスト教講演会」と称して集会を開き周囲の人々に伝道したのである。多くの著名な伝道者がかれの招きに応えてこの開拓地の伝道のために奉仕したそうである。そして何人かの人々が回心してクリスチャンになった。

かれはどこまでも平信徒として謙遜に奉仕する人であつた。かれの伝道は静かな、息の長い伝道であつた。そして六〇年の間、教会を求めるかれの祈りはつづけられてきた。

かれの祈りがきかれる時がついに訪れた。隣りの町、奈井江に一步先んじて建てられた教会が教団から離脱したため、その教会

が二つに分裂するという事件が起きた。この対策のために教区総会議長が奈井江を訪れたその帰途、同行していた草地敬二郎氏から美唄伝道の切な願いが訴えられたのであった。このことが契機となって美唄開拓伝道が教団において取り上げられるようになり、私たち夫婦がこの地に送られることになったのである。

祈りの期間は長かったけれど、神はたしかにこの祈りを聞いておられたのであった。いつ神が祈りに応えてくださるかわからないけれども、祈りがきかれていることはたしかなのである。そして、神が祈りに応えたもうて行動をたびおこされたならば、もはやこれを止めることも、逆らうこともできる者はいない。神はいかなる障害も踏み越えたもうのである。長い間の祈りがきかれ、神がそれに応えたもうたという現実を、さまざまな困難の中にも道が次々と開かれていく過程の中に私は見いだしてきたのであった。神のご意志のあるところを私はさし示すことはできないけれども、自分が用いられている場において、真剣に神のみ言葉に忠実に従いたいと願う時、神の配慮の中に私自身がおかれていることを思わずにはおれなかったのである。

昭和二十八年十二月二十二日、草地幸太郎氏は八四年にわたる長い生涯の幕を閉じた。私はいまでもありありとその日の朝の光景を思い起こすのであるが、野も山も前夜に降った純白の雪に美しく覆われて、かれの天国への帰還の道を飾っていた。教会の会堂はまだ第一期の工事を終わったばかりで荒壁のままであった。かれの長い間の祈りの実りであるこの会堂をかれは自らの目で見ることができなかった。けれどもかれは神が祈りに応えてくださったこの大きな喜びをたずさえて天に召されていったのであつ

- 135 -

た。

かれは若い牧師に対しても礼儀を失わない律義さをもっていた人であった。茶志内を訪問することは私にとって大きな楽しみであった。そこで聞く多くのことが私の未熟な信仰の大きな助けになったからである。茶志内伝道の思い出をいろいろ私に語ってくれていたある時、かれはさりげなくいった。

「山畑先生、伝道は急がなくてはいいけませんよ。しかしあせって急いでではだめですよ」

かれの言葉は私の心に一つのくさびとなって打ち込まれてきた。「急がなくてはならない」ということは、伝道への意欲について語っているに違いない。いつでも伝道することはできるのだという安易な気持ちはずてなくてはならないと思う。時を得るも得ざるも福音は伝えられていかねばならない。私はぼんやり時を過ごしてはおれないのだ。

「急いではならない」という言葉には、忍耐と希望が、そして絶えざる祈りが深く意味づけられているように思う。かれ自身の長い祈りの生涯から生み出されたこの伝道論は私の心を強く捉えたのである。

どうしたら五カ年で教会が自立できるようになるのか、そのことばかり考えていた私は、氣ばかりあせってかえって動きのとれない状態になりつつあった。急ぎすぎていたようであった。

各地の教会でその頃、アメリカ中古衣料のバザーを開いていた団体があった。そして売り上げ金から割りもどされるものが教会にとって良い収入になっていた。まだ一般に衣類が不足していた時代であったから結構よく売れた。アメリカ物というだけで品物

が良いという印象を人々が持っていた故であったかもしれない。美唄でもこのバザーを開くことになった。係員がやってきて会堂一ぱいに品物をならべ、一切の準備が整った。明日はいよいよ売り出しという前夜、私はとらぬ狸の皮算用を夢見ながら床に着いた。

その夜、北海道にはめったに襲ってこない台風が来襲した。道南から道央にかけて台風は猛威をふるい、おびただしい被害をもたらしたのであった。

教会の屋根のトタンは飛び、表玄関の扉も砕け散った。私たちは教会内部にならべられている品物をまとめ、少しでも被害を少なくしようと懸命になった。嵐が去った後、明るく晴れた朝が訪れてきたが、もうバザーを開くどころではなかった。飛び散ったトタンを集め、破れた窓や玄関の扉の修理に追われることになった。そして私の甘い期待もあえなく潰え去ってしまったのであった。

この台風で岩内町に大火が発生し、青函連絡船洞爺丸が函館七重浜沖に沈んだ。嵐が去ってから数日後、私は数名の教会員を伴って岩内を訪れた。私の親しい友人の一人がそこで牧会していたからであった。激しい嵐と恐ろしい劫火に見舞われた岩内の町中に立って、かれがいまどんな気持ちでこの厳しい現実の前に立ち向かおうとしているのか、かれの苦悩を思いつつ、私は少しでもかれを励まし元気づけたいと願って、まだ余燼のくすぶっている岩内を訪れたのであった。幸いに教会は火を免かれ無事であった。恐ろしい不幸の中にも無事に過ぎしえたことを共に喜びながらも、荒れ果てた焼け跡に立ち、悲痛な面持ちで焼け跡を整理して

- 137 -

いる人々を眺めているかれの心を思うと、どのようにかれを慰め励まして良いのかわからなかった。どこから手をつけて良いか、焼け跡のことだけではなく、他のすべてのことについても、手のつけようのない状態におかれていたのであった。ほとんどの教会員が罹災していた。そのような中でかれはどうやって教会を再建していくのであろうか。かれの心を思う私自身ですらも暗く重い雲が胸の中に拡がってくるのを止めることはできなかった。

「山畑君、新規まき直しだよ」

ポツンとつぶやいたかれの顔には、思いがけない災害によってもたらされた挫折に打ち勝とうとする決意が輝いていた。

かれの声にうなずきながらその言葉を聞いていた私も、状況は異なつてはいたけれども、同じようにその言葉を自分のものとして聞かなくてはならないことを感じた。そして、新しく出発するために私たちに何が必要とされていたかはつきりと認識せざるをえなかった。

倒されても、途方にくれても、私たちを支え生かしてくださるお方へのたしかな信頼と服従が、いま直面している壁を打ち破る唯一の道であることを知らされたのであった。

私の心に新しい転回が起きた。

伝道は牧師一人だけの仕事ではなかった。たとえ開拓伝道であっても、信徒のごく少ない伝道地とはいえ、牧師だけが一人ですべての伝道の労苦を背負っているわけではなかったのである。私が一人でなんでもやっているつもりであった時、私は孤独であった。教勢の進展のおそいことを独りで悩み苦しみ、そしてあせるようになっていた。けれども私はけっして独りではなかったのだ

ある。大きな祈りの輪の中におかれていた私、そして、その祈りの輪が伝道地の数人の信徒の中に連なりを持ち、新しい祈りの小輪となって私を取りかこんでいた。こうした人々が周囲にいることを気づかずに、ガムシヤラに独走していた私の味わってきた悩みは、一人よがりのものであった。私の心に起きた新しい転回は、私の目をこうしたいままで私の目にかくされていた現実に向けさせてくれた。

私はそれまで外にばかり向けていた目を改めて内に向き変えた。私はわずかな人数ではあったけれども共に集まり祈ることのできる人々の前に、私自身がどのように神の言葉の前に生きる者であるかを吟味すると共に、まず真実に神の言葉を語る人間であろうと考えるようになった。

信徒の生活の活きた源泉は礼拝である。そしてかれらは毎聖日、同じ一人の牧師の口を通して説教を聞かされる。説教はいつでも聞く者の心を満足させ、深い感動を与えるものとは限らない。変わりばえのしない説教、ある時は聞く者にとって退屈な、眠気をもよおすような説教である場合もある。しかしかれらは面白い話を聞きに来たり、なにか別の興味で礼拝に出てくるわけではない。かれらは神の言葉を聞くこととして礼拝に参加する。神を礼拝するということは、私たちが謙遜に、真実に神の言葉を聞くことから始められなくてはならないことである。その礼拝において説教を通して信徒は神の言葉そのものによって養われていく。その成長は目に見えるようなものではないが、礼拝を通して与えられる力こそ信徒の生きる力となり、働きの力となってかれらをこの世に押し出していくのである。

- 139 -

私はそのような人々の前に立つて神の言葉をとりつぐ者であることを改めて考え直さざるをえなかった。私の口を通して語られる言葉によって生きる人々のあることを知る時、私は牧師として、伝道者として重い責任のあることを強く感ぜざるをえなかったし、それだけに私自身が神の言葉に真剣に聞く者でなければならぬと反省せざるをえなかったのである。

それからというものの、私は自分がどのように神の言葉を聞き、いかに神に応えていかねばならないかということを知るように努めた。そして私自身が自ら語る説教に耳を傾けるようになった。私も神の言葉を必要としていたのである。自分が語る言葉を信徒と共に聞こうとした。神の言葉によって私自身も信徒といっしょに育てられることを願うようになったからである。

私自身が変わってきた時、まことにわずかなものではあったけれども教会の中に新しい変化がおきてきた。それは言葉に表わすことのできない変化であったが、教勢も特別に目立つほどの変化があったわけではないが、それでも何となく生き生きとした力があふれてきたような感じであった。

年毎に減らされる援助金を上まわる献金が記録されるようになり、そのことについて思い悩んだことがまるでうそであったかのように、五年の期限が終わった時、教会はいつのまにか一人立ちできるほどに成長していた。

なにがこの教会をこのように育てあげてきたのか説明しにくいけれども、この苦しいたたかいを通して私は牧師としていくらか成長することができたのであった。そしてこの体験がポリビアの原始林の中に働きの場を与えられた時に、伝道者としてどのよう

に生き、働かねばならないか一つの指標となったのである。

5 仕える道

カトリックとの対立

沖縄コロニアで伝道をはじめた最初の頃、私はカトリックの人々とも友好的な関係を保ちながら仕事をする事ができるだろうと考えていた。しかし現実には私が考えていたほど甘いものではなかった。

私たちがこのコロニアに入る少し前から米人神父が入り込んで活動をはじめ、会堂の建築も進んでいた。ある日、組合事務所の近くでこの神父と出会ったので、そこにいわせれた組合長に頼んで紹介してもらったところ、神父の態度は意外に冷淡で、「おたがいにコロニアのために仲良くやっていきましょう」といいながら、さしだした私の手をとろうとしなかった。

「なぜ同じ神さまを信じていながら、新教とカトリックは仲が悪いのですか」と、コロニアの人々から質問されることもあった。ボリビアではこうした宗教的な対立や問題が多いのだということも聞いたことがある。

古い移民の話や、すでにカトリックになっている指導的な立場の人々の影響で、コロニアの内部ではすべてをカトリック色に染めていこうという動きが強かったし、その線にそっているいろいろなことがまことしやかに語られていた。

ボリビアはカトリック教国であるから、この国に移住してきた者がカトリックになっていないと周囲のボリビア人との社会的関

係がうまくいかないということが強く主張され、このことから私たちをできるだけコロニアから排除しようという動きが生まれてきた。

一般にカトリックでないと都合が悪いという考えは古い移民の間からできてきている。それは日本人移民の持つ一種のコンプレックスのように私には思える。宗教的信念のしっかりしていない日本人移民がカトリック社会に入ってきた時、実際にいつも問題とされるのはその無宗教的なあり方なのである。かれらは日本を去る時に自分たちの宗教的な生活習慣をすててしまっている。

日本人の宗教心というものはいたって根拠に乏しい希薄なものであるから、南米のように、とくに保守的なカトリック社会に入ると浮き上がってしまうのである。カトリックにならないと都合が悪いというのはこんなところに深い理由があるように思える。

私自身の体験からいえば、別段自分がカトリックでないからといって差別されたこともないし、むしろメトジスタの牧師であると表明することによって、かえっておたがいの理解を深め親しい関係に入ることもできたのである。問題はカトリックであるか否かということではなくて、私たち日本人がどんな信仰に生きているかということなのであって、そのことが私たちの周囲にいる一般のボリビア人の持っている関心事なのである。

ボリビアでは「私は神を信じない」などといえ、ば、「それでは全く野蛮人と同じではないか」といわれてしまうのである。「神を信じない」ということが、日本では理性的人間の一種のトレードマークのようなものになっているような気がするけれども、ボリビアでは野蛮人扱いされてしまう。これでは隣人との良い交際

- 143 -

ができるわけがないのである。

キリスト教を理解しないで形式的にカトリックになるというのは、結局日本人移民のもっている共通のご都合主義によるものであるし、古い移民たちが味わってきたコンプレックスの所産なのでともいえるのである。

似たようなことが日本語教育の面でも盛んにいわれ、私たちの働きを強く妨げてきたし、そういうことをいう人が主としてカトリックの人々であったということが、そのことを裏書きしている。「ボリビアへ移民してきた者ほスペイン語だけ子供たちに教えたらい。日本語を教えるとボリビア政府からにらまれる」という意見が当初コロニアを支配していた。日本語学校を開いた頃はとくに強くいわれ、多くの非難が私たちに加えられた。その後長い間「メトジスタ校は日本語だけしか教えないからボリビアの現実にあわない」と不当な批判を受けてきたのである。

ボリビアには英語だけ、ドイツ語だけで授業している学校も多々あるのに、日本語を教えることがボリビア人に悪い印象を与え、という考えは、変わったことをして、少しでも日本人としてこの国で不利になりたくないという気持ちからこんなことがいわれてきたのである。

生活面では少しも在来の習慣を変えようともせず、ボリビア人から多少奇異の目で見られているにもかかわらずこういう心配をするのはどういうわけであろうか。これも先に述べたカトリックにならないと都合が悪いという考えと共通したものなのである。日本人としての優秀さが移民の持つ大きな誇りである一面、こうしたコンプレックスがあることも一つの事実なのである。

新教が入るとコロニアが二つに分かれて争うようになるから困るということもよくいわれたことである。このような考えが、私たちを反組合的、反コロニア的存在として、ことごとくに非難と中傷の的にしたのである。しかしこのような考え方は実に自主性に欠けたあり方を示すもので、コロニアの統一と団結が教会によって左右されるようなことを考える根本には、やはり権力にこびた、ご都合主義が顔をのぞかせているのである。

コロニア内にはびこっていた反新教的な空気は、いままで述べてきたようなことが根底にあっただけでなく、実際に、カトリック教会のコロニアに対する働きかけの中からも生まれてきている。小学校の生徒に対する洗礼の強制や、それに伴って教えられたさまざまなことがことごとく反新教的な内容であったこと、コロニア内に設けられた小さな修道院に日本から送られてきた修道女たちの言動など、私たちに対するこうしたカトリック教会自体の動きがコロニアの中に厳しい対立を生み出したことも事実なのである。そして私たちはいつも少数者としてこれらの非難や中傷に耐えていかねばならなかった。

私はボリビアにきてはじめてカトリック教会との対決を経験した。それは私にとって実に厳しく、苦い経験であったけれども、それまでカトリック教会についてなにも知る機会のなかった私にとって、自分自身のプロテスタントとしての信仰を再吟味する良い機会となったのである。

最初は単純に同じ神を信じる者どうしの対立を悲しみ、この小さなコロニアの中ですでにカトリック教会がその働きをはじめているのに、それに加えて私たちが働く理由がどこにあるのか疑問

- 145 -

に思ったのであった。しかしながら、カトリックの側の露骨な圧力が増し加わるごとに、私はこの疑いの中から脱け出ると共に、私自身がプロテスタントであること、そして福音主義の信仰に生きる者であることを強く認識せざるをえなくなってきた。

ボリビアではプロテスタントとは呼ばず、一般にはエバンヘリコと私たちを呼んでいる。エバンヘリコとは福音的という意味であるけれども、この呼称の意味するように私自身福音に生きる者であること、同じようにクリスチャンと呼ばれていてもカトリックではないということの深い意味を考えずにはおれなかった。エバンヘリコであることの意味を深く追求せずにカトリックの強い圧力に耐えて働きを進めることは私にはできなかったのである。

日本で伝道していた時も、あるいは自分自身の求道から献身への過程においても、私は一度も自分が真実に福音主義信仰に生きている者であることを、カトリック教会との関わりにおいて考えたことはなかったし、またそのようなことを教えられたこともなかった。

日本ではクリスチャンという一般的呼称の中にはなにも区別はないし、また日本のクリスチャンがプロテスタントとカトリックとの対決の中におかれるということもあまりなかったのではなからうか。

日本のプロテスタント教会が自らの課題としてカトリック教会と対決し、これを克服するという経験をもったことがあっただろうか。宗教改革を自分自身のものとして味わっていない教会に育った私が、ボリビアにおいてカトリック教会と対決せざるをえない破目におちいった時、いささかの狼狽と困惑を味わわねばなら

なかったのは当然のことである。私はここで改めて自分自身の課題としてプロテスタントとしての信仰を吟味せざるをえなくなったのである。なぜ自分が福音主義信仰に立つ者であるかということとを厳しい闘いの中で考えさせられたわけであるが、このことは私に一つの革命をもたらし、私自身をより深く聖書に聞く者としたのであった。

仕える者

沖縄コロニアで伝道をはじめた当初、沖縄という地名は私にとって特別かけはなれた異国のような感じではなかった。私は沖縄を日本以外の土地であるなどとは少しも考えはしなかった。遠い感じはもっていたにしても、同じ日本の県の一つのように思っていたのだった。そういうわけで北海道で働いていた時と同じ気持ちでコロニアの人々にふれていったのであるけれども、そこで私は一つの壁にぶつかってしまった。沖縄の人々の集団の中にただ一家族の本土出身者が入ったことになるわけであるが、言葉の相違、生活習慣の違いなどから、私たちにとって理解しがたいことや、逆に理解してもらえないことなどがたくさんあることに気がついたのである。要するに私たちは沖縄についてなにも知っていなかったのである。

コロニアの人々は私たちのことをかげでは「やまとんちゅう」と呼んでいた。それは本土の人間という意味であるけれども、多少他所者扱いの響きがこもっている。しかし私たちはなんとかして「うちなんちゅう」（沖縄人）の中に入っていきたいと願って

- 147 -

いた。

この沖縄コロニアの中で語られる言葉はほとんど沖縄方言である。沖縄の方言は日本の古い言葉の形をいまもその中に保っているともいわれている。例えば「うさがみそうれ（召し上がれ）」というような、鎌倉時代に用いられたさうろう形式がいまも残っている。けれども一般にこの方言は日本本土の言葉とだいぶ違うので私たちにはまったく理解できなかった。

コロニアの中で標準語を用いている家庭はごくわずかであった。それでも私たちに対してはいつも標準語を話してくれるのでも何も不自由はなかったけれども、私たちが方言を覚える機会ほとんどなかった。一般に標準語を用いるのは窮屈らしく会話はどうしても形式的で、打ちとけて語り合うということはとてもむずかしかった。どんなに親しくなっても、結果的には言葉が障害になって、私たちはいつまでも他所者の悲哀を味わわなくてはならなかったのである。

こんなこともあった。

ある晩のこと、夜中の一時頃大きな声で呼ぶ声に目を覚まして表へ出てみると、そこに一人の男が馬に乗ったまま何事かわめいていた。かれは方言でなにかいっているのであるけれどもさっぱり意味がわからない。いくらか酔っているようであった。かれに標準語で話してくれるように頼んだけれども、返ってくる言葉はみな方言であった。かれのそぶりから煙草の火を欲していることがわかったので、私は逆らわずに家の中からマッチをとってきて火をつけてやった。かれはそのままにもいわずに馬をせかして去って行ってしまった。どんな意図があつて私をからかいにきた

のかわからなかったけれども、私の心を傷つけるには十分であった。

沖縄コロニアから西へ一五〇キロメートルほど離れたところに日本本土からの移住者たちのつくっているコロニアがある。サンファン移住地と呼んでいるコロニアであるが、この人々と沖縄コロニアの人々との間にも奇妙な阻隔がある。同じ日本人どうしでありながら異なった国の支配を受けている人々に対する異和感、それが言葉の相違とからみあつて一つの不信感を形づくっていたのである。

私たち本土の人間は沖縄を頭では日本の一部として理解しながら、現実には意識の外に遠くおし出してしまつてはいないだろうか。私たちは沖縄についてまったく無知であつたし、沖縄の人々に日本人であることを求めていながら、私たち自身は沖縄の人々にそのように接していなかつたのである。

私の目に映つた沖縄はポリビアにおいても日本から引き裂かれていたし、沖縄コロニアの中に住むことによつて私たちはその裂け目に立たされていることを知つたのである。どんな無理解があつたとしても、私たちは沖縄コロニアの中で同じ日本人としてどのように生きていかねばならないか、そのことと真剣に取り組まねばならなかつた。

軍事的に、政治的に、日本から引き裂かれてしまつた沖縄、その裂け目を埋めることのできる者はいない。まだその頃は日本の教会と沖縄の教会との間にもこの裂け目は深い蔭をつくつていた。しかしただ教会だけ、キリストにおいて一つになる道を与えられている教会だけが、この裂け目に橋をかけることができるは

- 149 -

ずである。私はこのポリビアの原始林の中において、たとえだれにも理解されないとしても、せめて小さな架け橋の一つとして沖縄の人々のために働き、日本の教会が負うべき贖いの業の一部分を担いたいものだと思つた。そこから私は仕える者として歩むべき道を示されたのであつた。

私たちがコロニアの中で仕事をする時、どうしても指導者意識をもつようになってしまふ。コロニアの人々も表面的には私たちをいろいろな意味で指導者扱いをする。少しでも積極的に働こうとすれば一層この意識は強まるのであつた。

私の発行していた小さな新聞にはいつも何かしら啓蒙的な記事のをせることにしていた。その記事が、しばしばコロニアの人々の気持ちを傷つけたり、刺激したりするようなことがあつた。ごく常識的な内容をのせたつもりでも、その反応はまったく違つた形で現われてきたのである。

仕えるということは具体的にはどうあるべきであらうか。いくつかの苦い経験をした後で、私は一つの反省につきあつたのである。

コロニアのために役立つ者になるということは、けつして私自身がコロニアの指導者になるということではなかつたはずである。むしろ私は徹底して身を低くして、僕としての道を歩まなくてはならなかつた。だれも私たちの働きを価値あるものとして評価してくれないかもしれない。しかし私たちの働きがこのコロニアで必要とされているのであつたならば、そこに私たち自身の存在の意義が生きてくる。たとえコロニアの人々が私たちの存在に無関心のように見えたとしても、働く場所と機会が与えられてい

ることはけつして悲しむべきことではなく、喜んでよいことであったのである。

コロナの人々と私たちの間にはどうにもならないへだたりが感じられた。そのことを意識すればするほど悩みは深くなってくる。積極的にこの距離感をなくそうと試みるほどに、私たちはかえって強く孤独を感じざるをえなかった。結局こうした努力を棄てることによってしか解決されない問題であったのである。

へだたりを直視すること、そして私はこのへだたりがある故に自分は無力になろうと決心した。現実をありのままに受け取って、その現実の中で自分に求められ、そうすることを許されている働きを素直に受け取っていいこう。きつとそこにこのコロナ内で私たちが仕えていく道が開かれてゆくに違いないと思ったのである。

私たちは黙って仕えていくことを学んだのであった。

私は指導者意識をすてたけれども、実に仕える者として生き働くことは容易なことではなかった。一切の期待を捨てて無心になつて働ける者にはそう簡単にはなれなかった。孤独なコロナの生活の中で、言うに言えない疎外感をひしひしと身を感じながら、キリストに従う道の厳しさを心の中で味わっていたのである。

見える交わり

一九六〇年、私たちがコロナに入った翌年、女子青年学級が盛んであったその頃、私たちは懸命になつて家庭集会を開く機会を探し求めていた。私たちが少しでも「うちなんちゅう」の中に

- 151 -

入っていくには、コロナの人々の生活の中に福音をたずさえて入っていかねばならないと考えたからである。しかしなかなかその機会は与えられず、ようやく次の年になって小学校がはじまつた頃に、女子青年学級の生徒の一人が家を開放してくれたので家庭集会がはじまつた。そして私たちにはじめて外に出て語る機会が与えられたのであった。

集まる人はごくわずかであった。暗いランプの下で、蚊に攻められながら固い床に座って過ごす一刻は、けつして居心地の良いものではなかったけれども、み言葉をとりつぐことのできる喜びは大きかった。しかし私たちの喜びはそれだけではなかった。この集まりにはみ言葉を仲介としての交わりがあった。み言葉が語られるところには常にキリストが生きておられる。そしてキリストとの交わりが私たちをたがいの交わりの中で支えてくれる。

み言葉の前には「やまとんちゅう」も「うちなんちゅう」もなかった。キリストに在る交わりだけが私たちを本当に一つとなし、真実な連帯感をもたせてくれる。そしてこの連帯感が私たちの孤独を救ってくれたのであった。

集会が重なるにつれ、み言葉を伝えることに懸命になるにつれて、私には新しい悩みが生まれてきた。方言を多く話す人々との交わりは、私たちとの会話がどうしても標準語になるのでなんとなくぎごちないものとなり、あまり多く語りがらない。集まる人々から聞くことが少なく私はともすれば一方的に語ることが、多くなってしまう。

私に語りかけてくれる者はだれもない。どんなにか私自身聞く者でありたいと願ったことかわからない。私の心は乾いてくる。

- 152 -

まだスペイン語もよく理解できない頃であつたから、教区の集まりに出て、スペイン語で語られるどのような言葉も私の理解の外にあつたし、私の飢え乾いた魂にとつてはなんの助けにもならなかつた。私に許されていることはただ文字を通してみ言葉にふれるということだけであつた。孤独の中にいる時、神の言葉にふれるということは何にもまして強い励ましと慰めであつた。けれども、文字を通してではなく、じかに自分の耳を通してみ言葉にふれたいと願う気持ちには日増しに強まつてきた。

私はいつもみ言葉をとりついできた。しかし私自身にそれをつりついでくれる者はいなかつた。静まつて謙遜に耳傾けて聞くことができなくては私の魂は枯渴しそうであつた。

日本からの便りは非常に少なかつた。はじめの頃はともかく、日が経つにつれて家族からの便りも少なくなつていたし、教会関係の便りはほとんどなくなつていた。私たちの心を慰め励ましてくれる者、キリストにあつて慰めを送つてくれる者がいないということほど、こうした孤独の中で、遠く祖国を離れて働いている者にとつてさびしくつらいことはない。日本にいた頃はそのような思いもせず幸せであつたと、過ぎた日々を偲ぶことも多かつた。私たちはボリビアの原始林の中で孤立してしまつていふように思え、日本ははるか遠く手のとどかないところへ去つてしまつたかのように感じられた。

こうした思いに捕われていた頃、うれしい便りが私たちにもたらされた。当時日本基督教団海外伝道特別委員会の書記をしていた市川恭二牧師がボリビアを訪れるという知らせであつた。一九六二年の六月のことである。

- 153 -

ボリビアに来てからはじめて迎える日本人牧師の訪れ、私たちはまるで恋人でも迎えるかのごとく胸をワクワクさせて市川牧師の来訪を待った。

遠く祖国を離れたボリビアの、このような辺鄙な場所に日本から牧師を迎えるなど夢にも考えなかつたことであつた。コロニア内の数カ所で開いた集会で久しぶりに私は自分の耳で、自分の国の言葉で神のみ言葉を聞くことができた。

ある場所での集会はずいぶん南風が強く吹いて非常に寒い夜であつた。薄暗いランプの芯をかきたて、土間に火をたいて暖をとりながら、それでも寒さに体をガタガタふるわせながら市川牧師の話を聞いた。この地の人々のために語つていただいているのであつたけれども、それは私自身のために語つてくださっているように思えた。

滞在の最後の夜、私は市川牧師に聖書の講義をしてくださるよう強いてお願いした。他に何人かいっしょに出席したけれども、それはだれよりも私にとつて一番必要なことであつた。私はできるだけ多く自分の耳でみ言葉を聞いておきたかつた。かみしめるようにゆつくりとエペソ書を説いてくださる市川牧師の声は、私にとつて神のみ声のように聞こえた。講義が終わり、最後に祈る機会が与えられた時、私は胸がつまり、あふれる涙をおさえることができなかった。目と目をあわせ、耳から直接その声を聞くことのできるこの交わりの喜び、見える形で与えられる交わりの恵み、それは何にも勝つて尊いものであり、孤独な私の魂を真底からゆさぶり起こし勇気のであつた。

まだ私が神学校に学んでいた頃、大村勇牧師が武蔵豊岡教会に

来られたことがある。集会が終わって私は先生を駅までお送りした。その途中、教会内部のいろいろな問題について訴えると共に先生に質問してみた。

「先生、牧師はなぜこんな苦勞をしてまで黙々として耐えて働かねばならないのですか」

「山畑君、きみは牧師になるために勉強しているはずだね」

「はい、そうです」

「牧師はねえ、他の人間には問題にならないような小さなことや、つまらないことの中にも、他の人には味わえない大きな喜びを見いだすことができなくては勤まらないものだ。きみの教会の牧師はそれができているから苦勞に耐えていけるのだよ」

私はいまも大村牧師のこの言葉を忘れてはいない。ごくありふれた事柄の中にも大きな喜びを見いだせる人間になりたいという願い、そして実際に経験しえたその喜びが、私を牧師として支えてきたのであった。

市川牧師をポリビアの原始林の中に迎えて味わった私の感激を、ひとりよがりの甘い感傷だと人はいうかもしれない。しかし日本ではごくありふれたことのようにあつたにしても、顔と顔をあわせて直接語りあえる信仰者の交わりほど大きな喜びはないということを知ることができたのは、私にとってけっして小さなことではなかつたのである。

ボンヘッファーは、「教会がこの世において、神のみことばと聖礼典との為に、見える形で集まる事をゆるされるのは神の恵みである。すべてのキリスト者がこの恵みにあずかるわけではない。監禁されている者、病人、散らされて孤独にいる者、異教の国々

- 155 -

で福音を宣教する者は孤立している。目に見える形の交わりが、恵みである事をこの人たちは知っている」といつている。私の孤独がこの恵みを教えてくれたのであるうか。もしそうであれば、この孤独もまた神の恵みにほかならないのである。

キリスト教の神さま

市川牧師が去られた直後一つの問題がおきた。それは私たちにとって唯一の家庭集会を開いていた家で市川牧師を迎えて集会が開かれたのであったが、集会后、雑談に花が咲いていた時、たまたま話題がカトリック問題になり、南米におけるカトリック教会のあり方に批判が向けられた。その家の長男の奥さんはカトリックであり、私たちの働きを陰に陽に妨げていたZ組合長の娘でもあった。その席にいたわけではないけれども、たぶんそういうことも理由の一つであつたと思われるが、今後集会の場所を他に移してほしいという申し出があつたのである。

こうしてせつかく与えられた集会の場所を失ってしまうことになつたけれども、み言葉を聞いて内に燃え上がった伝道への新たな意欲は、そのようなことで打ち消されはしなかつた。むしろ私たちはこの機会を新しい局面を開く一つの転機として与えられたものと理解した。

しばらく続けられた家庭集会を通して、私たちはコロニアの、とくに家庭の主婦たちが心のよりどころを強く求めていることを知った。そのことを考慮して、一カ所に固定した集会ではなく、移動性をもった集会をもち、少しでも多くの人々に福音を伝える

機会をつくるように計画をたてた。小学校の生徒の家庭を中心に四つのグループに分けて、地区ごとに各家庭を回って集会を開くことにしたのである。表向きは「母の会」と称して開いたこの集会は、私たちが予期していた以上の良い結果をもたらした。

コロナの母親たちは私たちが想像していた以上に多くの深刻な問題をもっていた。子供の世話、家畜の取り扱い、家事全般のことの他に、閑を惜しんでは夫と共に畑に出て働いている。隣人との接触も少なく、原始林の中の単調な生活の中で、激しい労働に明け暮れる毎日を送っているのみであった。彼女たちにとって慰めになるものはなにもない。それに加えて貧しい生活の重い負担が彼女たちをいまにも押しつぶしてしまいそうであった。中にはその重荷に耐えかねて精神に異状をきたす人もあったのである。

「母の会」はこうした人々にとって思いがけない憩いの場所となったようである。ほとんどの母親たちが喜んで出席するようになり、月に一度の集まりを待ちかねるようになくなった。そして彼女たちの中から聖日礼拝に出席する者が一人二人とふえてきた。

このコロナの中では、たとえメトジスタ校に子供を出していても、また私たちに好意を示すようになって、信仰をもち教会員になるにはまだ大きな抵抗があった。新教の信徒になるということはタブー視される傾向が強くなったので、たとえこれらの集会が喜ばれ、礼拝に出席する人がふえたとしても、一人の主婦を受洗にまで導くことは容易ではなかった。長い間の努力が実を結んで、初めて一人の主婦が洗礼を受けたのは一九六五年のクリスマス

マスのことであつた。しかし彼女の受洗によつてそれまで厚く私たちの前に立ちはだかつていた壁がくずれ、年毎に洗礼を受ける者の数は増していった。

ある朝、一人の父兄が私を訪ねてきた。かれの母親が精神に異状をきたし暴れて困る、いろいろ手をつくしたがどうにもならないから一度祈りにきてくれというのである。私をなにかの祈禱師と間違えているらしかった。沖繩にはノロと称する女祈禱師がいることも聞いていたし、他のコロナにそれらしき人がいることも知っていた。私にその代役がとまるわけもなかったが、事情を聞いてみるとすててもおけず、とにかくその家を訪ねてみることにした。

髪をふりみだし、マチェテ（長刀）を持ち、家の入口に立つて周囲をにらみつけているこの老婆は、完全に狂気の状態にあつた。土人が殺しにやってくるから家の者を守ってやらなくてはいいといつて、夜通しそこに立ちつくしている母親を家族はすっかりもてあましていた。もういく晩も寝ていないのであろう。だれもかれもみな血走った目をして疲れきっていた。

この老婆の心を狂わせたものは何であつたであろうか。沖繩からボリビアに移住して来てまだ一年と経っていない。急激な生活環境の変化、周囲を密林にかこまれ、人との交わりもまれなコロナの生活、将来の見通しもまだ何一つ具体的に与えられていない開拓の初期、孤独が生みだしたさまざまな思いわずらいが、不安が不安を呼び彼女を狂わせてしまったようであつた。

初めてこのような場面に遭遇して私はどうしてよいかわからなかった。どのように祈つてやったらよいのかそれもわからない。

しかし、強い期待をこめて私を見ている人々の視線を感じるとなにもしないで帰ることはできなかった。私にできるかどうか、とにかくこの老婆と話し合ってみようと思って声をかけてみた。

「おばあさん、家の中に入って少し休みませんか」

「おめえはなんだ」

「キリスト教の牧師ですよ。いっしょにお茶でものんで話をしましょうか」

「キリスト教の神さまかあ」

神さまかといわれた時はびっくりしたが、彼女が急におとなしくなり、マチエテをそこに放り出して家の中に入り、家族が敷いてくれたゴザの上にきちんと座って私を待つ様子を見た時はなお大きな驚きを感じた。正直にいつて、いよいよこの老婆と取り組まなければならぬのかと思うと気が遠くなるような思いであった。とても私の手におえる事柄ではなかった。しかしもう逃げ出すこともできないので私は覚悟をきめて彼女と向かいあった。

いろいろとりとめないことを話しかけてみたがなんの反応も示さない。それでも歌は好きだといった。どんな歌を知っているかとたずねると讃美歌を知っているという。彼女は「主われを愛す」を知っているという。沖縄で幼い頃に日曜学校へ通ったことがあったらしい。私はまた改めて驚きを感じた。彼女が讃美歌を知っていると言っている間はまったく正常であった。家族の者たちのおどろいたような、まったく不思議でならないといったような目が彼女の上に注がれていた。

老婆を前にして私は一人で歌いだした。調子はずれな歌であったけれども、この狂った老婆の心の中にとどいてほしい願いで一

- 159 -

ぱいであった。無表情に私の歌を聞いている老婆の姿を見ていると胸がつまってきた。まことに哀れであった。私は深い悲しみを主に訴えて祈った。

翌日、同じ時刻にこの家を訪れるとすでに彼女は家の中に入って座って待っていた。ジープの音がきこえると、「神さまが来た」といって自分から家の中に入り、座ったのだということであった。数日の間このようにして訪問がつづいたが、特別な変化は私の訪問の時を別にして何もおきてはいなかった。

何回訪問をくりかえしても老婆の状態が一つも良くならないのに業をにやしたのか、あるいはまたそうすれば良くなると思ったのか、彼女に洗礼を授けてくれと家族が言いだした。洗礼を授けることによつて彼女が癒やされるならば私も喜んでそうする気持ちにもなれたろう。しかし彼らが考えるように安直に洗礼を授けることは私にはできないことであった。とにかく本人が「イエス・キリストを信じる」といつてくれなければどうにもならないことだからといって私はこの問題を避けようとした。しかし家族がなかなか納得しないので一応本人にたずねてみようということになった。

いつものように祈った後で私は老婆にたずねてみた。もちろんこの狂った老婆が正しく信仰を告白するなどは考えられないこととであった。ところが彼女ははっきりと「はい、信じます」と答えたのである。この返事を聞いて私はまったく狼狽してしまった。家族の手前これでは洗礼を授けないわけにはいかない。どうにも逃げようがなかった。やむをえず次の日曜日に洗礼を授けることを約束して家にもどった。私の心は重かった。とても心から喜ん

でできることではなかったからである。

翌朝早く、すぐに来てほしいという知らせがあった。何がおきたのかと思って急いで行ってみると、彼女は家の奥にかくれてしまつて姿を見せない。家族の説明によれば、前日私が帰つた直後から暴れ出しどうにも手がつけられなくなつてしまい、一晩中ものすごい勢いで暴れまわり、危険でしようがないというのである。奥の暗いところにもぐりこんで、異様に光る目でにらみつけている彼女を私はどうすることもできなかった。なすすべもなく私は深い失望感に捉われながら家にもどつた。もう私の手には負えない。私などの出る幕ではなかったのである。なんとかしてやりたいと思つたけれどもどうすることもできなかった。

それから数日の間、私の心は快々として楽しまなかつた。私には人の病をいやすなどという大それたことはできない。殊勝げに歌い祈つてきた自分が恥づかしかつた。けれどもそこには狂つた病める魂がいる。それなのに何一つすることのできない自分の無力が悲しかつた。私は独り静かに祈り、答えを求めて聖書をひもといた。しかしいつまでも答えは与えられなかつた。今日も暴れ狂っているであろう老婆のことを考えると、いても立つてもおれない気持ちにおそわれる。けれどもなんともしようのないことであつた。

私は彼女がイエスを本当に信じるこゝろができたならば、あるいは救われて癒やされるかもしれないと考えていた。しかし、狂つた魂がどうして自ら正しい信仰をもつことができるであろう。彼女にそれを期待することは不可能であつた。狂つた者に正常さを求めることはできない。私はなにか間違ひを犯していたに違ひな

- 161 -

い。考え悩み、祈っているうちに問題の焦点はいつしか私自身に移つてきていた。この狂つた老婆を前にして私自身はどのようにイエスを信じていたのであるうか。そして「信じる者にはどんな事でもできる」というイエスの言葉にふれた時、私はあまりにも不信仰な自分の姿に絶望を感じざるをえなかつた。私の心の中にまきおこされた嵐は悲鳴に近いものであつた。私は何か僥倖を期待していたのだつた。しかし、その期待が裏切られた時、私は自分自身が崩壊していくおそれを感じたのであつた。

「主よ、不信仰な私をお助けください」

私はどうしてもそのように祈らずにはおれなくなつた。そしてはじめてこの祈りが口へのぼつてきた時、私はすべてを主に委ねることを学んだのであつた。

ようやく心に落ち着きを取りもどした私は、もう一度行つて彼女のために祈りたいと思つた。どうしてもそうせずにはおれない衝動が私をかりたてた。

その家に着いた時、老婆の姿はどこにも見えなかつた。私を見る家族の視線にはどことなく不信の光が宿つているように感じられた。疲れきつた表情で私の質問に答えるのもおつくうげであつた。老婆は、ジープの音を聞きつけると一足先に倉庫の中にかくれてしまつていたのであつた。彼女の心の中に私の来訪をおそれるなにかがあつたのだ。倉庫の奥の薄暗い隅に老婆は身を小さくしてかくれていた。なにが彼女をそのように脅やかすのか。私の心に突然いいよのない怒りがこみあげてきた。激しく抵抗しながらなんとか私から逃れようとする老婆を捉えようと、私はしつかり彼女を抱えこみ、頭をおさえて祈りだした。家の人たちもおどろ

いた表情で倉庫の中をのぞきこんでいた。私は祈り終わるとそこに老婆を突き放してもものいわずに家にもどってきた。

その夜私はひたすら祈る他に自分のさわぎたつ心をおさえ、静かに時を過ごすことはできなかった。

翌朝、ちょうど日曜日の朝にあたっていたが、日曜学校に出てくる生徒たちにまじって、一台の馬車が道路から私の家の方に向かって入ってきた。その馬車に乗っている人々を見て私は思わず驚きの声をあげた。その馬車に乗っていたのはかの老婆とその家族であった。ニコニコしながら手をふって近づいてくる。とくに印象的なのはあの狂っていたはずの老婆であった。彼女の顔は昨日のような恐れ怯えていた顔でなく、荒れ狂う恐ろしい顔でもなかった。明るい平和な、まったくおだやかな表情で私を見つめている。彼女は正気にもどったのである。

無力な者を生かし、そのみ業の不思議を見せたもう神はなんとすばらしいお方であろうか。私は神の勝利をまのあたり見せられた思いであった。

一つの躰きは次の新しい転回を生みだしていく。み言葉に深く聞き、従っていく者のみが味わいえるこの恵みを、私は神が召したもう道に生きる確かさとして受け取ったのである。

地の果て

ボリビアと日本とのへだたり、それはいろいろな意味で私たちの心に影を落とすものであった。遠い日本のことを想う時、たとえ手のとどかないところにおかれていようとも、どこかで心の通

う何かがほしいと思うのであった。時間的には一三時間の時差がある。この時差を考えると日本の朝はボリビアの夕方である。原始林に日が沈み、暗い夜が訪れてくる毎に私の心は遠い日本の夜明けを想った。

南米の奥地の原始林のまっただ中ということがあたかも地の果てにあるような感じをもたせる。福音を地の果てまで伝えようという情熱にかられる時には、一層ボリビアと日本との距離感が悲愴な感じで身に迫ってくるのかもしれない。

どこを向いても原始林の厚い緑の壁にかこまれて、人との交わりもうすぐ、誤解と偏見の中におかれて立ちすくんでしまっているような時、この距離感は私たちの孤独をますます深めるように思えるのであった。

当初からのカトリックとの深刻な対立は私の心を深く傷つけ痛めつけた。どこにも突破口はなく、ただ黙々としてあらゆる非難や悪評――たとえそれらが故意になされたものであったとしても――を甘んじて受けながら働きつづけなくてはならなかった。

私はボリビアに来たことを後悔した。苦勞を覚悟でやってきたのであったけれども、孤独の中でその苦しみに耐えぬくことは容易ではなかった。

二〇キロメートルほど離れた第二沖繩コロニアではじめた小さな日曜学校がカトリック側の強い干渉でつぶされ、青年たちの希望で計画された勉強会も神父の介入で実施できなかった。私の出ていくところ、どこでも扉は閉ざされてしまう。私は苦しさに耐えかねてついに神を疑う気持ちにさえなってしまった。

「神よ、あなたはどこに生きていたもうのですか」

いくら問いかけても答えは返ってこなかった。私はいても立つてもおれなくなり、深夜、家を出て暗い原始林に向かってほえ、わめいたこともある。どんなに大声でわめいても返ってくるのは自分の声だけであった。

もし神が実在したまわらないならば、私がこのように悩み苦しむことにどんな意味があるう。私は一介の道化師にすぎないのではないだろうか、そんな疑いもわいてきた。

伝道の初期、私はそのように地の果てにおかれた者の苦しみと悲しみを味わっていたのであった。しかし、生きる苦しみのない者に神への疑いはわいてこないだろうし、また神への激しい希求も生まれてはこない。地の果てに生き働く苦しみが、私の心を相反する二つの思いにおいて一層神に近づけていったのであった。そして、私にとつて地の果てとは地理的表象ではなく、むしろ、より強く精神的限界状況を意味するものとなったのであった。

コロニアの夜は暗い。深い静寂の中に身を置き、いいようない圧迫を心にひしひしと感じさせられる時、自らに頼ることのできない私が、キリストの他のだれに自分の思いを訴えることができただろうか。私はただひたすらにキリストを求めた。そして、孤独と苦悩とどす黒い疑惑のただ中で、「私に従いなさい」と語りかけてくださるお方の声を聞いたのであった。

「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とキリストはいわれた。この原始林の中においても、孤独と苦悩に身をさいなまれている時にも、かれは私に語りかけ、私と共にいたもうお方であった。

主と共にあることを知った時、私の心に落ち着きがもどつてき

- 165 -

た。そして、ボリビアはもはや、私にとつて地の果てではなくなった。遠い日本の夜明けを想う時、ボリビアの夜は暗い孤独の夜ではなく、明るく輝いた朝を待ち望む希望に満ちた夜と変わったのであった。

開拓地の生活には、日本では想像もできないようなことがある。初めのうちは、目を見はり、あきれて物もいえないというようなことがいくつもおきたけれども、そのうちに慣れてしまうと、もう当たりまえのことのようになってしまった。

家の周囲がまだ開かれていなかった頃は、いろいろな動物がよく姿を見せた。コロニアの人々は狩りが好きで、よく鉄砲をもって出かけていく。山豚や鹿などがよくとれる。時には「今日はアンタをとってくる」などといわれてびつくりすることもある。冗談にもほどがあると思つてたずねてみると、アンタとはバクのことだそうである。

トカゲや蛇もよくでてきた。小さな蛇から二メートルもある大きなものまで、いろいろな蛇が姿を現わす。そうすると、みなで大きな蛇をしてつかまえ殺してしまうのだが、大きな蛇の場合はさっそく皮をはいて料理してしまう。これは蛇の肉ですといわれると、とても食べる気にはなれないが、だまされて口に入れてみると案外おいしいものである。

初めて大きな蛇を殺した時、学校の生徒が「これ、おいしそうだから持っていくてもよいか」といったのにびつくりした私も、二度目、三度目になると、獲物をさっそく寮の台所へ運ぶようになってしまった。

ひどい所だと思つた場所も、こうして慣れてくると、それなり

に生活する術を心得るようになり、心にもゆとりを感じるようになった。

原始林を切り開いて作られた道路は、形だけは立派であったけれども、雨季に入るとひどいぬかるみになった。コロニアからモンテローロまで四五キロメートルある。砂利の入っている区間はわずかで、ほとんど石ころ一つ見ることでできない泥道である。車が通れば通るほど道は悪くなる。この道を行くことは容易なことではなかった。

一九六一年の二月、ちょうど長男が生まれた時のことである。出生届けは生まれて二週間以内にしなくてはならなかったので、数日来降りつづいた雨のためにひどくなった道を、ようようの田舎でサンタクルスに出たその帰り道、折から降りはじめた小雨の中をコロニアに向かった私は、ここで思わぬ苦汁をなめることになった。ジープの中にはシャベルやハンマー、マチェテなどの道具を用意してあった。しかし、まるで泥の海の中を泳いでいるようなありさまで、とても走るなどとはいえない状態であったから、ジープはいたるところでストップ、そのたびに泥を掘り、車を押し、ウインチを使うなどして前進していった。まだ道のりの半分にも達しないうちに日が暮れ、とうとうシャベルの柄も、ハンマーの柄も折れてしまった。最後にはウインチも故障、手で泥を掘って車を動かすより方法がなくなってしまった。そうこうしているうちに電池もあがってしまい、暗闇の中で完全に立ち往生してしまった。

夜明けを待つてコロニアまで二〇キロメートルほど歩いてトラクターの救援を求めることにした。食べるものの用意もなかった

- 167 -

し、飲む水さえ近くにはない。道につけられた車の深い轍のあとにたまっているにこった泥水をすくってのどをうるおし、渴きやすいのが精いっぱいであった。トラクターに引かれてようやくコロニアにたどり着くことができた時はもう夜になっていた。

使徒パウロは自分が受けたさまざまな苦難を数えあげている。しかし、それはかれの人間的な苦しみを私たちにみせびらかしているわけではないと思う。むしろ、それらの苦難の中にあつてなおかれがキリストの僕であることを証しするために、語られていることに違いない。もし私にも許されるならば、そういう意味で伝道の苦しみの中に、この道路の苦難を数えさせてほしいと思う。私たちは長い間悪路に悩まされつづけてきた。道を行くということがどんなに困難なものであるかということに身を泌みて体験させられてきた。しかし、その労苦は、私たちの働き、私たちの歩みの全体を象徴するようなものであった。

どんなに急いでも前進は意にまかせず、立ち往生をくりかえし、援けてくれる者はだれもなく、努力と忍耐の反復によってようやく目的地に到達しうるものであった。

私たちが歩んできた道はけっして私たちだけの道ではないと思う。主に従う者がみな同じように歩んできた道に違いない。道は常に平坦ではない。さまざまな起伏と障害に富んでいる。しかし、その道を歩む時に、主に召され、かれの労苦にあずかる者とされていることを確かにされ、苦難の中においてなお希望に生きる者とされてきたこの喜びを、私は証ししたいと思う。

一九六四年、休暇を得て帰国していた時、ある朝、一人の有名な歌手が「ドミニク」という歌を歌っているのをテレビで見た。

その歌手が一人の伝道者の伝道の労苦を明るく歌っていることに、私は強く心をうたれた。伝道の労苦はしめっぽく歌うべきものでなく、明るく歌いあげていかねばならないものではなからうか。休暇中、私は各地をまわってポリビア伝道について語って歩いた。その間、私の心を占めていた思いはこのことであつた。

長い間私たちを苦しめてきた悪路も、一九六七年にすっかり舗装された。サンタクルスへ行く道も、サンファン移住地に行く道も、いまはたんたんとしたアスファルト路に変わっている。かつてこの道で苦しんだことが夢のように思える。道が良くなるにつれて私たちの働きも発展してきた。この道の歴史はまるで私たちの歩みをそのままあらわしているかのようだ。もはや過ぎた日々のように戦い苦しむこともない。あの苦しみをくりかえすのではなく、新しい未来に向かってこの道を歩んでいく。暗い夜に、遠い日本の夜明けを想ったその日は過ぎて、ポリビアにも明るい夜明けが訪れてきていることを私は感ぜざるをえない。

新しい枝の一つとなつて

最初、私たちがこの地に遣わされた時、日本基督教団はポリビアについてなにも知っていなかった。遣わされる者の働きについても、任期のことも、待遇についてさえ現地教会との間になにも具体的な話し合いはなかったのである。ポリビアメソジスト教会が日本人移住者のためにたてた伝道計画に協力するために、教団は現地の要請に応じて人を送ったに過ぎない。しかも、教団が現地の事情をよく知らないまま人を送ったということは、無暴の

- 169 -

そしりをまぬかれないであろう。しかし、この召命に応えて遣わされた私たちにとつて、このような雲をつかむような状態の中で献身するということは、たしかに一つの大きな冒険ではあつたけれども、この冒険が私たちにとつて、世界宣教の使命を担う教会について新しい視野を拓げ、貴重な体験をもたらしてくれたことを考える時、そこに不思議な摂理が働いていたことを認めざるをえない。神は人が内側より破ることのできない壁を外より砕きたもう方である。日本の教会がその内側にのみ固着してしまった目を、外に向ける機会を与えられたとするならば、宣教百年の歴史的時点で私たちが日本基督教団からこの南米の地に送り出されたということには、深い意味があつたと思わざるをえない。

海外伝道について「時期尚早である」とか、「身にすぎた社交である」というような批判がなされているというのを耳にしたことがある。現地でこのような声を聞くことはまったく悲しいことである。なぜならば、私たちはもっと具体的に別な形でこのことを味わわれているからである。たとえ言葉にあらわされていなくても、日本の教会は海外におけるこうした伝道協力についてはいたって無関心、冷淡なのである。一〇年間のポリビア伝道の期間中、私たちの働きに関心を示し便りを送ってくれた人々の数はまことに少ない。なんらかの形で関わりを持った教会の数は全教団中一〇にも満たないのである。

現地にあって私たちが日本基督教団を考える時、私たちは日本全土にある教団の教会全体を考える。教団を形づくっているのはそうした諸教会ではないだろうか。私たちはそれらの諸教会から送り出され、遣わされたのではなかったであろうか。ポリビアの

原始林の中で味わった深刻な孤独感、そして日本本土との距離感、それは他の何物にもまして密に結ばれ、心の通いあうべきものから遠く引き裂かれている現実から生まれてきたもののなのである。

休暇で帰国している間、私は数百回にわたってボリビア伝道について語った。しかし、人々が示した関心はけっして現地でなされている働きについてではなかった。ほとんどが伝道、とくにこうした特殊な場所での特別な人間的労苦にのみ興味を示すのであった。

過去一〇〇年の日本の教会の歴史において、海外伝道というイメージは植民地主義的な印象において受け取られてきている。日本の国力を背景になされてきた過去の海外伝道の（たとえ遣わされた人々の純粋な信仰と献身によってなされてきたことであるにせよ）、暗い濁った印象において今日における世界宣教の問題を考える時、日本の教会が一種の教會的モンロー主義に墮していく傾向がどこかにあるとしても、けっしてそれは理由のないことだとは思わない。しかしそうだからといって、私たちの目を内側にだけ向けて、自己目的な教会形成だけに歩んでいてよいものだろうか。私たちは、現地教会の要請にもとづいて教団から派遣されたのであって、世界宣教のために求められ、呼びかけられた働きに加わることによって、日本の教会も、世界教会の一員として、キリストにおいて一つであることの証しなのである。

私たちがボリビアに遣わされた時、日本基督教団が知っていた唯一の事柄は、私たちがボリビアの日本人移住者の中において働き、伝道するということであつた。しかしその伝道は、本来教団独自の計画として為されなくてはならないものではなかったであ

- 171 -

ろうか。海外に散らされた日本人の伝道は、日本の教会の責任であるべきものなのである。にもかかわらず、その責任を他国の教会に委ねて知らぬ顔の半兵衛をきめこむことは許されることではないと思われる。しかし、ボリビアの日本人伝道は、日本の教会によってではなく、現地教会によって計画され、推進されてきた。教団はそれに人を送って協力しているのである。しかしながら、この日本人伝道は日本とボリビアだけでなく、スイスと北米メソジスト教会との、四つの異なつた国の教会が協力して、散らされた民である日本人移住者のために働いているのであり、一つの目的のためにたがい力を合わせて働く、世界宣教の新しい姿がここに見られるのである。

私たち自身何も知らなかったのであるが、召しに応え遣わされて、はじめてこの現実の中に身を置くことによって、世界宣教についての新しい視野を与えられたのであつた。

ボリビアの原始林の中で私たちが学んだことは、ここに一つの日本人教会を建てるということではなく、世界の教会との関わりの中で、キリストの教会を建てるということであつた。教会はある特定の民族のものではなく、すべての民のためにこそあるべきものなのである。ともすれば、小さくまとまってしまいがちな教会の姿を、その置かれている場所で、真実にこの世のためにある教会として、生きたものにすることが私たちの大きな課題となつたのである。

伝道の初期、もちろん、私たちはその働きの主な目標をこのコロニアに居住する日本人移住者だけに向けていた。しかし、コロニアが発展していくにつれ、コロニア内に居住するボリビア人の

数も必然的に増加してきた。かれらはコロナに欠くことのできない労働力であっただけでなく、いつしかかれら自身もコロナ周辺に定着し、新しい社会を形づくりつつあったのである。初め、私とボリビア人との接触はごく少なかった。まだスペイン語がよく話せなかった私は、積極的にかれらの中へ入っていく気持ちになれなかった。かれらは私のことを「パストール」と呼ぶ。つまり「牧師さん」というわけである。しかし、それはボリビア人のパストールということではなくて、日本人のパストールという意味でしかなかったのである。

日本人移住者とボリビア人との間にわだかまっているへだたり、たとえその中に割って入って見たところで、私自身がその双方になお大きな距離を感じることにしかならないのであった。移住者とボリビア人労働者との間にしばしば問題がおきたけれども、私はそのいずれの側にも、なんの役にも立たない存在であった。かれらは私のことを「パストール」と呼ぶ。しかし、それは単に名前だけに過ぎなかった。

ボリビアの古い日本人移住者は、なぜかボリビア人のことを土人と呼んでいる。その影響もあって、このコロナでも一般に、現地人ともボリビア人とも呼ばず、土人と呼ぶのが普通になっているのである。私は最初この言葉を聞いた時、このコロナに裸の土人がいるのかと思うて大変おどろいたことがある。この呼び方は、ボリビア人労働者に対して、傭主としての優越感をもつことに役立つかもしれないが、これはあまりにもかれらを軽蔑した呼び方である。私はボリビア人から「ドジン」とはどういう意味なのかと問われて返事に窮したことがいく度もある。ボリビア

- 173 -

に移住してきて、日本語を学んだり、新教になることによってボリビア人社会から疎外されはしないかと恐れるような人々が、他方、このような言葉によって小さな優越感を満足させている、こうした矛盾に気づかないでいるのはどうしたことであろう。一般にこのコロナ内で働いているボリビア人は非常に貧しい。

ある時、学校に隣接した共同墓地内にある古びた納骨堂が荒らされて、中から骨壺が一つ盗まれたことがあった。犯人はまもなくつかまったけれども、盗まれた骨壺が砂糖の容器として用いられていたことは大きな驚きであった。このボリビア人は六人の家族をかかえていた。貧しいと一口にいうけれども、かれらが持っていたのは鍋がわりの空カン一つと、一本のスプーンだけであった。

貧しいのはかれらだけではない。コロナ内に働いているほとんどのボリビア人が、その日暮らしをつづけている。子供を学校にだすことなどとうてい考えられない。家から家を、かれらは良い条件を求めて転々と傭主を変えて歩く。こうした労働者だけでなく、コロナ周辺には多くのボリビア人の農家もある。しかし、かれらには効果的な営農をするだけの資金がないため、わずかな土地を耕すことしかできないのである。そしてかれらも同じように貧しい。

コロナの中に教会があることを知って、礼拝に出てくるボリビア人が一人、二人とふえてきた。日本語の礼拝に出てものなにもわかりはしないのであるけれども、かれらはそれでも礼拝に出ようとしていた。その数はけっして多くはなかったけれども、この

ことを通して、かれらも教会を必要とし、牧師を必要としていることを私は教えられたのであった。

私は日本人だけの教会に閉じこもることはできなかった。たとえ言葉が不十分であるとしても、なんらかの方法でボリビア人のためにも働きたいと考えるようになった。

日本人移住者とボリビア人との間には、相互に依存するものが大きいにもかかわらず、言葉や生活習慣の相違などから、大きなへだたりがあつて、それがしばしば深刻な問題に発展することがあつた。

話は少し後のことになるが、一九六九年三月、サンフアンの日本人移住地に一つの事件がもちあがつた。

復活節も間近いある朝、**ア**さんという人の家に一人の若いボリビア人が訪れた。ちょうどその時、家には**ア**さんだけしかいなかった。このボリビア人は隙をうかがつて隠し持っていた斧をふりあげて**ア**さんに襲いかかり、重傷を負わせて逃げ去つた。金をとるのが目的のようであつたけれども、**ア**さんが血だらけになつて救いを求めて外に飛び出したのおどろいたのか、一物もとらずに逃げたのである。**ア**さんは隣家にたどりつくとももなく絶命してしまつた。しらせを聞いてただちに自警団が組織され、犯人の追求がはじまつた。

この移住地にはすでに何回か似たような事件がおきていたのだ、人々は殺気立つて犯人を追いかけた。数時間後、密林の中に逃げ込んでいた犯人はあつてなく捕えられ、**ア**さんの家まで引き立てられてきた。人々の憤りの中で激しい訊問がはじまり、乱暴な行動に出ようとする人もでてきた。その時、突然**ア**さんの長

- 175 -

男がマチェテをふり上げて犯人に斬りつけたのである。騒ぎはその直後に起こつた。

事件の詳しい内容を知らない、この移住地の中に住んでいるボリビア人たちは、日本人がボリビア人を斬り殺したと聞いて、一度に騒ぎ出し、ついには暴徒化して警察や日本人商店を襲い、軍隊の出動によつてやつと平静にもどるといった事態にまで発展してしまつた。

この事件はボリビア全土に報道されるとともに、ボリビア人に対して深刻な日本人不信の念を植えつけることになつてしまつたのである。流された二人の血が憎しみと不信の厚い壁を作つてしまつた。

この事件と似たことは沖縄の移住地にも起きたことがある。幸いに騒ぎは大きくならず済んだものの、ボリビア人たちと移住者との間の壁は厚く、この双方に橋をかける試みはなにもなされてはいなかつた。

いずれのコロナにもカトリックの教会があり、神父はいずれの側にも働きかけ、和解の業をなしうる立場にあるものの、なになつしうとはしていなかつた。

私はボリビア人との接触が増すにつれ、この裂け目を埋める役目を果たすのは教会以外にはないと考えようになつた。しかし、スペイン語による礼拝がもたれるようになり、いく人かのボリビア人信徒が生まれるようになったものの、私自身がボリビア人社会に受け入れられるようになるには、まだまだ多くの時間と努力が必要であつた。もし神が思いがけない出来事を通して、私たちがかれらのために奉仕する機会を与えてくださらなかつたなら、

その時はこんなに早くは訪れなかったことであろう。

洪水

一九六八年二月のことである。この年コロニアは異常な旱魃に見舞われ、入植以来はじめての大凶作が予想されるような状態であった。

その月の十日頃、上流地域に大量の降雨があつて、コロニアの近くを流れるリオ・グランデ河が増水し、氾濫した水はコロニア東北部一帯に流れ込んできた。このあたりは例年浸水する地域であるので、かえつてこのような旱魃の時の浸水は歓迎されたのであつたけれども、事態はけつして樂觀を許すようなものではなかつた。毎年カーニバル前後は雨の多い時期である。上流地域での雨は容易にやまず、リオ・グランデ河は日毎にその水量を増していた。

十七日になると事態は非常に急迫してきた。リオ・グランデ河はついに全面的に氾濫し、濁流は急速に周囲の村落を侵し、コロニア東部に流れ込みはじめた。コロニア内の浸水はまた部分的で、多くの人々は樂觀していたために、避難をはじめたのはごく一部分の人々に限られていたのであるが、この日からリオ・グランデ河沿岸に住んでいたボリビア人たちが続々と避難をはじめ、空軍のヘリコプターも出動して、水中に孤立した人々を次から次へとコロニアに運んでくるようになり、コロニア中央部は避難民でごつた返すようになってしまった。これらの避難民を収容しようにも、なにも設備のないコロニアではどうにも処置できない事態に

- 177 -

なつたのである。

本部地区の混乱が時を追つて高まる一方、コロニア全体への浸水さえも予想される段階に至つたので、私たちは学校の通学用トラックを避難民の輸送に向けることにし、赤十字の救援を求めてこれらの避難民をモンテローへ送ることにした。軍からトラックの応援をえて次々に避難民を送り出すものの、後から後へと続く避難民の整理は容易なことではなかつた。赤十字からの救援食料がコロニアに運びこまれてきた。しかしカトリック教会の米人神父は独りでこの救援食糧の配分をとりしきろうとし、ボリビア人よりも日本人への配分を多くしようと試みたのであつた。そのために、以前からこの神父の日本人偏重に不満をもっていたボリビア人たちが、不穏な行動に出そうな気配がおきてきて、そのままにはすておかれないような状態になつてしまった。そこで私たちは急遽この神父を中心にして対策委員会を組織し、公平に食糧を配分することにして事態を收拾することになった。

その間に、濁流はコロニア東北部から北部に達し、周辺から徐々に中心部に向かって迫りつつあつた。

こうした混乱の中で右往左往していた時、数人のボリビア人が私を求めてやつてきた。

「パストール、助けてください。なんとか子供たちを救ってください」

「もうあと少ししか乾いている土地はないのです。このままにしておいたら子供たちは水に流されてしまいます」

コロニアから北へ一二キロメートル、リオ・グランデ河近くにあるメルセデスという部落からやつとたどりついたのだという。

上流地点で氾濫した濁流は、コロニアの東部から北部へとまわり、この部落付近で再び本流に合流したために、部落は完全に水中に孤立してしまった。そして数十人の女子供が逃げるに逃げられず、危険に瀕しているということであった。食べるものもなく、わずかにバスケットコートぐらいの広さのところに集まって救いを待っている。もうすぐそこも水につかるだろうと、泣いて援けを求める人々を前にして、ボートもない状況ではそこへ行きつく方法も考えつかなかったけれども、なにもせずに腕をこまぬいて立っていることは許されなかった。

ちようどそれより数カ月前、私はアマチュア無線局の免許をとり、送受信機を備えつけたばかりであった。そのことを思い出すと私は急いで発電機をまわし、サンタクルスのハムを呼び出しはじめた。空軍にヘリコプターの応援を依頼するためである。思いがけないところで自分の特技が生かされることになった。

「CQ、CQ、こちら CP6GN、水害緊急通告です。サンタクルスのハム局応答願います」

懸命に呼び出しをかけるとすぐにいくつかの局が応じてくれた。幸いに連絡はとれた。しかし、空軍基地にはヘリコプターは一機もいなかった。みな他の地域への救援に出かけていていなかったのである。善処を約してくれたものの、その日ヘリコプターはついに飛んできてはくれなかった。

不安と焦慮にみちた一夜があけ、翌早朝ヘリコプターの飛来する姿を見た時、私たちは思わず喜びの喚声をあげた。けれども時はすでにおそかった。現地へ向かったヘリコプターは濁流におおわれた部落のどこにも着地点を見いだすことができずむなしく帰

- 179 -

ってきた。救出は不可能であったのだ。

ちようどそれと前後して一隻のランチがトラックに積まれてコロニアに到着した。空から行けなければ水路これで行くより仕方がない。あるいはもう手おくれかもしれない。しかし、私たちは最後の望みをかけてこのランチをメルセデスへ送ることにした。ランチがもどってくるまで、どんなに私たちは気をもんだことであらう。夕暮れ近く、すっかり水につかった道路にそって、ランチを中心に数十人の子供たちが胸まで水につかりながら引き上げてくるのを見た時、私は安心と気のゆるみから、前夜来の疲れが一ぺんに出て、そこにへたりこんでしまった。

その翌日も一日中、避難民の輸送でてんこまいであった。しかし、ようやくその日でボリビア人の避難は終わりを告げた。ほっと一息ついたものの、一時小康状態を保っていたリオ・グランデ河の水量は、その夜から一挙にふえて、コロニア東部から南へかけて急速に侵入し、東部、北部、南部三方面からコロニア中央に向かってものすごい勢いで濁流が流れ込んできた。もう一刻も猶予はできなかった。ラジオを使ってコロニアの浸水地帯の人々に避難を呼びかけると共に、再びサンタクルスのハムの協力を求めて、領事館や移住事業団事務所と連絡をとるかたわら、上流地域の降雨状況や水流の状態などの情報収集にあたった。

そうしている間に避難者たちは続々とコロニア中央部に集まってきた。モンテローはすでに先に送ったボリビア人避難民で収容限度をこえてふくれあがっていた。とても日本人避難民を送れるような状態ではなかった。そこで私たちはこの人々を学校へ収容することにきめた。炊き出しがはじまると、学校の中はたちまち

戦場のような騒ぎになってしまった。

濁流はいつこうに水勢におとろえを見せず、刻々としてコロナ中央に追ってきていた。学校まであと八〇〇メートルをあますだけであつた。もし水がこの学校にまでとどくようになったら、この大勢の人々をどのようにして避難させたらよいだろうか。私たちは最悪の状態を予想せざるをえない破目に立ちいたつたのであつた。しかし、幸いなことに、ラジオ連絡によつてハムたちから与えられていた情報は非常に正確なものであつたので、全般の状況を知る上に大変役立ち、この洪水の対策に当たつていた人々の判断を誤つことなく、これらの人々の適切な指導で特別な混乱も起こさず、無事に危機を乗りきることができたのであつた。

やがて水が引きはじめ、避難民がようやくそれぞれの家に帰ることができるようになって、コロナに落ち着きもどつてきた時、私はボリビア人たちから親しく「パストール」と呼ばれるようになっていた。日本人とボリビア人との間にあつたあの裂け目の中にいつしか入りこんでいたのだつた。私は日本人だけのパストールではなく、ボリビア人のためにもパストールとして働くようになっていたのだつた。多くのボリビア人を知るようになり、親しく話ができるようになっていた。

洪水が去つた後は実に惨憺たるものであつた。厚く積もつた泥土がすっかり耕地を覆い、もはや農耕の用に立つとは思われなかつた。土地をすてて去る者も多くあつた。そして、元の土地に帰れないボリビア人たちがコロナに定着しはじめた。そして、その子供たちの教育が大きな問題となつてきた時、思いがけないことに、ボリビア政府は私をこのコロナ内にあるボリビア人の公

- 181 -

立小学校の校長に任命し、学校の再建を求めてきたのであつた。すでに一つの小学校の責任を持つている私には非常な重荷と思われたが、しかし、私にとつて、ボリビア人のために仕える最もよい機会でもあると思われたので、この仕事を引き受けることにした。

この学校はまだ校舎も完備していなかつたので、私は新しい校舎の建設から取りかからねばならなかつた。洪水の時、現地視察にこられたバリエントス大統領はいくらかの金を私に託していつた。しかし、それはわずかなものであつたし、貧しいボリビア人父兄にとつて校舎建設はあまりにも大きな負担であつた。ボリビアでは公立校といつても、施設はみな父兄の負担になつてゐるのである。

過去において、このコロナに住むボリビア人が結束してなにかをなすというようなことは一度もなかつた。そこで私は、まずかれらをまとめることから始めなくてはならない。これは容易なことではなかつた。それでも以前と違つて、かれらは洪水の時に私たちがどんなに働いたのかよく知つてくれた。かれらが私たちを信頼してくれなかつたなら、いくら力んでみたところで、なにもまとまつたことはできなかったであらう。父兄会が組織され、積極的に協力するようになった。貧しいかれらはなにも出すことはできなかつたけれども、喜んで労力を提供してくれた。水害対策委員会や軍の協力も得られるようになり、建築に必要な材料も与えられて、わずかの期間で校舎を建てることができ、予定どおり授業がはじめられるようになったのである。

この働きを通して私はなんとか日本人とボリビア人との間に一

つの橋をかけることができたように思う。しかし、橋をかけることとそれ自体はそんなにむずかしいことではないように思う。問題は、その橋を双方から人々が渡りはじめた時、果たしてその渡る人々の重みに耐えることができるかどうかということではないだろうか。そして、私たちはなんとしてもその重みに耐えていかねば、本当に橋をかけたことにはならないのである。

それから一年の間、それは苦しい思いを味わった一年であった。小さな小学校ではあつたけれども、多くの問題が生まれ、一人の異邦人がボリビア人の中に入って働くには荷が勝ちすぎたようだった。

ボリビア人を理解する。そのことがまず私に与えられた課題であった。しかしかれらを理解するということはどういうことなのであろう。かれらの考え方、生活や習慣を知ることなのであろうか。たしかにそれらを知ることによって一歩近づくことはできる。けれどもそれだけではどうしてもなにかが足りないのである。私がなによりも苦しんだことは、かれらと私とのテンポがどうしても合わないということであった。こちらが考え、かれらの実状に合わせてたてた計画も、いざ実施の段階に入るとまるで調子が合わない。万事がスローモーションなのである。どうしてもこちらの方に焦りがでくる。しかし、私の焦りがかれらにはどうしても理解できない。広い大陸の中で、のんびりと暮らしてきたかれら、貧しいけれども、それなりにその貧しさに慣れきって特別向上しようという意欲のない人々、単調な世界に生きている人々に、積極性を求めることは無理な話であった。

スペイン語で「理解する」という言葉を「コンプレソデール」

- 183 -

という。この言葉には単に「わかる」ということだけではなく「包む」という意味がふくまれている。スペイン語を学んでいて、この言葉の持つ深い意味を知った時、私はもう一度自分の働きについて反省しなくてはならなかった。そしてここでも、私は自分がどこまでも仕える者として生きてはならないことを知った。

一九六九年になると、ボリビア政府は教育制度の全面的な改革をはじめた。いままでの小学校六年、中学校六年であったものを、小学校五年、中学校三年、高等学校四年というように改め、中学校三年までを義務教育と定めたのである。新しいプログラムも作られ、それまでの旧態依然としたボリビアの教育も、ようやく近代化の道を歩むようになってきた。

ボリビアでは、都市部はともかく、郡部、農村地帯となると、地域の広さと、農民の貧しさに加えて、政府自体の予算の貧困さもあって、学校教育のレベルは非常に低いのである。伝道当初の学校問題においても述べたことであるけれども、ほとんどの小学校が一人か二人の先生しかおらず、しかもその先生自体が教師としての十分な能力を持つておらず、まったく名ばかりの授業しか行なっていないのであった。

コロニアの周辺も事情は同じであった。そのために私たちは教育内容の水準を高く保つために私立校として運営せざるをえなかったのである。

教育制度の改革が実施されると事情は一変し、政府は公立校の水準を上げるように努力すると共に、営利本位の私立校を減らすうとして厳しい規制を課するようになった。

こうした状況の下で再び思いがけない発展が私たちにもたらされた。

ボリビア政府はコロナに新しく公立中学校を新設し、その運営をメソジスト教会に依頼したのである。しかも、コロナ内にあるボリビア人小学校さえも私たちの学校の中に併合して、全体を公立校として認めていくという態度をうちだしてきた。

洪水によってもたらされた新しい事態は、ますます新しい方向へと発展しつつあった。私たちはもはや狭い枠の中に閉じこもり、日本人移住者のみのことを考え働くことは、できなくなっていた。コロナを中心として、地域全体に仕えていかねばならなかったのである。

私は教育者ではなく伝道者である。どんなに学校が発展し、生徒数がふえ、設備が備わってきたにしても、そのことに心からの満足を覚えることはできなかった。しかしながら、こうした働き発展の中から、教会が地域社会のために真実に仕えていく道を示され、新しい働きの場を与えられることは本当にうれしいことであった。たしかに橋はかけられた。しかし、それだけにこうしてその橋を渡る者が増してきた時、その重さに耐えることが真実な課題となったのである。

一九六九年九月、コロナ内にあるもう一つの学校、カトリック校は突然、今年度をもって閉鎖することを明らかにした。理由は経済的な問題だとされてはいたが、本当のことはわからなかった。いままで、宗教的な対立がとかく問題とされ、私たちの学校に学ぶ者たちが異端視されてきたのであるから、カトリック校の閉鎖は当然大きな波紋をまきおしたのであった。カトリック校

- 185 -

の父兄はなんとかして学校を存続しようと運動したけれども、責任者であるアメリカ人神父は冷たく、最後の卒業式を終えると共に、自らもコロナから出ていってしまった。そしてコロナ内におけるカトリック教会の活動は停止し、私の、一〇年にわたるカトリック教会とのたたかきも終わりを告げた。

コロナには新しい時が訪れた。私たちの学校は、カトリックの生徒をふくめ、ボリビア人生徒も加えて、地域の中の唯一の学校として、真実にこのコロナのためにある学校として生まれ変わったのである。そして、教会はそうのように仕えることによって、はじめてコロナと周辺地域全体に存在の意味をもつようになった。

私たちは知っている

地に蒔かれた一粒の種から芽がでて、だんだんと育っていく過程を、スローモーションカメラでうつされた映画の画面でも見るように、私たちは、歩んできた道程において一つ一つたしかめてきたわけではない。折々に、いつしかしれず成長してきた姿を見ては驚き、感謝してその姿を眺めてきたのである。育てたもうのは神であるということを知ることができたのは、そうした道程をふりかえった時の偽らない感じなのである。私がいま知っていることは、かつて暗く孤独であったこのコロナの生活が、いまは明るい希望の光の中に置かれているという現実なのである。

一九六四年、休暇で帰国していた時に、私は大阪クリスチャンセンターで開かれていた朝食祈禱会に招かれて話をすることがあ

る。その時、ポリビアの暗い、光のない生活について話したところ、出席していた人々がこぞって発電機を贈ってくれることを約束してくれた。

再びポリビアにもどった時、私は大阪の人々の贈ってくれた発電機を据えつけた。配線も全部自分の手でやった。

長い間、私たちは光を求めてきた。学校全体の配線が終わり、発電機がうなりを立てて回り出し、スイッチが入って学校全体が電灯のまばゆいばかりの光の中で明るく輝いた時、いままでランプの下で暮らし勉強してきた、寮の生徒も先生たちも、一斉に喜びの声をあげたのだった。その喜びをある生徒は次のように綴っている。

「真昼の様な光、初めてこの光の下で勉強出来るようになった事ほど、ポリビアに来て以来嬉しいと思った事はない。しかし、誰が、何故この様な光を私達の為に送ってくれたのであろうか」

この発電機は子供たちの生活を明るくしてくれたばかりではなく、かれらの心の中にも光をともしてくれた。かれらはこの光の中におかれている時、神がこのポリビアの暗かった原始林の中に共におり、かれらを愛してくださることを学んでいる。遠い日本からの贈り物が、かれらに希望を与え、新しいことを学ばせてくれたのである。

洪水の時、学校に避難してきた人々が迎えた最初の夜、明るい電灯の下で過ごすことのできる夜を、かれらがどんなに喜んだことか。わずかな身のまわりの品をかかえて、あわただしく水から逃れてきた人々が、不安の中に暗い夜を過ごすかわりに、このコロニアに住むようになって初めての明るい夜を迎えたことが、こ

- 187 -

のような危急の時にどれだけ大きな励ましと慰めになったかしかないのである。

電灯がいつせいについて、急に周囲が明るくなった時、一人の子供は驚いて灯りを見つめていたが、急に親にとりすがって泣きだした。この子にとつて夜はいつも暗いものであったのに、この夜、はじめて明るい夜を迎えたからであった。暗い生活に馴染んで、かえって光に怯える子供のいたコロニア、しかしいまはその子も、もはや光に怯えることはなくなったのである。

伝道の初期は、とくに私たちにとって、夜は耐えがたい不安と恐れの時であった。寒い南風が板壁の隙間から激しく吹き込んで、どんなに固く毛布で体を包んでも、寒さにふるえ、親子三人体を寄せあつて寝た夜の心細さ。吹き込む風にゆらぐランプの光の下で、それでも無心に眠っているわが子の寝顔を眺めながら、胸をしめつけられるような思いで過ごしたこともあった。

このような時、私たちはすべての望みを主に託し、主がやがては応えてくださるであろうことを信じて夜おそくまで祈り、讃美歌を歌った。夜の更けるのも知らず、知っている限りの讃美歌をくりかえし歌いながら、その歌声が、やがて実現するであろう今日の、この喜びの響きに和するであろうことを疑いはしなかった。

私たちの周囲には、もはやあの緑の厚い壁はない。広々とした土地に黄金色の稲の穂が波うち、緑の草地には放牧の牛や馬が群れ遊んでいる。

たんだんとしたアスファルト路に変わった道に面して、いまでは大きな教会堂が中央にたち、左右には煉瓦造りの校舎や職員住

宅がならんでいる。もうあの隙間だらけのモタクー屋根の家はなくなつてしまった。そして、こうした建物が立ちならぶようになっただけではない。ここにもキリストがあつて一つとされている人々の群れが生まれ、力強く息づいている。この原始林の中に、遠く日本を離れた地に。

一〇年前に原始林の中で歌われはじめた小さな歌声は、いまは大きな喜びの歌声となつて周囲にこだまするようになった。

私たちは不思議を見ているのである。アンデスを越えたあの日、想像することもできなかったこの出来事のも不思議を見ているのである。

カナの婚宴の時、宴も終わりに近づき、酒もそろそろ尽きる頃になつて運ばれてきたブドウ酒を飲んでみて、料理がしらは花婿を呼んでかれを褒めた。たいがい良い酒を先に出し、酔いがまわる頃には悪い酒を出す、宴も終わる頃になつて良い酒を出すとは立派な心がけだと褒めたのである。この料理がしらはその酒がどこから来たのか知らなかった。しかし、聖書には、わざわざ括弧にくるんで「水を汲んだ僕たちは知つていた」と記されてある。

僕たちはイエスの言葉に従つて水がめの水を汲んで料理がしらのところへもつていった。かれらは結果を知つてそのようこの行動したわけではない。しかし、料理がしらの知らなかったことをかれらは知つていた。そのブドウ酒がどこから来たのか、だれがそのことを為されたのかということ。

一〇年前、原始林であつたこの場所を、二台のブルドーザーが木を倒し、土をならしていたあの時、だれが今日のこの姿を想像することができたであらうか。

- 189 -

この地を訪れる人々は、異口同音に立派になつた学校や教会の姿を褒めてくれる。あたかも、料理がしらが運ばれてきた良いブドウ酒をなめて花婿を褒めたように。しかし、だれもこのコロニアの中における働きが、だれによつてこのような姿に発展し、成長してきたのか真実に知る者はいない。けれども、私たちは知っている、あの僕たちのように。イエスの言葉に従つた者が一番よくそのことを知っている。それがまったく神のなされた業であるということ。

「私についてきなさい」という言葉を聞いたのは遙か昔のことのように思える。けれども、かれに従つて歩んできた道で、いつもくりかえしこの言葉を私は聞いてきた。そして、数々の不思議を見せていただいた。私はそのお方をこの目で見たことはないけれども、たしかにそのお方にお会いしたように思う。武蔵野の隅で、北の国で、そしてボリビアの原始林の中で。

「彼はわたしたちのところへ、知らない人として、名前のない人として、昔のように湖畔で、彼を知らない人たちのところへ来られる。

彼はわたしたちに、同じ言葉で、『私に従つて来なさい』と語る。そして、彼はこの時代に果たさなければならぬ仕事にわたしたちをつかせる。彼は命じられる。彼に従う人たちに對して、彼らが賢くても、単純であつても、彼との交わりの中において通過しなければならぬその労苦、争い、苦難の中に、ご自身を現わされる。そして口に出来ない神秘として、彼らの自らの経験を通じて、彼がだれであるかを学ぶであらう」(アルベルト・シュバイツェル)

あとがきにかえて

神学校を卒業した時にもらった卒業証書に四十一番という番号がついている。私はそれをいつも「シジュウ一番」と読んでいる。というのは、愚かな話であるけれども、このように読むことによって、私は神に従う時にはいつでも一番になろうと考えてきた。そして、いまでもそのことについては他人に負けたくないと思っている。そんな気持ちがあるいは私を北海道へ、ポリビアへかりたてたのかもしれない。しかし、この手記を書くように求められた時、私は自分の歩んできた道を敢えて文字にしようという気持ちになれなかった。海外伝道への献身が、なにか特別な英雄的行為でもあるかのように思われていることに対して、私なりの小さな抵抗があったのである。

たしかに、開拓伝道、とくに海外での開拓伝道には相当の困難があることは事実である。正直にいうと、私たちがポリビアで経験したような、あの初期の段階の苦労だとか、あるいはそうした派遣の仕方だとかいったものが再び繰り返されるようなことがあってはならないと思う。

移民の方法についても、沖縄コロニアに隣接したドイツ系メノナイトコロニアでは、何年かにわたる事前調査と、先に住宅と学校を建てるなど、十分な準備をしてから入植しているのに対して、日本からの移民は、人間さえ現地に行けばあとはなんとかなる式の特攻式移民なのである。

世界宣教への参加がこうした特攻式なものであるかぎり、その伝道に献身する者も英雄的心情を持つのは当然であろう。また送

- 191 -

り出す人々もそのように考えてしまう。しかし、英雄主義では伝道できない。とくにこうした形の海外伝道では、である。

私は伝道の労苦には、本質的に、地域的な違いはないのだと思っている。ポリビアで働いてきた私たちにくらべて、むしろ、日本の地方で働いている人々の方が、地味で報われることの少ない苦労を多く味わっているのではないだろうか。そして、その人々こそ祈りの支えをだれよりも多く必要としているのである。

二、三の親しい友人の強いすすめがあったので、ペンを取ることにしたのであるけれども、私は自分がなにをしてきたかということを書こうとは思わなかった。同じように伝道の労苦を味わっている多くの同労者の中で、平凡な、ごくありふれた人間にすぎない私が、どのように一人の伝道者として、その目を開かれつつ育ってきたのか、そのことを書いてみようと思ったのである。その意味で、この手記を一つの証しとして読んでいただけるのであったなら望外の幸いである。

家族のことについてももう少し書いてはという意見もあった。しかし、その点については、私の伝道者としての成長に関わりのあることだけにとどめておいた。

私のようなブルドーザー型の人間といっしょでは妻も苦労が多かったと思う。けれども、私たちはいつもいっしょに主に従って歩んできた。そのことが私たちにとってかけがえのない幸せの源泉であった。私たちはそのことを望んで結ばれたのである。それ故、私の伝道者としての成長は、私たち二人の成長にほかならない。「私たち」とできるだけ複数形を使っているのはそのためである。この手記を閉じるにあたって、私は月並な感謝の言葉を妻

には語るまいと思う。それよりも、妻といつしよに主に感謝をさ
さげたいと思っている。